
てがみ屋と水を運ぶ村

雨式藍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

てがみ屋と水を運ぶ村

【Nコード】

N46490

【作者名】

雨式藍

【あらすじ】

郵便局は潰れ、手紙を綴るための紙もなくなってしまった世界で、てがみを配り続ける、か弱き少女の物語。
もしよろしければ感想、批評をください 4月16日完結しました。

プロローグ（前書き）

初投稿になります。もし、よろしければ、感想、批評など残していただけると嬉しいです。

ブローグ

拝啓

惑星崩壊に向け連日の猛暑でございますが、いかがお過ごしでしょうか。

私たちの勤める政府も、この星と同じように崩壊寸前になっております。

早速ですが、貴方はこの壊れかけた世界を救う、メッセージャー使者に選ばれました。私たちはこれから貴方が一生、世界中の皆様に資源を提供することのみを考え、生活していただくことを望みます。使者になることに同意された方は、同封されているステッカーを右手の甲に貼り付けてください。貼り付けの際には必ず激痛を伴うのでご注意ください。また、ステッカーは二度と外す事が出来ませんので、自身の生命尽きる時まで世界の方々に尽力する事をご了承下さい。なお、質問・返品には一切応じられません。使者になりたくないという方は、必ずほかの方に送付するようにお願い致します。貴方様のご健康と、一生の不幸せをお祈り申し上げます。

敬具

二千三十年 三月二十一日

政府役人一同

第一話

もし受け取ったら、誰にも絶対に渡すな、と言われた。

局長は馬鹿でかい大きな手でソラの頭を軽くたたいてから、いつものようにそそくさどこかへ行ってしまった。局長と会うのはごくまれなことである。

それは楽しい時間のはずだった。いつもなら。

この間は違った。何でも地獄からの手紙、というのが出回っているらしい。局長と会ってから、ソラはそのことで頭がいっぱいになっってしまった。

今からちょうど三ヶ月前、ソラたちは手紙を配るために来た村で、局長とばったり会った。局長は背が高いので、人ごみの中にも頭が突き出していて、すぐに分かる。まっすぐに伸びた背筋にがちりとした身体。明るく短い茶髪を持ち主で、額にはいつも何かしら鉢巻を巻いている。ソラが声をかけると、彼は明るいオレンジ色の瞳を細めて口角を大きく吊り上げ、いつものように豪快に笑って、でもその後少し目を伏せた。彼は村のはずれにある空き家に入るよう、ソラたちに言って、彼女たちが入るなり、扉を閉め真剣な表情になった。

その空き家には誰も住んでいないようで、そのために薄く埃が積もっていたが、わりときれいな部屋だった。何も家具は置いておらず、窓が二つあるだけで、ソラは「少し寂しい部屋」という印象を受けた。カーテンは取り外されていて、明るい光が差し込み、ちらちらと舞う埃が光を反射して星屑のように光っている。

明るくて美しいその景色とは反対に、局長の表情は少しばかり暗く、ソラは不安になった。

局長は床に胡坐をかいて座り、その前にソラは膝を折りたたんで横座りした。

「あまり、良くないニュースだ」

何ですか、とソラが訊く前に、彼は続けた。

「地獄からの手紙って聞いたことあるか？」

黙って首を横に振ると、彼は人差し指を立てて、説明を始めた。

「それが、何でそういう風に呼ばれるのかっていうとな……受け取った奴がすごく苦しい思いをするからなんだそうだ」

「苦しい思い？」

聞き返すと、彼はあごに手を当てて少し首をかしげ、苦笑した。

明るいオレンジ色の瞳が彼女に向けられる。

「それが、オレも良く分からんのだ。何でも、ステッカーというやつが入っているそうだな」

「ステッカー？」

ステッカーといえば、シールとほぼ同義だ。何がどう、もらった人に苦しみを与えるのかよく分からない。

局長は唇をなめてから続ける。

「なんだかよく分からんが過去と未来をつなぐ、トンネルを作るらしい。人体の中にだ。それを通してこの時代に資源を持ってくるんだそうだ」

その返答にはどう反応していいか分からず、彼女は少し肩をすくめただけだった。

「壮大な話ですね」

「うむ。ただ、人間がトンネルになるっていうのがよく分からんのだが……そんなこと果たしてできるのか？」

「まあ、できたら、今はぜんぜん資源ないんだし……いいかなあ、なんて」

小声で呟くと、こつんと拳骨が振ってきた。顔をしかめて局長を見上げると、彼は鷹揚に笑っていた。

「それに、ひとつ腑に落ちないことがあってな」
「ん？」

局長は眉根を寄せて呻った。

「ステッカーは政府が作って、政府が配ったものらしいのだが……政府がそれを回収しようとしてるんだ。何かするつもりなんだろうが、その『何か』が何なのかがオレには分からない。だが、あいつらに渡せばろくなことはないだろう？」

だから、見つけたら大切に持つておくんだ。絶対にあいっらにつ渡すな。以上」

局長は一方的に言葉を押し付けた。

信書三原則、というものがある。昔よりも少し規制が緩くなったのだが、それでも、受取人が封を切らない限りは中を見てはいけないことになっている。しかし、その後はがみ屋が捨てるも持つておくも自由なはずだったのだが。

「な——」

何のために、そんな汚い手紙を守るんですか。言いかけたソラの言葉は遮られた。

「言わなくても分かるだろ？」

にこにこと偽りの笑顔を浮かべながら明るく言われても困る。頷くしかなかった。

「あ、そうだ」

局長は不意に声を上げて立ち上がり、扉を開けて外に出ると、外で待機していたダチヨウのような鳥の背中から何か取り、ソラの方へそれを投げた。

「え？」

受け取り損ねそうになりながらも、彼女はそれをしっかりと抱きとめた。大きな麻布の袋である。

視線を落とすとちらりと中身が見えた。内容までは見えなかったが中身は紙だ。ずっしりと重い。

「何ですか、これ」

局長は髪の毛をくしゃくしゃとかき回しながら少し眉尻を下げた。「すまん、ちょっと預かっておいてくれ。オレだけじゃ管理できなくなっただ」

ソラが袋を開けようとすると、局長が声で制止した。

「あー、中は見るな。いつかお前にも教えてやるから」

ソラは不思議そうに局長を見上げる。

「いいな」

「はい」

袋の中身と、先ほどの手紙の件が気になるので、明るく答えようとしたが口から出てきた返事はかすれた声になってしまった。

局長は沈んでいるソラの隣に歩み寄ってきて、彼女の肩を叩いた。

ソラは顔を少しだけ上げて彼をちらと見る。局長は悪戯を企む幼い子供のように、口角を吊り上げてにんまりと笑った。

「いいことを教えてやるう」

「……？」

そして、大きく胸を張って高らかに言った。

「タツノオトシゴの仲間にはタツノイトコとタツノハトコがいるぞうだぞ」

「は？」

また始まった。局長の必殺技、トリビア垂れ流しである。いつものように適当に聞き流すとするか。

「タツノイトコとタツノハトコは魚のようだぞ」

し、親戚か？ でも、それ以前に……。

「タツノオトシゴって、絶滅しませんでしたっけ？」

「あ」

雲ひとつない真つ青な空と対照的な殺伐とした砂漠は、どこまでも広がっていた。あたりを見渡してみても何も無い。そこに見えるのは地平線だけ。

そんな砂漠の真ん中を、オレンジ色の羽のダチョウのような大き

な鳥が二羽疾走している。鳥たちの上にはそれぞれ荷物が載せられていた。前には布袋。背中には太い平紐が巻かれ、それには鐙あぶみのよなものが取り付けられている。

「サナ、まだ着かないの？」

それに乗った少女がもう一羽のほうに乗っている少年に訊ねた。

明るい茶色の髪をしている彼女の名前は「星野ほしのソラ」。

くりくりとした琥珀色の瞳がとても魅力的な女の子である。短い髪は毛先に癖があり、肩の辺りでびよこんびよこんと踊るようにはねている。どちらかというと美しいというより、かわいらしいといった類の少女だ。

その彼女の腹が盛大に鳴った。

「お腹すいた。あーも、最近おいしいもの全然食べてないよね」

「しょうがねーだろ？ 我慢しろよ」

サナと呼ばれた少年、ぶっそっげさなめき仏桑花真行は眠そうに言葉を返した。ざんばらにかかる黒い前髪の下の深い藍色の瞳はめったに感情を宿さない。髪は男にしては長く、肩に着くぐらいの長さ。それを後ろでひとつ結びにしている。

「あ」

「何よ」

真行はソラの肩に手を伸ばし、何か取って砂だらけの地面に捨てた。ソラは眉をひそめてそれを見ようとした。が、彼女にはそれが何か分からなかった。

「何？」

横目で真行をちらりと見て訊ねる。

「糸くず」

「へーえ？」

ソラには糸くずをとってもらったにもかかわらず、礼を言う気なんてさらさらない。自分が乗っている大きな鳥の背中を、両手ではしん、と叩いた。

鳥はびっくりしたようだった。うまく走れずに、ふらふらと蛇行

した。しかし、ソラは鳥の体が揺れても全く気に留めない。

「何で捨てるかなあ、もつたいない」

それは最初、いつも低い声で始まる。

真行はまた始まったとばかりに盛大なため息を漏らしたが、それにもかかわらず、ソラは彼に指を突きつけた。

「布が何でできてるか知ってる？ 糸だよ糸！ 糸もより集めればこんなふうになんて布ができるわけ。分かってる？」

ソラは自分の制服の襟元を指でつまんで、見せ付けるように引っ張った。

「今自分が何したか分かっているの？ 布を作るための貴重な資源を砂漠に捨てたんだよ」

ソラの罵倒は続く。

「ああ、もつたいない、拾ってきてよ。あたしが大切に保管しとくから」

「知るか、自分で拾いに行けよ。どこあるか分かんねえよ」

「今のはポイ捨てだよ。そういうものを拾うのは捨てた人でしょ？」

「つか普通は糸くずとってくれたんだから礼言うところだろ」

真行はあきれ果てたように突っ込む。

「……」

ようやく止まった。実はこの少女、極度の節約癖があるのである。何かにつけて「もつたいない」を連呼。そのたびに真行は嘆息を漏らす羽目になる。

熱い太陽の光が容赦なく二人を焼く。真行は襟元を指でつまんで煽きながら、大きく息をつく。

「暇だし、見てみるか」

そして大きく伸びをして、あくびのせいで出てきた涙を拭きながら、ソラのほうに視線を向けた。ソラは彼から守るように鞆を隠す。「だめだめだめっ、信書三原則。『見ない、読まない、話さない』」
信書三原則とは手紙の送り主と受取人のプライバシーを保護するためにある原則のことだ。

手紙を運ぶ者は手紙を見ない、読まない、そして手紙の送り主や受け取り人、内容などについて人に話さない、という三つの決まりを守らなければならない。

二人は手紙を配ることを仕事とする、「てがみ屋」という職業に就いている。

「これだから任せらんないのよ」

わざとらしくあきれ声を出してみる。しかしそう言いつつも不満げな表情はソラの顔から消えて、いつの間にか明るい表情になっていた。

彼女は手紙を配ることが好きだった。特に受け取った人の笑顔を見るのが。

「でも、珍しいよね。こんな時代に手紙なんて」

「紙、高えからな。よっぽどの金持ちなんだろうな」

真行は嫌味つたらしく呟いた。

「でもやつぱさ、中身、気になるよね」

ソラは後ろに隠していた鞆から封筒を取り出し、手で中身の形を探るようにながらうつとりした表情になる。

「ラブレターかな。それともっ」

手紙を握ったまま手を胸の前で組んで妄想し始めたソラに、真行は冷たく言い放った。

「んなわけあるか」

「じゃあ何よ」

「この時代に手紙出す奴にろくな奴はいねえよ」

「……」

ソラだって分かっている。本当はラブレターなんてきれいな手紙を出す人なんて居ないことを。

真行は残酷な現実を平然と口にする。

ソラはその残酷な現実を受け止められないままにいるのに。

まだ心のどこかで以前までと同じように手紙を配れることを強く望んでいた。現実を認めたくない。まだ心の中では幸せな世界に居

るつもりでいたい。不可能なことなのは分かっている。

この時代に送られる手紙は数少なく、醜い。

人間は、自分たちの快適な生活のためにたくさんの資源を使った。自分たちが便利で快適な生活を送るために、生き物たちが苦しんでいるのも無視して、大量の資源、資源から作られた物を使い、この星の気温や海温が上昇しているというのに、異常気象がおこっていることも分かっているのに、どんどんそれらを廃棄した。

分かっているのに消費することをやめようとしなかった。

そのせいで、この星、とくにこの国には、資源というものがほとんどない。このあたりが砂漠であるのもそのせいだ。

もともと資源がなかったこの国は、木材を外国から輸入していた。しかし、あるきっかけで、外国からの木材の輸入経路が絶たれてしまったので自分たちで補わなくてはいけなくなった。

環境破壊が進むと叫んだ学者もいたが、人間たちは、それでもなお自分たちの生活を優先した。そのせいでこの辺りでも木が切られ、植林が間に合わず、このような状態になっている。

木材も石油も美しい水も食料もすべて使い果たしてしまったこの世界で、紙というものは異常な値段で売られていた。買うことができるのは、他人を蹴り落としてまでしてのし上がってきたこの時代の金持ちたち。彼らはそれを買ひ、酷く、醜い言葉を紡ぎ、それをてがみ屋に渡す。

手紙を配るのは好きだ。でも、そんな酷いものは、届けたくないし、見たくない。

その中のひとつ、「地獄からの手紙」を必ず守れと言われた。嫌だ。捨てたいくらいなのに。

「あのさ……」

「あ？」

「もし、見つけたら、絶対守れって、あたし……」
手綱を握った手に視線を落とす。

「ああ、変なやつ見つけたら誰にも渡すなって話？」

変なやつじゃなくて地獄からの手紙ね、と訂正を入れる。

「あたし弱いから。もう、あんたに預けたいくらい。……強くなりたいよ、そしたらもつと」

「弱い、か。お前女なんだからそんなさ、強くなりたいとか言わないでくれよ」

「あんたも男女差別するの」

ソラは女だからこうなんだ、といわれることをすごく嫌っていた。なんだか何もできないことの言い訳を女であることに逃げてしまっているようで嫌だったのだ。言い訳はしたくない。

「いや、全然そういうことじゃなくて。っーかさ、強い女って何？俺はさー、お前が筋肉もりもりになったら怖えからやめてくれつつってんだ」

「もりもり？」

「んじゃムキムキで」

言い直すな！

心の奥で突っ込む。確かに自分がそうになったら怖いかもしれない。いや、絶対に怖い。ホラーだ。

「あたしが言いたいのはそういうことじゃなくて」

「というわけだ。俺はお前に戦い方教える気はないしな。ヤだから。絶対」

華麗にスルーされてしまった。

「でもさ、あんた、全然筋肉ついてないのに、よく戦えるよね」

真行の体の線は細い。その上、背が男性の標準身長より低い。お世辞にも体格がいいとはいえないのだ。

「お前、筋肉の話好きだな。フェチか？もしかしてこっそり筋トレしてるとか……うわ、やめてくれ」

「話始めたのあんたでしょうが！」

ソラはその話題から離れようと、鳥の上に横向きに座りなおし、足をぶらぶらさせながらわざとらしく大きな声で言う。

「とにかく、この手紙で最後。手紙を配り終えるのは残念だけど、やーっと、あんたから解放される」

「俺も同感だ」

返事はすぐに返ってきた。無表情にさらりと言ってしまふものだから余計に腹が立つ。ソラは眉根を寄せる。

「まあ、客が減って喜ぶ元郵便局員もどうかと思うけどな」

指先で宙にくるくると円を描きながら真行が独り言をつぶやく。

その言葉に、ソラは真行の肩に手を乗せ、ぎゅうぎゅうと握りつぶした。

「肩こりと腰痛が持病の、老けた十七歳にいわれたくありませんけどねっ」

「いつ、や、やめ、やめろよ」

真行は肩を押さえたまま、もう片方の手でソラの手を邪険に振り払った。

「でも、お前、何でネクタイとか締めなかったんだ？ 一応仕事だろ。俺はお前が締めたところを見たことないし」

「そ、それは……」

ソラは自分の格好に赤面する。カーキ色の上着にカーキ色のズボン。ズボンの下には黒いブーツをはいている。襟元には白いマフラーを巻き、少し黒い色のついたゴーグルをかけて、頭にはバンダナを。

郵便局の制服である、作業着のような、ポケットがたくさんついたカーキ色の上着の下に普通はワイシャツを着てネクタイを締めるように決まっている。しかし、彼女は上着の下に白いＴシャツを着ているだけだ。

ネクタイが締められないからとは絶対に言えない。

「に、似合わないからよ。あんただって、ブーツ履いたことないじゃない」

真行は、ソラと同じ制服を着てはいるが、ブーツではなく真っ黒に白い紐のスニーカーを履いている。その代わり、黒いネクタイを

きちんと締めていた。

彼は勝ち誇ったような笑みを浮かべながら、ネクタイを少しだけゆるめる。

「俺は、本当に似合わないからだ」

「……」

どうやら、分かっていたようである。

第二話

そうこうしているうちに二人が手紙を渡す相手の村が見えてきた。砂漠の真ん中にぼつりとある小さな集落はなんだかとても寂しげである。しかし集落といっても、ほとんど崩れた家などの瓦礫の塊であつた。まともな家はどこにあるのだろうか。

この村に何があつたのか、そんなことは二人とも疑問に思わない。これが、普通、だからだ。

一昔前までは瓦礫だらけになっている村は異常だつた。政府の検査官がやってきて大騒ぎし、村人たちを悼むためにたくさんの花束が村の周りに手向けられていた。

しかし今は、検査官も来ないし、花も手向けられない。

国民のための政府は崩壊した。そして花もこの世界にはほとんどない。

国民のために動いてくれる政府はないから、資源は管理されなくなり、独占され、ますます一般人の手に渡らなくなった。減つてくる資源を求めて、村と村同士が紛争を起こしたりして一時期大変だつたのだが、今は落ち着いている。

資源が増えたわけではない。

もう、近くに村がなくなつた。たいてい、村を囲んでいるのは砂漠だ。

村の周りを一周してから、二人は辛うじて壊れた家屋につぶされていない道を見つけた。

「ここに、スナたちにいてもらおう」

ソラは鎧に足を掛けて地面に降り立つと、近くにあつた瓦礫に手綱をくくりつける。そして鳥の背中の明るいオレンジ色の羽を、愛おしそうになでた。

「お前なあ、ファミリアバードに名前付けんの、いい加減やめろよ」
鳥たちはファミリアバードというらしい。言葉が分かるのか、真

行の言葉にむつとしたように後ろ足で彼に砂をかけた。

さらさらとした砂が宙を雪のように舞い、真行はそれを手で払おうとするも、吸ってしまったらしくゲホゲホと咳き込んだ。砂が目に入ってしまったように目をつぶったまま、

「わ、分かったつ、分かったから」

両手でファミリアバードを制してなだめた。それを見てソラは忍び笑いを漏らす。

「ほつらびったりでしょ。サナに砂をかけるから『スナ』って命名したんだ」

「それでか……」

真行は体にかかった砂を振り払いながらファミリアバードを降り、もう一度咳き込んだ。

「て！ 今の納得するところじゃねえだろっ！ ……うえっ」

口を開いたとたん、肺に砂が流れ込んできたらしく、彼の咳はよりいっそうひどくなった。

砂を手で仰いでソラの方へ流そうと努力してみるも、失敗に終わった。

「どう？ 砂の味は」

「まずいに決まってんだろ、馬鹿かお前」

ソラは腕組みして、真行を見下ろす。

「おいしいって言いなさい」

「言つかよ」

「言いなさい」

「まずかったつ」

真行は立ち上がって一人ですたすたと歩いていく。ソラはあわててその後姿を追いかけた。

「ちょ、待ってよつ。ごめん、謝るから」

真行の肩に手をかけた瞬間だった。手の下のものがふいに消滅した——気がした。

「へ？」

何が起こったか一瞬分からなかった。体は重力に従って下へ。目を開けると視界に大量の砂が舞っていた。腰を打ったみたいだ。その辺りがじんじんと痛い。

「何すんのよっ」

「何も？」

ソラは服に付いた砂を、座り込んだままはたきながら真行をにらみつける。彼は「勝った」とばかりに笑っていた。

「女の子に対してそんなことするなんて最低っ。男として恥ずかしいの？」

「別に」とでも言うように、真行は少し肩を上げた。その仕草が妙に癪に障る。

「俺はお前の手を避けただけだぞ。それだけでぶっ倒れるお前が悪い。前に倒れすぎ。体重乗せすぎだろ？俺の肩にどんな負担をかけようとしたのか全く……」

ソラは何も言えなくなってしまう。

どうやら、ソラが手をかけようとした瞬間に真行はソラの手を避け、ソラはそれに反応し切れず、前に転倒してしまった……というわけらしい。

「まあお前だからしたんであって、ほかの奴にはこんなことしねえけど」

「あたしにもしないでよっ」

真行は、飛んできた小さな拳を軽くはたき、ソラのアミリアバードを恨めしげに見て、嘆息交じりに呟く。

「んでも……よくアミリアバードが人間になつてくれたもんだ」
アミリアバードは温和な性格で、数多くいるモンスターの中でも人間になつきやすい。それはとても凄いことで、奇跡に近い。食料や水がなくなつて、住むところが砂漠に埋めつくされて動物たちは生活が苦しくなった。それも、人間たちのせいだ。それに加え、人間たちが大量消費の過程で出したものによって、オゾン層というこの星を守っていたものが破壊され、生物たちにとって有毒な

「紫外線」というものが降り注ぐようになっていった。また星の気温が上がり、そのせいで海面が上昇しはじめた。ただでさえ少ない住処がさらに減っていく。

そして、追い詰められた彼らがとった行動は『進化』。

彼らはそうすることにより、凶暴なモンスターと化し、人間たちから食料を奪い取るようになった。村や町が襲われ、旅人たちが襲われることも少なくなる。

生き残るために進化した動物たちは強く、丈夫で、そして……
飢えている。

まず彼らに出会えば、何人でかかっていつでも勝ち目はない。手紙を配るためにあちこち旅する二人が彼らに出会わないのは神様がもたらしてくれた、数少ない幸運の中のひとつなのだろう。

「そう思ってるならファミリアバードにちよつとは感謝したら？
自分たちの住むところを奪った人間を恨まなかったんだからさ」

「感謝なんてしねえよ。偶然だろ？」

「そうかもしれないけど……」

ソラはファミリアバードの毛をなでる。まぶたを優しくに少しだけ伏せた。

そして急に振り返ると、大きく息を吸って、

「行こうっ」

そう言って真行の手を引つ張って走り出す。真行がわざとらしく大きなため息をついたので、ソラは仕方なく止まった。

「ほら早くっ、時間がもつたじゃないじゃない」

彼女は腕を二、三度引つ張ってせかしたが、真行は一向に急ぐ気配を見せない。

ソラは急ぐことを不承不承あきらめ、人通りのまったくない砂だらけの道を二人並んでゆつくり歩いた。

「ここは、一段とひでえな」

生き物の気配が感じられない、かわいた集落だった。やがてところどころに、黄ばんだ布で作られたテントが見えはじめた。

第三話

二人は地図で場所を確認しながら大きな石を飛び越え、倒れた家屋をどけ、こぢんまりとしたわらの家（家と呼べるものかどうかは疑問だが）に辿り着いた。

「すいませーん、楠木くすのきさんのお宅ですか」

ソラが声を張り上げると、がっちりとした男の人が出てきた。息を呑んだ。

真行の背があまり高いほうではないこともあるが、彼と比べると縦に頭二つ分くらいの差がある。

「どうぞ」

仏頂面で封筒を差し出す真行。普通はこれだけ威圧感のある人が出てきたら退くところだが、彼はまったく動揺しない。

「す、すみません。失礼しました」

ソラは真行を横に張り倒し、手紙を手からもぎ取って、男に差し出す。

深々と腰から頭を下げ、様子を窺いながらゆっくり顔を上げた。
「どうも」

日に焼けた顔に白い歯が際立つ、笑顔が素敵な人だ。その笑顔にソラのこわばった顔がほぐれた。

「お前たちが噂の戦う郵便局員、『てがみ屋』さんか。お嬢ちゃんはそのなになさくてかわいらしいのに、それで戦うっていうんだからすごいもんだな」

いつも言われる言葉。ただ、ソラはその言葉を素直に喜べない。
「あのう、あたしは戦わないんですけど……」

苦笑しながら言葉を返すと、男は少し困った顔になる。

「そうか。そうだろうな、女の子だもんな」

そしてこれもいつも言われる言葉。彼女は営業用の笑顔で、さらにその言葉を流した。しかし、ソラはこの言葉が好きではなかつ

た。なんだか「女」であることが戦えないことの言い訳みたいで、「役立たず」「根性なし」の焼印を胸に押し当てられたような気分になる。

そんなことは気にもかけず、自分の言葉をフォローできたと安心した男は封を切って、嬉しそうに中身を取り出した。手紙など、来たことがある人のほうが珍しい時代だ。ニコニコするのは当然といえる。

「どれどれ……」

彼のごつごつした指が手紙を丁寧を開いた。彼は文面に視線を落とす。

「これが……」

次の瞬間、予想外のことが起こった。

片方の手に手紙を叩きつけるようにして折りたたんだ彼は、こちらを見下ろし口の端を大きく吊り上げて、にんまりと笑ったのだ。

そして、受け取った手紙をまるでごみを捨てるかのように、後方に放った。

「な、なんてこと……」

「まったくこんな幸運なことがあるとはな……人生捨てたもんじゃないな」

真行が眉根を寄せて、男をにらみつけた。

「何わけ分かんねえこと言ってるんだよ」

ソラも訝しげに男を見上げる。

そのときだった。男の後ろに黒い影が見えたのは。

「これで、俺もようやくいい生活ができるってわけだ。なあ、政府のお役人さんよ」

奥から出てきたのは漆黒のシャツとズボンを身につけ、それと対象的な純白のネクタイを締めた二人の男たちだった。

「政府の……っ」

ソラは思わず拳を硬く握り締めた。政府の制服は前にたった一度だけ、見たことがあった。

いい思い出はないので、思い出したくないが。

「ご協力には感謝します」

一人の役人が冷たい視線を楠木に投げる。そこには感謝というものは微塵も感じられなかった。

「しかし、我々にも事情というものがありまして。お約束したおりのことは出来かねます」

もう一人が突き放すように冷たく言い放つ。

「んだと……せつかく協力してやったつつのに！」

楠木は激昂して拳を振り下ろそうとしたが、それは敵わなかった。振り上げられ、叩き込まれそうになった拳を、役人はやわらかく受け止めて流した。そして楠木の大きな体を支える足に、自分の足をかけ、まるで草を刈るかのように楠木の足を刈った。

「うぐッ」

楠木は前に倒れ、顎を地面に強打した。

「黙ってくださると助かるのですが」

敬語になっていない言葉を感情のこもらない声で口にし、役人は楠木の背中に靴底をぐりぐりとねじ込む。

ソラは一瞬絶句したが、すぐに我に返った。

「もしかして、これが、地獄からの手紙だったってこと？」

真行の方をちらりと見ると、「そうらしいな」と返ってきた。

「しかし、私たちの目的はこれだけじゃない」

一人の役人は腰元のナイフの柄に手をかけ、もう一人は胸の前に拳をあげる。

「情報を返していただきたい。あなた方の局長が奪っていった我々の大事な宝を。そのために私たちはわざわざこの手紙が送られる場所を探してここににいるのだから」

「だいじな宝？ 何のこと？」

「うちの局長が何か政府にしたの？」

真行の腰がぐっと低くなった。

「死にますか。あなた方も——？」

ということは殺されたメンバーもいるのか。すくんでしまったソラに真行が目配せした。

「どうすんの？」

手紙を奪い返すか、逃げるか、訊いているのだろう。相手は二人だ。本来ならソラが戦わないといけなはずなのに、真行は相手が二人でも奪い返すつもりでいるのか。

逃げる——そう返そうとした。でも手紙が。

言いかけたとき、真行は小さく笑ってみせた。

「迷うなら奪い返すぞ。お前は人の心配すんなよ。こんなときばっか」

全部読まれていた。すごく悔しくて、情けない。

自分ももつと強ければ。

いつも思つて、いつも結局何もできない。

ソラは鞆を抱きしめて後ろに下がった。

役人の一人がにたりとほくそ笑んだ。真行一人で自分たちから手紙を奪い返せるわけがないと思つたのだろう。ソラは二十メートルほど彼らから離れたところから真行を見守ることにした。

「お前ら、何勝手に人のもの取つてんだよ？ 窃盗罪で訴えるぞ」

真行が一言からかうように言つた。その言葉は役人に鼻で笑われる。

「この手紙も、貴方たちがもつ我々の情報も、もともと私たちのものですからして返していただかなければ。とくに情報のほうは。あなた方の局長の趣味のために盗られていいほど軽いものじゃない」

局長の趣味。役人はそう言つた。ソラはその一言でぴんと来た。

局長がやりそうなことなら分かる。あの人は大の情報好きで、「人が知らないことを知っているのはすばらしいことだ！」とか言うのはしょっちゅうだ。手紙を配る先々で、どうでもいいことを聞いてきて、ソラたちに自慢することが度々あった。調子に乗ってくると

声がどんどん大きくなるので話を聞くソラたちにしてみれば、話を聞く時間は苦痛でしかなかった。一応上司だから耳をふさぐわけにはいかないし。鼓膜が破れそうになるほどの大音量でまくし立てるものだから、耳が痛くて仕方ない。

だが、たいていはどうでもいい情報、というよりも雑学やトリビアで「あーはい、そーなんですかー」で終わってしまうようなものだったはずだが。

今回はそうではないらしい。それもソラたちが持っている。つまり局長が預けたと。

「あ」

ソラは自分が抱いている鞆を見下ろした。

まさか。

「すまん、ちょっと預かっておいてくれ。オレだけじゃ管理できなくなっただけ」

そう言っていたはずだ。

確か、中は紙だったはず。その紙に何か大事な情報がたくさん書かれているのかもしれない。

もしかして、政府が狙っているのはこれか。

「なんで俺たちが局長のへまの尻拭いしなきゃなんねえんだよ」

真行も気づいたらしく、大きいため息をついた。

「でも、大事なもんなら渡すわけにはいかねえ。それに手紙は守れって言われてんだ。返してもらおう」

真行が地面を強く蹴って駆け出した。ナイフの柄に手をかけた役人の懐に一瞬でもぐりこみ、思いっきり当て身をした。

「このっ」

役人の手はナイフの柄の上にあった。バランスを崩しつつも、抜こうとしたナイフを真行は手刀で地面に叩き落とし、踏み込んだ足を軸にして、反対の右足でナイフを遠くへ蹴り飛ばした。

しかし、その次の瞬間にはもう一人の素手の役人が真行の目前に迫っていた。

「役人を舐めるな」

もう一人の役人は素手で戦っただけあって、身体能力に自信があるらしい。確かにその動きは速かった。

鋭い拳を真行に叩きつける。真行はひたすら受け流すしかないらしく、押されている。

そして、後ろの役人もバランスを取り戻してしまった。

挟まれた——そう思った瞬間、後ろから脇に手が回され、真行の上半身ががちり固められた。

「くそッ……！」

真行は奥歯をかみ締めて、前の役人の拳打を一発、甘んじて受けた。

腹部に入った拳を見て、ソラの心臓がどくん、と跳ね上がった。痛い——。

しかし真行は二発目は当てさせなかった。

肩を固められて腕を力ずくで一気に引き剥がす。

「『役人舐めん』だア？……俺も元役人なんだけど？」

真行は前の役人の一蹴を体を地面にぐつと引き寄せて避けた。

手紙の位置を確認しているのか、藍色の瞳が静かに左から右へと動いた。

手紙を持っているのは前の役人だった。

足を蹴り上げた反動で、ポケットから手紙の端がはみ出していたのだ。

「何ふざけたこと言っ……がッ」

真行は後ろの役人の足の甲を踏み潰して跳躍。

その勢いで前の役人に一気に迫り、手紙をポケットから抜いた。

「しまッ……」

役人が振り向いたがもう遅い。

勢いを殺さずに真行は役人の横を駆けぬける。

「ソラッ！」

ぼうつとしていたソラは真行の一喝でわれに返った。

「うんっ」

ソラは頷いてから、慌てて走り出した。

ファミリアバードまで逃げ切ることができれば、後は何とかなる。
一本しかない道を、必死に駆けた。

後ろからは、黒服の男たちが追ってくる。

ソラは足を必死に動かす。訓練されている政府の役人とは違い、
ソラは普通の女の子でしかない。追いつかれそうで、迫ってくる男
たちが怖い。

真行が隣に追いついた。隣を少し見て、前に視線を戻すと、ファミ
リアバードが見えてきていた。

「急げ！」

真行がソラの腰を押して、自分も加速した。

ソラは何とかファミリアバードに飛び乗って、手綱を握り、
「スナっ」

何とか口にすると、全体重をファミリアバードに預けた。

ファミリアバードが走り出す。黒服の男たちと集落はだんだん小
さくなっていき、やがて見えなくなった。

「セーフ……」

ソラはファミリアバードに倒れこみ、うつ、と呻った。

「疲れた……」

第四話

集落が見えなくなっところ、真行は自分のファミリアバードの速度を落とした。

ソラもそれに倣う。そうすると、目の前に無言で手紙が差し出された。

ソラは俯いていたのだが、顔を上げて真行から手紙を受け取った。

「あ、ありがと……。怪我不い？」

「無い。よっぽど普段のお前からの暴力の方が身にこたえてんだけど」

淡々とした声音でソラに嫌味を言ってくる。ソラは無視して少し曲がった手紙に目を落とした。

「あ……。ちよつと曲がっちまったかも。わりいな」

そう言ってファミリアバードの大きな頭に顎を乗せた。

ソラは手紙の全文にさつと目を通す。

開けられた手紙は見てしまっても大丈夫———そのように信書三原則は捻じ曲げられていた。

どうせそんな汚い手紙を受け取ってくれる人はいないから。

規則が変わったのは、汚い手紙を書く金持ちたちのせいだ。

喉の奥が熱い。何でこんなものが、あたしたちのところに、と出かかった言葉を飲み込む。

「政府がなにやろうとしてるか知ってる？」

倦怠感まるだしの表情で真行はこちらを見た。

「何で俺に訊く？」

「だってあんた、もともと政府の役人でしょ？」

真行は昔、政府の役人だった。初めててがみ屋———そのときはまだ郵便局であつたが———にやってきたとき、真行は「俺は元政府の役人だ」と開口一番、名乗った。政府の悪政は酷く、政府の元役人だと名乗るだけで国民の怒りを煽るはずであるのに、彼はソラの前

で、局長の前ではつきりと言い切った。

それはすなわち、駄目ならさつさと追い出せ、ということ。

局長は迷った挙句、あいつなら大丈夫そうだ、と郵便局員の仲間に入れた。

てがみ屋は、もともとあった「郵便局」という組織が元になつてできた組織である。「郵便局」という組織自体は運営することが困難になり、潰れてしまった。

仕事をするどころか、生きていくだけで大変な世の中に変わっていったからだ。

まず政府が潰れた。

国はそれまで、自分たちでまかなうことができないお金を、外国から借りて政治を行っていた。その借金は増えていく一方だった。

そして、二〇二十年になつて資源が急に無くなった。

政府が溜め込んでいた借金を返済できず、財政破綻して、外国から買える食糧が無くなったせいだった。もともとこの国は面積が小さく、土地も肥えていなかったため、なかなか食料が入手できなかった。今までは外国から輸入して補っていたのだが、その生命線が、ぷつり、と切れてしまった。

食料は足りず、価値はぐんぐん上がった。

それを一般の人間が買えるはずもなく、貧しい人間は死んでいき、少し金のある人間は、土地を買って、自給自足生活を始めた。貧しくも金持ちでもなかった一般人は何人かで集まり、自分たちの全財産を売り払って、みんなで土地を買い、村を作った。

政府は、国民の貧しい生活をどうにかしようとした。そして、何とかしてお金を作ろうと試行錯誤しているうちに、公務員の給料を削減する、という考えに至った。

今までもらえていた給料がもらえない、その貧しさに耐え切れなかった公務員たちがストライキを起こした。

国の機関はもう動かなくなった。

お金も無い。

政府が潰れた。

食べ物奪い合い、同じ国の人間同士が殺しあうようになっていく中で、仕事などできるはずもなく、その中で郵便局も同じように自然消滅していった。

しかし、いつまでも食べ物を奪い合い、争っているわけではなかった。人間が減れば、食べ物は手に入れられるようになる。

つり合いが取れる、のだ。

運良く生き残った何人かの元郵便局員は皆同じように手紙が好きだった。それから、手紙を配ることも。

「乾いた世界に潤いを——心を伝えられたらいい」

そう言い出した男が、彼らに推されて、てがみ屋局長になった。

手紙は心を伝えるためのとても素敵な媒体だから、未来でオレたちのように苦しむ奴らに伝えてあげるんだ。資源はあげられそうにないけれど。

それが、てがみ屋が発足した理由。

その一方、もはや名ばかりになった政府を、力のある金持ちたちが武器を買い、力づくでのつとった。

その後、数年経って、何人かの金持ちたちが集まって、政府を立て直した。

しかし、その立ち直った政府は、今までの「政府」ではなかった。彼らはめちやくちな政策を始めた。自己中心的な、醜い政治を。

そのひとつが「子供狩り」である。

まだ、幼く、考え方もしっかりしていない子供を無理やり教育し、政府の役人にしてしまおう、という政策である。要するに人員が足りない政府が子供たちを洗脳し、仲間に入れようとしたのだ。

真行もその「子供狩り」によって役人になつたらしい。

政府は金持ちたちの手によって、まだ存在してはいる。だがもう政府の役割を果たしていない。政府は自分たちのために金を集めているのだ。もう殆ど無い資源を買うために。

国民のことなんて少しも考えてはいないのだ。

ソラはごめん、と真行に頭を下げた。

「知るわけないよね。そうだよ。地獄からの手紙って——一体何のためにあるのかなんて」

すごく悔しかった。どうしてこんなものが許されるのか。それを守れだなんて。わけが分からない。

『拝啓

惑星崩壊に向け連日の猛暑でございますが、いかがお過ごしでしょうか。

私たちの勤める政府も、この星と同じように崩壊寸前になっております。

早速ですが、貴方はこの壊れかけた世界を救う、メッセンジャー使者に選ばれました。私たちはこれから貴方が一生、世界中の皆様に資源を提供することのみを考え、生活していただくことを望みます。使者になることに同意された方は、同封されているステッカーを右手の甲に貼り付けてください。貼り付けの際には必ず激痛を伴うのでご注意ください。また、ステッカーは二度と外す事が出来ませんので、自身の生命尽きる時まで世界の方々に尽力する事をご了承下さい。

なお、質問・返品には一切応じられません。使者になりたいくないという方は、必ずほかの方に送付するようにお願い致します。

貴方様のご健康と、一生の不幸せをお祈り申し上げます。

敬具

二千三十年 三月二十一日

政府役人一同

「こんなの……ありえないって」

使者になった者は、トンネルを作るときに、体が張り裂けるほどの痛みを感じるという。

しかも、他の人間に存在が知られてしまえば一日中、資源を出さなければいけないことになるだろう。資源が欲しい者はこの世にたくさんいる。精神、身体的にも疲れきってしまう。それに、ステッカーは一度貼ったら、もう二度と外れないのだ。

死ぬまで人間の道具になる。これが、地獄からの手紙、そして、政府の考え。

「律儀に変な敬語なんて使っちゃってさ、敬語になってないっての。こんな手紙、ありえないから。ありえないから——手紙は何のためにあると思ってるのよ、政府は」

殴り書きのような汚い文字で、そしてボロボロの紙切れに書かれた文面は、酷いものだった。

「もう、前みたいに、手紙を配ることはできないってことかな……」
今までのように手紙を配りたい。でも今配られる手紙は何もかも汚い手紙で。

ぎゅっと鞆を抱き寄せる。その瞳には不安が浮かんでいた。鞆をくしゃくしゃになるまできつく握り締めて、唇をかんだ。

「おかしいよ。何であたしたち、変な手紙ばかり配んなきゃなんないの？ もらって泣いてる人、苦しんでる人、たくさんいるのに」
「その……未来に手紙をつなぐために必要なことなんだろう？」

真行の答えは正しい。どんなに汚い手紙でもてがみ屋が配り続けるのは、もし、心のこもった大事な手紙を出したい人がいたときに、きちんと出せるようにするためだ。

そのときにてがみ屋が消滅してしまっていたなら、手紙を配る人はいなくなる。

「でも、もし配る前に見ることができたら……だれも傷つかなくて済むのに」

配る前に何の手紙か分かっていたなら、と思うことが最近多々ある。しかし、配る前に中身を見てしまったらてがみ屋の信用を失うことになる。

今は汚い手紙しかない。それでも手紙は手紙だ。もし、てがみ屋がそれを見て、私情の下に配る手紙を取捨選択しているとしたら。それはどんな理由であれ、許されることではない。

そんなてがみ屋に、手紙を渡す人は減っていくだろう。この先、手紙というものの存在はなくなってしまうし、配られることなどもつてのほかだ。今はただ耐え続けて、きれいな手紙が出されることを待つことしかできない。

ソラの鞆の中にも、汚い手紙の数々が眠っていた。

てがみ屋が決まりを守らないと、手紙は——消える。

ファミリアバードは同じリズムを刻みながらゆっくりゆれる。青い空を見上げると、空もゆっくり揺れていた。

悩み事ができると、必ずこうする。

彼女を手紙と出会わせてくれた人が、そう言っていたから。

こうすれば、相手に涙が見えなくて済むんだそうだ。逆に、別に泣きたくなくても、不意に出てきてしまうことがあるけれど。

このときは、後者のほうだった。

喉のおくがつうんとしてきて、目に熱い液体が溜まってくる。

もう、きれいな手紙を配ることはできないのだろうか。何でこんなものを書くのか、書く者の気が知れない。

前まで手紙はこんなものではなかったはずなのに。誰かの笑顔を作るためのものであったはずなのに。

あの人に誘われて、初めて手紙を配ったのは、五年前になる。ソラの手はまだ小さかった。まだ上手く言葉も紡げなかった。しかし、無理やり押し出すようにして渡した手紙を、その人は大事そうに両手で包み込んで、「ありがとう」と言っただ。

ソラはたった一人の、別にきれいでもないおばさんの笑顔が嬉しかった。眩しかった。

だから——自分の周りから全くなってしまった笑顔を、そうすることで見られるのなら、この仕事をしてもいいかもしれないと思った。

笑顔を見る。たったそれだけのために。

笑顔の意味を知らない人はそんなことを言う。

でも、笑顔にはすごく不思議な力がある、とソラは思っている。

誰かが笑えば、自分も楽しくなる。

誰かがまぶたを伏せれば、自分も悲しくなる。

笑顔は、人を元気にする。

笑顔は、自分を支える力になってくれる。

そう信じていたから、今まで続けて来れたのに。

笑顔のために配れる手紙は、もう——ない。

「はいはい、サボってないで手伝え」

額をぺしん、と軽くはたかれ、ソラは思わず目をつぶってしまった。気がつくと揺れが収まっていて、ファミリアバードは止まっているようだった。真行が止めたのだらう。彼は地面に立っていて、脇には木片をはさんでいた。手伝えというのは木片拾いのことだらう。砂漠の砂に埋もれかけている木片のほうに彼は近づいていく。真行は木工細工が大変うまいので、よく、こんなごみから皿やら何

やら作っては店に売って、そのお金を生活の足しにしているのだ。だから時々、村で使えそうな材料を見つけたら拾っておくのだ。

「さっきの集落で拾うつもりだったのにさ、役人が追っかけてこなければ良かったのに。ったく局長は何を」

ぶつぶつばやきながら真行は腰を折りたたんで木片を拾う。やり返そうかと思つたが、なんだか元気が出なかった。自然と彼をぼつと見ているだけの状態になる。

「どうしたんだよ」

視線に気づいたのか、腰を曲げたまま、振り返らずにさりげなく声をかけてきた。

「いや、ちよつとき、悔しかったんだ」

両方の手の指を絡ませて、いじくりまわしながら呟くように返答する。

真行は腰を折りたたんで、傍に落ちていた木片の中できれいなものをいくつか選び、両腕に抱えて立ち上がる。

「何が」

分かっているくせに、あえて訊く。少し腹が立つけれど、いつもすんなり言葉が出る。

「どうにかできないのになつて……もつとき、この世界に食べ物とか燃料があれば、こんなことにならなかったのになつて。ちゃんとした手紙を、配りたい」

「馬鹿かお前」

「馬鹿つて何よっ」

拾った木片をファミリアバードの体にかけてある大きめの鞆に詰め込んだ彼は、肩をまわしながら言った。

「いまさらそんなこと考えてもどうにもならねえつて。それにそんなこと、考えるもんじゃねえよ。さっきまで配り終わってせいせいするとか言つてたくせに」

「そんなことは一言も言つてません。あたしは『あんたと離れられてせいせいする』って言つたの」

真行はその言葉を無視して、ファミリアバードに手について軽々と飛び乗った。

ソラはわざとらしく大きなため息をついて、ファミリアバードにまたがった。

ほんの少しだけど、心配してくれているのが分かって、本当に本当に少しだけど、心配させないように頑張ろうと思った。

「わざと言ってるんでしょ」

真行は肩をすくめ、そのせいで肩が痛かったのか、顔をしかめた。そして、小さく「肩を上下させる運動はやめよう」と呟いて、ソラのほうに向き直った。

「その、『地獄からの手紙』を守ることも、手紙の存続に関わってんじゃないか？」

局長は本当に大事なことしか言わない。無駄知識はべらべら喋るが、手紙と、てがみ屋に関しては。

「でも、あたし、守れないよ」

自分の非力さに失望する。手紙を守るために大事なことに、それを自分ができないことが悔しい。

手紙が好きなのに、何もできない。

「やっぱ、あんたに預けたい。だめ？」

「だめなんだろう？」軽い返事。真行は元政府の役人だから、いくら信用されたとしても、絶対に手紙を持たせてもらえない。いつ裏切るか分からないからだ。

ソラが守らないといけない。

ソラはきちんとファミリアバードの背に座りなおし、しばらく真行に背を向けて黙り込んでいたが、不意に振り返った。

「じゃあ、もしあたしがこれを守るために死んだらどうする？」

「地獄からの手紙」守りきれんのだろうか。ちいさな両手でそれを包む。

そして、手紙を鞆にしまい、鞆についた、大きなボタンを留めてから、手綱をしっかりと握り、ファミリアバードを歩かせ始めた。

真行もその後続く。

「俺の肩と腰の天敵がいなくなってせいせいするかもなー」

「何それ。酷くない？ 大体さーあんたさー」

ソラは不満をこぼしながら真行を睨みつける。

彼の上着に泥でも塗ってやろうかと、ソラは足元を見下ろす。

無理だ。

水がないのだ。あのサラサラの砂などでは奴の背中を汚すことはできない。

「お」

突然声を上げた真行を、ソラはまるで狼のように睨み付けた。

ところが……。

「村だ」

その一言でソラの態度がコロリと変わった。

「村あ？」

目をキラキラと輝かせ、身を乗り出して、危うくファミリアバードから落ちそうになった。

ここから見る限り「普通の」村だった。きちんと家が「建っている」。

その村の後ろには海が見えた。

「へえ、海の近くの村なんて、久しぶりだね」

「食い意地が 張ってばかり バカオンナ」

感情のこもっていない口調で川柳を詠んで真行はソラをあおった。ソラは聞いていないふりをしてごまかそうとしたが、彼はもう一度しつこく、そして詳しく言ってきた。

「どーせ、魚が食えるとも思ってたんだろう？」

「ま、まさかあ……魚なんて関係ないよ？ ていうかさーなかなか魚なんて食べられないんだから……そんなバカにしないでしょ……？」

ソラはファミリアバードに座りなおし、凶星だったがごまかそうとした。

「魚なんだな」

ソラは「まっさかー……」と顔を背けてとぼけた声で返す。

「なるほど。よく分かった。まあいいんじゃないか？」

そう言われて、彼のほうに視線を戻す。

「……」

「俺も腹減ってるし」

この話題はさすがに真行もそこまで攻めてこなかった。てがみ屋の二人にとっては、新鮮な食べ物が食べられるのは珍しいことだからだ。

第五話

村の入り口には崩れかけた木の板が落ちていた。この村の案内用の看板だつたらしく、地図はほとんど消えていて何がなんだか分からなかったが、辛うじて村の名前は分かった。

かやきむら
「香焼村」というらしい。

名前からすると、昔は良い香りが香っていたのかもしれないが、今やその面影は残っていない。代わりに腐った水のおいが漂っていた。

「なによこれ」

思わず鼻をつまんでしまう。村の人たちに失礼だというのは分かっている。

でも酷かった。

ソラたちから見て右手にはボロボロの船が、ごみ置き場におかれているかのような汚い状態で浮かんでいた。そこは造船所だったようだ。今でもドックがあり、そこには造りかけの船が放置されているのが見えた。腐った水のおいに混ざっているのは海に沈んだ錆のおいか。

船はもう原型をとどめていないものもあり、錆で覆われて、まるで岩の塊みたいなものもあった。

二人がここに来たのは初めてだ。先ほどの集落と違って、ここはわりと賑やかである。

ソラは恐る恐る鼻をつまんでいる手を離して、造船所と反対側の左手のほうを見渡す。

左手にはレンガ造りの家が立ち並んでいた。レンガ造りだから家は丈夫そうかといえはそうでもない。洪水でも起れば流されてしまいそうなほど家々は傷んでいた。

レンガが崩れ、その崩れたレンガがなだれを起こしている家もある。

る。

その家々の間の路地には地面に敷物をしいてあぐらをかき、座り込んで商品を客に見せている人たちがちらほら見える。この村の物品交換所、とてもいったところか。

「お世辞にもきれいな村とはいえないね。これじゃあ、魚なんて……」

ふて腐れたように不満を吐き出した瞬間、不意に声をかけられた。「こんにちは」

焦って顔をそむけたソラを嘲笑うかのように、真行は声をかけてきた人をまっすぐに見据えた。

この野郎、覚えてろよ。という言葉を読み込み、作り笑いを浮かべてその人のほうへ向き直る。

中年の女性だった。若い人以外の人間がいるということは村がまだ元氣な証拠である。本当に消えてしまいそうな村は、体が弱い者から順に死んでいく。だから、若い男ばかりしかない。

彼女は頭から日差し避けか、白っぽい布で全身を覆い、薄い黒色のレンズのサングラスをかけ、エプロンのような布を腰に巻いて、かごを提げていた。なんとも奇妙な格好ではあるが、この星に降り注いでいる紫外線から身を守るためには良い格好だろう。かこの中は土で汚れた数個の野菜だった。いかにも採りたて、といった感じである。ここは結構農業では成功している、裕福なほうの村なのだろう。村には貧富の差が結構あり、食べ物を手に入れることがとても困難な村と、村人が生活していくためには必要なものは全て補える村とがある。

「旅人さんですか」

「いえ、てがみ屋です」

ソラが微笑んで答えると、女は不思議そうに首をかしげた。

「あら、でもこの間、郵便局は廃止になったじゃない」

「はい。でも、あたしたちは手紙を届けたくて続けてるんです。何かお手紙とかあったら運びますよ？」

訊くと、女は手をひらひらと振った。

「やあねえ。あたしたちにそんな高価なものは書けないわよ」

「そ、そうですか……」

ソラは残念そうに肩を落とす。

そんなソラに代わって、真行が尋ねる。

「このあたりに、警察官いないっすか？」

「何でそんなこと訊くのよ」

乱暴な言葉遣いも気に入らなかったが、なぜそんなことを彼女に聞くのか不審に思ったので、彼をにらみ上げてぼそぼそと訊く。

「ステッカーのこと知りたいだろ？」

当然のように返してきた。その余裕っぷりが癪に障る。

「知ってどうするの」

「お前が俺に『政府が何しようとしてるか知ってる？』って訊いたんだろ？ ステッカーがどんなものか分かれれば、少しは分かるってもんだろ？」

あ、そうか。納得してしまっただけに、急に悔しくなった。

「何だお前、もしかして本当に魚食うつもりだけだったのか？ お

前……バ」

そしてこの追い討ちだ。黙れといわんばかりにソラは拳を彼の腰につき立てた。

「いつてエ……ッ」

真行が腰を押さえて苦い顔になる。

「馬鹿に馬鹿って言われる筋合いは無いから」

フン、と鼻で笑うと、真行は「オイでめえ何しやがる」と言いたそうな顔でソラをにらんできた。しかしそれは当然スルーだ。

「このあたりに警察官はいませんか？」

ソラはにこやかに何事も無かったかのように言い直す。女は苦笑を浮かべながら答えてくれた。

「警察官？ ああ、麗花君なら、ここからもつと奥の造船所跡のほうで船をいじってると思うけど」

「レイカ？」

「ああ……でも、彼は……」

なぜか女は言葉を濁らせる。

「どうしたんですか？」

「あの子は、姉不孝のバカ弟だって、ツマハジキされてるのよ」

そう言いながら、「レイカ」という警察官を嘲笑うかのように、唇を歪ませた。人は誰かの悪口を言うときに醜い顔になると思う。女はそんな顔をしていた。

「他に、警察官はいないっすか？」

真行が腰に手を当てる苦しそうな顔をしていたせいだろう。彼女は肩を小さく揺らして笑った。

「いないと思うけど……それに、政府は潰れちゃったじゃない？だから、警察官も正式な仕事じゃなくなっちゃったみたいで。最近はおろくな仕事もせず、船をいじってるみたい」

そして、急に声色を変えた。

「あの子さえしっかりしていれば、この村はこんなことにはならなかったかもしれないのに……何もかもあの子のせいなのよ。この村が臭いのも全部」

それはソラに向かって言ったのだろうか。しっかり話を聞かれていたらしい。しかし、眉をひそめるソラの隣で、真行がはつきりと言いつつ切った。

「それは違うと思いますよ」

「ちよつとあんた何言い出すの」

訝しげな顔で彼を見上げる。地域住民と争うと後が面倒だし、仕事が進まないので出すぎた発言は謹んでもらいたいものだ。

しかしソラの静かな制止は気にも留めず、真行は口を開く。

「村っていうのは一人で作るものじゃありません。一人で作れるものではないし、変えられるものでもない。僕は、全員で協力してこそ、よい村ができると思います」

「あの、え、えつと……ごめんなさい」

あつけにとられているおばさんに頭を下げ、ソラは謝った。

「いや、いいのよ」

少しだけ声が冷たかった。そんな冷たい返事を残して、彼女は踵を返して足早に遠ざかっていく。その動作もどこか乱雑で、彼女が相当怒っていることは頭を下げていても分かった。

「あの、ありがとうございます」

耳に届くようにきちんと礼を言ってから、彼女は頭を上げる。そして、きつ、と真行をにらみつけた。が、すぐにその表情は緩んだ。「あんたも時々はいいいこと言っただね」

真行は表情を変えない。

ソラはその顔に指を突きつける。

「時々、だからね」

「時々強調すんな」

「あーあ、今の言葉あんたにはもったいなかったかなあ」と歌うように言って、ソラはくるとその場で一回転して、

「でもそうだよ。なんかスカつとした！」

ガッツポーズを作ってみせ、「行こつ」と真行の腕を引っ張った。

疲れていたこともあり、造船ドッグまでの道は自然と早足になった。腹が途中で鳴り、魚は無理でも、何か食べられるチャンスを先ほど逃したことに気づき、ソラは鬱々とした気持ちでファミリアバードに揺られていた。また先ほどのような物品交換所が無いかと前をじっと見据えて探していたが、丘をひとつ越えると、そこからはレンガの家並みと、おんぼろ船の行列は途絶え、腰を曲げて土をいじっている人がたくさんいる畑だった。やはり、農業には成功している村のようだ。青々とした草が畑の四角形の中にきれいに整列していた。広がった畑の奥のほうに数十人の女たちが腰をかかめて作業をしているのが少しだけ視界に入る。

「クッキーでも食べよかな……」

この国は食料が尽きだしてから切符と物の交換の配給制になった。クッキーとはそうして配給されていた加工食品のひとつだ。環境変化に強い雑草を無理やり品種改良して実をつけさせ、その実を水で固めただけのものである。誰が開発者なのか知らないが、ぱさぱさしていて、酷い味がする。お腹にもあまりたまらない。だがそれはお腹がすいていなければの話で、お腹がすいていれば何でもおいしい。

「ここだったら何かもらえそうだね」

もうそろそろ底を尽き始めたクッキーを眺めて呟く。

「できたとしても酷い目で見られるぞ」

てがみ屋は職業柄、あちこちで食料を調達しなければならぬ。

今は、国民のための政府が潰れたせいで、食糧の統制がされなくなり切符の価値がなくなっただけのため、物々交換が主流なのだが、たとえば何か物を出して交換を願い出たとしても、恨みがこもった目で村人ににらまれることがある。人間と食糧の量がつりあってきたとは言っても、余るほど食糧は採れない。

「できるだけやってみよっかな」

ソラはクッキーを口の中でもぐもぐとかみながら呻吟する。

「まあ、俺も内職してるし……少しくらいは手に入れば………いいんだけどな」

真行はため息をついた。上手くいかないことがほとんどだ。

しばらくすると、荒れた土地を抜け、少し人気のある道に出た。

「やった、もしかしたら何か食べられる……かも！」

可能性は低いけど、そうやって自分を盛り上げるしかない。ソラはファミリアバードの背を激しくたたき、頬を上気させた。ファミリアバードは困ったようにソラのほうを見上げる。

「叶わない夢のために叩かれたファミリア、ドンマイ」

真行は親指を立て、ファミリアバードに見えるように身を乗り出

した。

「失礼ねっ」

ピンク色に染まった頬をハリセンボンのように膨らませ、ソラはファミリアバードの背を両手ではあん、とたたき、真行のほうを睨みつける。

「ギイッ！」

ファミリアバードはくちばしを大きく開けて、羽をばたつかせ、ソラを非難した。

「哀れだ」

真行は少し目をそらし、ため息を漏らした。

「あんたに哀れまれることのほうが、かわいそう」

ソラはファミリアバードの背を優しくなで、

「ねー、そうでしょ？」

と彼（あるいは彼女）の顔を覗き込んだ。

ファミリアバードは、何も答えなかった。

「あーあ」

真行は何度も肩をゴリゴリされた後、一発、必殺「腰にドロップキック」を食らって、何とかソラから開放された。

「おい、ソラ、それ取ってくれ……」

腰の疲労が激しく、うまく立たないらしく、ファミリアバードにべたりとくっついて乗ったまま、先ほど鞆に詰め込んだ木片を指で示した。

「自分で取ればいいじゃんっ」

「めんどくせっ……って、あ」

真行はバランスを崩し、ずりずりとファミリアバードの背から落ちていく。

「……っ」

鈍い音がして、彼の体は地面に落ちた。

「大丈夫？」

ファミリアバードを止め、ソラは少し後ろを振り返って真行のほうを見た。彼は腰をさすりながら、なんとかして木片をとろうとしていた。

真行は木片を指先で地面に落とし、それを拾って右腕で抱えたまま、鎧に足を掛ける。

「……つと」

何とか乗れたようなので、ソラはファミリアバードを進ませることにした。真行は自分の鞆の中から黒い鞘のナイフを取り出した。腰のベルトに鞘ごと差し込み、柄を握って引き、鞘をはずす。

ソラはファミリアバードの速度をゆるめ、真行の隣に並んだ。

どんなに時がたっても、ナイフを見たときの背筋の寒気は消えない。

ナイフは昔、自分の大切な人の命を奪った凶器だ。いつまで経ってもソラの心はその恐怖に脅かされていた。

それが突き刺さった瞬間の叫び声、飛び散る赤い液体、鉄のにおい。

体が床に崩れ落ちていく音。

血に染まったナイフを握る男の大笑い。

忘れることはできない。

今まではもつと酷くて、ナイフを見るたびに、胸が締め付けられるように苦しくなって、泣いてしまうこともあったが、今ではもう、そんなことはない。

ただ、まだナイフを見ると、なんだか恐ろしくなってしまうくらい。鋭い光を放つナイフは、信頼出来る真行が持っていたても、やはり凶器だった。

「またやんの？」

「あのなあ。怖がるのは勝手だが、こんなことでもしねえと、金が

ねえつつの」

真行は木片を左手で握って、ナイフの刃をあて、上下、そして左右に動かす。少しずつ削りかすが、ファミリアバードのオレンジ色の毛の上に落ちていく。

いつ見ても面白いと思う。ナイフは怖くても、彼が物を作るために動かすナイフは、すごく優しくて——好きだった。

どう違うのだろう？ ソラにはよく分からない。

それから、彼の表情が、このときだけ緩むのも、彼女は好きだった。

「いいな」

「あ？」

真行はソラを横目で一瞥し、また作業に没頭してしまった。

「器用だね」

「褒めても、なんも出ねえぞ」

真行は削りかすをふつと息を吹きかけて飛ばした。

「あ、もったいない」

ソラは真行の息でふわふわと飛んでいく削りかすを見て、つい言ってしまった。

「もったいないって、お前いつもそれだな。ケチくされ。どこらへんがもったいねえんだよ。削りかすをどう使うっていうんだ」

体を少し起こして、作っている何かについたかすをさらに地面に落とす。

「あああああつ！ もったいないつ。だってほら、これを袋に詰めれば、柔らかーい梱包材こんぽうざいができるよ。布につめれば、枕だって！ 利用価値は大いにあると思う！」

ソラはうつとりしながらファミリアバードの羽に頬をすりすりした。

「だから捨てちゃだめなの！」

言つと同時に、真行に指を突きつけた。

「お前は、とことん節約家だな。そんなことして何が楽しいのか——

「楽しいじゃないつ。物を作り変えて使えば、なんだか得した気がしない？」

「それはお前だけだ」

「なんかさ、物がほかの人より長持ちしたら自慢したくならない？

短くなった鉛筆とか、米粒みたいな消しゴムとか」

「ボロ勝負しても何にもならねえよ。それも、お前だけだろ」

「お金がもつたいないから――」

「ただ単にケチなだけだろ」

ソラはすべての意見に対して反論され、しょぼんと肩を落とした。どうせ馬鹿な真行に言っても分からないのだと勝手に納得し、話題を変えることにした。

「ところで、何つくってるの？」

「当ててみな」

真行はナイフを動かしながら、少し、口角を上げた。

「うーん、箸？」

「違う」

細い持ち手のようなものがすでにできつつあった。これは、いったい何なのだろう？

と……。

「ん？」

ソラの目が、つなぎを着た男たちを視界に捉えた。

彼らはなにやら、水を運んでいるようだ。容器は石でできていて、きつと重いのだろう。男たちはふらふらしながらそれを運んでいる。ぎらぎらと太陽が照りつける中、男たちがかいた汗が地面に道を作っている。

時々聞こえるうめき声が生々しくて、ソラは耳をふさぎたくなる。さっきの女が言っていたことはこれだったのだろう。

一人の男が石の器を引きずりながら、地面を這っていく。恐ろしく遅い。大量の汗を地面に残しながら這っていく。汗の量はどう見

ても異常。

「けふつ」

男が咳きこんだ。透明な液体ではなく、赤い液体が飛び散った。ソラは唇をかみ締めた。男が海のほうへと向かっていく。どんだん体が地面から離れていく。どんだん、どんだん。

目をつぶった。

最後まで見ることができなかった。

水のはねる音がした。

恐る恐る真行を見上げると、彼は居心地悪そうにうつむいていた。
「酷い」

ソラの唇の端から言葉が漏れた。
真行は黙って頷いただけだった。

「おまえさんたちい、旅人さんかね」

土気色の顔をした、体格のいい男だった。おぼれた男を隠すようにして二人の前に立ちはだかってきた。白い薄手のＴシャツの上に土で汚れたつなぎを着て、袖を肘の上までたくし上げている、といった格好で、額には脂汗を浮かばせ、きつそうに肩を上下させて息をしている。

「どうして、こんなこと……」

男に訊こうとすると、真行が口を挟んだ。

「となり村に水を持って行ってるんだろ。すぐ海の近くだから。最近は雨も降らねえしな。水が足りねえんだろ」

「でも、潮水だよな。あ、そっか。あっちの村で浄水するんだね」
ソラは独り合点して頷く。

それを聞いてはいなかったであろう真行は、手を頭の後ろで組んで男のほうをちらと見た。

「この村にはあんまり居らんほうがよかばい。あんたたちも、させられるかもしれんけん」

おどけて言っただけで、男は白い歯を見せて笑った。その笑みは少しだけ自嘲的だった。

「あいつには敵わんけん」

「あいつ？」

ソラが首をかしげても男は答えず、踵を返して仕事に戻ろうとする。

「ちょっと待って下さい」

真行が口を開いた。

「上の人間の名前は？」

男を見上げた真行の目は真剣だった。真行が真剣に相手を見据える、というのはそうそうない。

かしわばれん
「柏原蓮」

男はそういつて、にんまり笑った。

「何するつもりか知らんけど……にいちちゃん、あんたが敵うような相手じゃなかばい。それなら、オレらがとくに寝首かいとるって」
袖をさらにまくって、腕を曲げて男が作って見せた力こぶは大きかった。真行は関心がなさそうにそれを見て、男を軽く睨んだ。

「余計なお世話です」

男は、真行の低い身長と、すらっとした体型を見て、そう言ったのだらう。

ソラは少し気になった。あの重い石の容器を持ちあげるほどの強い男たちが、柏原蓮という奴に束になってかかってもかなわないということ。それほど、この土地の頂点に立つものが強いということだ。

「サナ、どうする気？」

見上げて訊くと、真行は男たちのほうを一瞥した。

「別に」

ぶっきらぼうに返した。ソラは不満顔で真行を見上げる。

「余計なこと、しないほうがいいと思うよ」

「ああ、分かってる」

答えて、彼はすつと男たちから目をそらし、

「でも、あんまりじゃねえか」

双眸を細めてつぶやいた。

「うん……」

畑を越えると、丘を下つて、右手に船の列が見え始めた。しかし先ほどまで見えていたレンガ造りの家はなく、目の前に広がる景色は村の入り口よりも殺風景だった。ほとんど沈んでしまったドッグのひとつに、おんぼろの船が浮かんでいた。

ソラはわざと大きな声を出して指差す。まるで悲しいこの村の、この世界の現状にふたをするように。

二人はファミリアバードから降りて、坂を下る。ファミリアバードはぺたぺたと音を鳴らしながら二人の後について行った。

「あ、う」

そして、

大音量の悲鳴に思わず耳をふさぐ。少年は腰を抜かして地面にぺたんと座り込んでしまった。なかなか立ち上がれないらしく、口をパクパクさせながら右手で二人を指差し、非難した。

ソラは指差された拳句、文句を言われたのが極めて不愉快だった
が我慢して、にっこり笑う。

「ええと……一度声かけましたよね？ 気づいてらっしゃらなかったの……」

「何ですか急にっ！　いまさらそんな笑顔になられても困りますっ！　何のつもりですかっ」

彼はわけの分からぬことを機関銃のようにまくし立てて、急に頬を赤らめた。

「あ……もしかして、この村の方ではないですか？」

「俺たちは外部の人間だけど。お前ホントに警官か？　腰抜けすぎだろ。ヘタレ」

真行がソラに追いついてきて答えた。警察官はむうつと頬を膨らませてうなった。

「現れていきなり失礼千万なんですが。そちらの方」

大きなつり目がちの瞳を眇めて威嚇しているつもりなのか、警察官はじつと真行をにらみつける。その威力はまったく無かった。むしろ可愛らしくて、ソラは噴出しそうになってしまふ。真行は呆れたようにその視線を鼻で笑った。

「どーせ俺はしつけのなっていない人間ですよ。っーかお前のほうが失礼じゃね？」

こういうときにバンバン言ってくれる人はいい。

ソラはどうしても相手をお客様と思って話すのでそんなことは言えない。言いたいことを言ってくれと正直すつとする。

警察官は返答に困ってむーむー呻っていたが、思いついたように顔を上げた。

「何の用ですか？」

その顔が「逃げ切った！」と言わんばかりに輝いていたので、口角が吊り上ってしまわないようにソラは必死に耐えた。しかし、どうしても苦笑いが漏れてしまふ。

ソラの時にはもう一押しして追い詰める真行も、これには本当に呆れ果てて何も言わなかった。

「あの、警察官の方ですよね？」

どう見ても警察官にしか見えない彼に聞くのは面倒ではあったが、形としてだけ聞いておく。

藍色の制服に、腰には警棒とホルスター。しかし、ホルスターの中は空である。最近^{から}は、拳銃は恐ろしく高級なもので、支給されないのかもしれない。

「はい。警察官です。あ、元、ですが」

「お聞きしたいことが」

彼は美しい深緑の瞳を細めて、につこりと笑った。

「なんなりと。とりあえず、お座りください」

丁寧に、そして柔らかく、両手を広げて示してみせた。その動作がすごく滑らかで、ソラは少し驚いた。まるで女の子みたいだ。

顔もほっそりとしていて、大きなつり目がちの瞳は真っ黒だ。髪もソラくらいの長さで黒い。女の子のような服装をしていれば、男だと気づかないだろう。

彼は帽子を取り、深く頭を下げる。そうして、もう一度帽子をかぶりなおした。

ソラはお辞儀を返したが、真行はそ知らぬ顔でどこか遠くを見ていたので、ソラが彼の背中をぐいと前に押し倒して礼させる。

ソラと警察官の二人はドッグの端に腰掛けた。その隣には、ぼろい解体しかけられた船が一つ、ぶかぶか浮いている。

「僕は、柊麗花^{ひいらぎ}といいます。ここで、警察官をしています。あ、それからリサイクル屋」

自己紹介をして、麗花はゆっくりと右手を差し出した。ソラがその手を握り返す。

「リサイクル屋って、なんですか？」

ソラは目を輝かせて訊ねる。節約好きのソラは「リサイクル」という言葉に反射的に反応してしまった。

「えっと、いろんなものを作り変えて、また利用できるようにするんです。たとえば、ほら、その鳥さんが持つてる木の板を、まな板にしたりとか」

「鳥さん」というのはファミリアバードのことだろう。人になつきやすい有名なモンスターなのに、知らないのか。

「まんまじゃねえか」

「いいえ、まな板にするには、もつと平らに削らないといけません。そして、その木くずを寄せ集めて、枕を作ります」

「あ、それは、あたしも考えました!」

妙にソラと意見が合う。真行はため息をついて、二人と離れたドッグの端に腰を下ろした。

「それからですね……僕はこの村のいろんなものを作り変えているんですよ。たとえば……そうですね、糸くずをより集めて繊維を作ったりとか……」

「あ、やっぱ糸くずは有効活用できますよね」

ソラはうんうんと相槌を打つ。

「そうそう、今日、こいつ、糸くず捨てようとしたんですよ。信じられませんよね」

ソラが真行のほうを指差すと、真行は顔を背けた。

麗花は勝ち誇ったように高らかに言い放った。

「物を捨てるなんてもったいない!」

たかが糸くずじゃねえか、と言いたそうな真行だったが、それは言葉に出さず、代わりに最大級のため息をひとつ。

ソラは、自分のひざをパン、と叩いて嬉しそうに微笑んだ。

「麗花さん、お友達になりましょう! もったいない同盟を作りましょう!」

「お、良いですね」

そんなことで友達になろうと考えていいのかは疑問だが。

もう一度握手をしようとする、急に麗花が真顔に戻って手を引く。ソラは残念そうに唇を尖らせる。

「ところで、話したいことというのは?」

「ステッカーのことです」

きっぱりと答えた。すると、とたんに彼の元気がなくなる。

「はあ……」

気のない返事をした彼は帽子を取って、髪をくしゃくしゃとかき混ぜた。

「僕と、ですか」

肩を落として困ったような表情で、ソラを見つめ返す。

「そう……です」

ソラは困ってしまう。彼女は問い詰めることがあまり得意ではないし、好きでもなかった。

「元警官だろ。なんか聞いてねえのかよ」

真行はそんなソラを見てか、助け舟を出した。あくびをしながらではあったが。

「政府の人間ではないですから」

不服そうに麗花は嘆息を漏らす。

麗花は膝の上に肘をついて、その手の甲にあごを乗せた。

「あんな、最悪の政策、僕は許せないです」

麗花の瞳がかける。

「ステッカーの別の使い方、知ってますか」

ソラは黙って首を振った。麗花は「でしょうね」と呟き、細い息を吐き出した。

ソラは小さな拳を膝の上で握り、麗花の顔を覗き込む。

彼の瞳はソラの顔ではなくどこか遠くを見ていた。

透き通るような真つ白の肌に細いあご。女の子から見ればうらやましい限り。ただ、あまりにもほっそりしすぎた顔や体は、見方を変えれば不健康にさえ思える。

真行も体の線は細いほうだが、何か違う。

「知らないなら、今知っておいてください」

しばらくの沈黙の後、麗花は口を開いた。

「ステッカーは武器になります。力を手に入りたい者は必ず狙ってきます」

武器？ 力？

さっぱり意味が分からず、聞き返そうと口を開きかけると、麗花

がそれを見計らつてか、詳しく教えてくれた。

「たとえば、あなた方が持つているステッカーは何ですか？」

「えと……種類とかつてあるんですか？」

ソラが鞆を開けて、それを出そうとすると、麗花は微笑んで手を振った。

「いや、いいですいいです。例えばの話ですから。もし、炎のステッカーを貼つたらどうなると思います？」

それは当然……。

「炎が出るんじゃないですか？」

「そうですね。もしその炎を戦闘に応用でもされたら、手も足も出なくなりますよね」

これに関しては戦つたことがないソラには分からない。真行が答えた。

「まあ、そうだな。でも、一生資源を世界中の奴らに分け与えてまで強くなる意味なんてあんのか？」

麗花はなぜか自嘲気味に笑った。

「そこです。しかしですね、よく考えてみてくださいよ。力を手に入れた者にほかの人間に資源を分け与えるなんて優しい心、あると思います？」

ない。

力を手に入れた者は酷い奴らばかりだ。ソラたちに渡される手紙の数々のほとんどは力のある人間が書いたもの。それでどれだけの人が傷ついて、苦しんで、涙を流したか、あるいは怒り狂ったかは計り知れない。

「さらに使者になつた者には普通の人間は太刀打ちできないときて
メッセンジャー
る。もともと強い奴がそんなことをしたら、人々が資源を求めても潰されてしまうだけです。政府がこの政策を出す前にこれが分からなかったと思います？」

なんだかよく分からなくなってきた。

ただ一つだけいえるのは、政府も金持ちたちの集まり。政府に居

るだけでたくさんのお金をもらえるのだから。金持ちは頭が良く、自己中心的だ。少なくとも、この世界では。

そんな性格でないと、金は稼げない。

「政府からの政策は、みなさんに資源を分け与えようという優しい心からではありません」

どれだけ金持ちたちに操られればいいのだ。鞆の中の手紙を握り締める。

「政府は、メッセンジャー使者を利用して、何かたくらんでいる……ということですか？」

自分の声はかすれていた。麗花が小さく頷いた。

「これは、メッセンジャー使者制度、と言われています。政府のトップたちしか知らないような目的のためにあります。僕らのような公務員には何も

……」

ソラは真行のほうを見た。ということは政府の役人であつた彼も、本当に何も知らないのか。

そう思うと少しだけ安心した。

本当は知っているのに自分が直接教えたくなくて、この村に入つたのかも、と疑う心が実は少しだけあつた。彼はソラのために事実を伏せることが時々ある。ソラにとっては自分が信用されていないようで少しだけ怖かつたのだ。

「もう一度言います。この村から出て行くべきです。この村でそのステッカーを持ってふらついているのは危ないです」

麗花は少し顎を引いて地面を眺めた。どうして、と訊く間もなく、彼は理由を付け加える。

「ここには力を欲しているものが居ましてね。彼は強いです。この村に彼に太刀打ちできる人なんていません」

「その人が、この手紙を狙ってくると？」

麗花は黙っていたが、この場合の無反応は肯定を意味するのだろう。

と、肩に誰かの手が触れた。真行だった。

「この村から出るぞ」

言うと思った。ソラは口をつぐんだまま真行を軽くにらんだ。

「どうして」

「ここに居続ける理由なんて無い。ステッカーについての情報なら、またどこか違うところで見つけられるだろ？」

その理由は分かるのだが、なんだか快く頷けない。村の現状を見てしまった。この村から出ることはなんだか卑怯な気がしてやまない。後でもやもやした気持ちになるのだ。

「そんなの、どこの村だって一緒だろ？」

こういうときの鋭さにはいつもドキツとさせられる。別に口に出したわけではないのに心が読まれてしまっている。

「居るつもりなら、手紙、本当に捨てたほうが良いです」

うつむいた状態から、少し顔を上げた麗花の顔は青白かった。

「郵便局も信用が第一でしょう。もし、この村でなくしてもしたら、もう二度と手紙が配れなくなってしまいますよ」

「捨てることはしません。大切に持っていると上司に言われています」

「出るぞ」

顔を上げると、真行の藍色の瞳がこちらを見据えていた。

「うん」

少しだけ村のことは気になるけれど、居続ければ手紙を奪われる結果につながってしまう。手紙を守りたいのなら、村を出るのが正解だろう。そう思ってソラは真行に従った。

第七話

少年は自分に絡み付いてくる視線をすべて振り払いながら進む。足を一步踏み出すたびに、光の加減で時折赤く見える髪の毛が揺れる。

真つ赤なタンクトップに黒い長ズボン。ベルトにはジャラジャラとチェーンがつけられている。チェーンなど、資源がないのだから普通は持ち得ないものだ。

タンクトップから突き出した腕には黒い「嵐」の刺青。「嵐」の字は崩されているので、刺青の字を見ただけで、激しい風が巻き起こっているかのようなイメージを受ける。

シンプルな服しか着ることしかできない他の村人からすれば、それは「派手」であり、「贅沢」である。

そんな視線を向けてくる村人に対して、少年は何の感情も持たない。

ただ、これだけは思う。

この村の人間に興味はない。この人間は腐っている。

レンガの家を曲がったところで小さな殺気に気づいた。足元のほうから感じる。

「ああ？」

少年はその殺気の持ち主、小さな子供を見下ろした。

「い……こわくなんか……っ」

子供の脚はがたがたと震え、手に持った短剣もぶるぶるとゆれている。

怖いんじゃないの？

「誰の差し金だよ？」

子供は「差し金」の意味を理解できないらしく、首を傾げただけだった。

「言い直す。誰がお前にこうしろと言った？」

「僕がお前をやつつけたら、村でパーティーができるんだ。おいしいものが食べられるって聞いたからね、そしてね、倒した奴は村の『えいゆう』になれるんだって。別に誰に言われたわけでもないよ。僕はヒーローになるために自分で来たんだもん」

少年は体を折り曲げて、地面にしゃがみこみ、燃えるような赤い瞳で子供の目をにらみつけた。子供の目はかなり揺れている。少し脅すだけで吐きそうだ。

しかし、訊いても最近と同じ答えしか返ってこない。多分今回も同じだろう。

「またか」

子供は口を一字に結んだまま黙っている。

「帰れよ。子供は潰しても全然足しになんねえ」

「そんなの関係ないよ。僕は……」

子供が言おうとしたのをさえぎり、彼は拳をレンガにつきたてた。「帰れ。殺すぞ」

ぱらぱらとレンガの一部が崩れ落ちていく。壁に食い込んだ拳を、彼は引っこ抜いた。

拳は無傷だ。

子供は息を呑んだ。そして、自分ではこの相手には敵わないと悟った。

子供がきびすを返して一目散に逃げていく。レンガの家の通りを抜けてから、泣き喚く声が聞こえてきた。少年は右拳に付いたレンガのかけらを左の手のひらでぬぐって地面に落とした。

そろいもそろってこの村の親たちが少年を殺そうとしている。理由はよく分かっている。全くもって理不尽な理由。この村は本当に腐っている。

「強くなりてえ」

独り言を呟いてみる。幼いころに決めてみたはいいが、ちっともこの村には強い者など現れたりしない。戦わなければ強くなれない。

たった一人。一人だけ、強い者がこの村にいる。ただ奴と戦うには、恐ろしいものがある。

あの纏う雰囲気。

そして何を考えているか読めない、濁った瞳。

何をしようとしているのか、水運びまで村の奴らにさせている。

柏原蓮。

戦ってみたい。奴を見るとなんだかぞくぞくする。

そんなことを考えていると、ある男の声が聞こえてきた。透き通った男にしては高い声。少年はこの声を知っている。

この村の警察官。弱くて面白くないから放っているが。

それとは別に二人の人間が彼の周りで話を聞いていた。少年はあまり大きくないその声を聞こうと耳を澄ました。

「……この村から出て行くべきです。この村でそのステッカーを持つてふらついていることは危ないです」

ステッカー？ 何だそれ？

少年は家の壁に張り付いて聞き耳を立てる。

「ここには力を欲している者が居ましてね。彼は強いです。この村に彼に太刀打ちできる人なんて居ません」

「その人が、この手紙を狙ってくると？」

勘がいい少年は先ほど出てきた言葉を反芻してつなぎ合わせる。

ステッカー、力を欲している者、手紙。

つまりあいつらが持っている手紙の中に入っているステッカーを使えば強くなれる。

「あいつらをとっ捕まえて、奪う」

光の加減で少年の黒髪が赤く光った。真っ赤な瞳が攻撃的な光を宿す。

思わず唇の端を吊り上げて笑ってしまう。

「馬鹿な警察官。聞こえてんだよ」
奪う。そしておれは強くなる。

第八話

二人はファミリアバードに乗り込んで、造船ドッグから引き返し、村の入り口の物品交換所まで来ていた。

先ほどのドッグとは違い、ここには人が多く集まっている。

だが改めて見ると、人通りが多いといっても、水を運んでいたつなぎを着た男たちばかりだった。もつとも、先ほどの水運び集団とは違い、石の器を持っていなかったので、仕事帰りだろう。

「でも妙な話だな。一人ずつ重い石の器に入れて運ばなくても……もつと楽な方法があんだらうに……」

そう言われればそうだ。わざわざ重い器に入れなくても、軽い木の器に入ればいいのに。最近は木が殆ど生えていない事実があるせいかもしれない。もし伐採したら大変なことになる。でも、なんだか違う気がする。

「ね、何か食べない？」

そう切り出してファミリアバードを止めたのはソラだ。今日は朝食をあまり食べられなかった。真行にも堪えるらしく、彼は「そうだな」と、即答した。

「何か、交換するものある？」

真行は「ないな」と気持ちのいいほどにあっさりと答えた。

「だよー……ていうかさ……交換するものないのに何で肯定したのかな？ ちょっと期待したんだけど」

「そんなことは訊かれてないからな。正直に俺の気持ちを答えた」
「何でこういときだけ素直なのかな！ という言葉を喉から出ないように抑える。」

「しょうがねえ。魚でも釣るか」

そう言って真行が海を覗き込んだので、ソラも覗き込む。しかし、

とても魚が泳げる状態ではない。海には油が浮き、ごみが浮き、そして、にごった水の下には、かつて地上にあったはずの建物の残骸。「う……」

二人の腹が盛大に鳴る。

「あーもっ！　いつになったら食べれんのよっ」

ソラが地団駄を踏んだ。

「そんなことしてたら、余計なエネルギー消費すっからやめろ」

真行は呆れ果てたようにソラを見下ろす。盛大なため息をついて、二人はうなだれた。

汚らしい海の泡だらけの波が寄せては返す音が悲しいほどに響く。

そのまましばらく、二人でぼうっとしていた。

「あの……」

か細い声に振り向くと、白銀の髪をした人が立っていた。左目を眼帯で覆って、反対側の右目は白く濁っていた。太陽は容赦なく彼の体に照り付けているというのに、その人は漆黒のマントをはおり、前をしっかりと両手でつかんで閉じていた。

それでいて、汗ひとつ浮かべずに冷たい視線をこちらに向けてくる。

その姿はどこか不気味で、普通の人間とは思えない。

ぎょっとしてソラが身を引くと、その人は蓮の花のような美しい白銀の髪を揺らし、首を傾けてみせた。

「あなた方はてがみ屋、ですね」

いきなり言い当てられ、さらに驚く。

普段はあまり感情を表に出さない真行でさえも、眉間にしわを寄せた。

「そうです……」

答えたソラの声は小さくなる。思わず鞆に手を添える。危ないと思ったときのソラのクセだ。

「よかった、送ってほしい手紙があるんです」

「住所は」

茶封筒を差し出して、微笑む彼に真行が冷静に聞いた。

「ああ、香焼村の中なんです。てがみ屋さんが来ているといううわさを聞きまして。せっかくだから配っていただこうと思ひ、お願いしたく」

「分かりました。必ずお届けします」

ソラはゆっくり茶封筒を受け取る。上目遣いにその人を見ると、
「かわいいですねえ。それで、たくさんの手紙を届けているんだからすごいですね。感心です」

猫なで声で言われ、立ちすくむ。

「何のつもりですか」

真行がソラを引っ張り、自分の後ろに隠す。

「そんなに警戒しなくてもよろしいではないですか」

そうからかうように言ってから、道を引き返していく。

「頼みますよ」

後ろを向いたまま言ったその言葉は、脅しているようにも聞こえた。

その背中を見送り、ソラたちはほっと一息つく。

ソラは茶封筒を鞆にしまう。

「結局出られなくなっただな」

不服そうにそっぽを向いて真行が毒づいた。

「一つくらい、いいじゃん。でも、あの人……」

「ああ、俺と同じ二オイがする」

「におい？」と、小首をかしげてソラは真行のシャツのすそを引っ張る。

「どれどれ」

「おいおいおいおい！」

「うーん？」

週に一回身体を洗えるかどうか、という生活なので一部の人間はにおい消しをするために香水や制汗剤のようなものをつけている。

とはいえ、なかなか売っていないし、かなり高い。でも、てがみ屋は客商売なので必ずつけるようにと、局長に言われている。

ソラはキンモクセイの香り、真行は石鹸の香り。

鼻をつけて、においを嗅いだソラの頭を真行は真っ赤な顔ではたいた。

「嗅ぐなよ！ 臭うだろ！ やめてくれよ！ なんてことするんだお前は！ 馴れ馴れしいにもほどがあるぞ！ 近い近い近い！」

近い……？

「ふげっ」

ソラは、はたかれて奇声を上げる。

あら珍しい。彼の顔が真っ赤だわ。

「あんた……」

そこを攻めようとする。

「違っ……ただ単に変なにおいしたらお前っ……」

ソラはまだ石鹸の香りが残っている鼻をこすった。

「うるせえ黙ってる！」

いや何も言ってますんが。いきなり怒鳴るというのは酷いと、ソラは心の奥で思う。

肩と腰を攻撃するときは何も言わないくせに。

「とにかく、この手紙、渡しに行かなきゃね！ まあ、一通届けるくらい、大丈夫でしょ？」

ソラは鞆を大事そうに抱きかかえる。

「住所は……？」

さすが真行というところか。しばらく顔を手で覆っていたが、表情はすぐに元に戻った。

「四丁目一番一号。造船所の奥のほうだよ」

鞆の中からこのあたりの区域の地図を出して、住所と見合わせながら、ソラが説明した。

真行が舌打ちした。ソラはすばやく真行をにらみつける。

「なによ」

「戻んのメンドくせえ」

造船ドッグのほうへ歩き始めると、なにやら、とてもいい香りがソラの鼻をくすぐった。

くんくんと、まるで犬のようににおいを嗅ぎ、ソラは真行のシャツの袖をつかんだ。

「なあんか、いいにおい、するじゃん」

にやにやと笑いながら、彼の顔を覗き込む。

「知らん」

きつぱりと言ったが、体のほうは正直らしい。
ぎゅるるる……。

「へえ」

ソラは真行の腹に耳を押し当てて、わざとらしく言った。

「今のは……」

弁解しようとする真行を無視して、ソラは通りを駆けていった。
角を曲がったところで立ち止まり、真行のほうをくりと振り返った。

「こつちー」

やけにニコニコしながら、通りの中に入っていった。

そこでは、とうもろこしを焼いていた。そのよい香りに引っ張られるように、彼女は屋台の前に寄っていく。

「いえーいっ！ 一番乗りっ」

「おいおい交換するものは……？」

ソラは空腹のせいでおかしくなってしまったようで、行進しながら「ピピー」と笛の音の口真似をして、屋台の前でぴたりと止まった。

「ーもろこし、ひとつくださいっ」

一本、指を立ててとうもろこしを焼いている男に言った。

「あいよっ……って、星野か！」

顔を上げた男は目を丸くして、ソラを見た。しかしソラは「早く早く」とせがむばかりで、男には目もくれない。

ツンツンに立った短い茶色の髪の毛を掻き揚げて呆れ果てた仕草をしてみせ、それでも彼女は反応しなかったため、男はソラの目の前で手をひらひらさせた。しかし、それでも彼女は気づかなかった。

「星野お」

眉をひそめて、大きくため息をつく。

「上司に対する態度がそれかあああ！」

鼓膜が破れるかと思うほどの大声が通路に響いた。

その後。

「あー、局長」

間の抜けた声が男の耳に入ったらしい。彼は勢いよく、声のほうに顔を向ける。

「仏桑花っ。もっとシャキツとしろお、シャキツと！」

出会って早々、指を突きつけた。

「相変わらずうつさいっすね。ソラにも悪いところあるでしょう？注意してくださいよ」

「むう。オレはお前と違って、女性に優しいのだ」

顔は若いくせに変な話し方をし、一人、腕を組んで、うんうんと何度もうなずく。

「ただモテたいからでしょう？」

呆れて言い返すと、局長と呼ばれた男がそっぽを向いた。

「それより、仏桑花、星野をこっちの世界に戻してくれ」

「あ、イっちゃったんすか。今日はあんま食べてないっすからね。こいつにしては頑張ったほうなんすよ」

男は真行よりも一回り大きな、わりとがっしりした体を揺らして笑った。カーキ色の上着の下に真っ白なシャツを着、ネクタイをきっちりと締めていた。彼が、てがみ屋の二人が勤めていた郵便局の局長らしい。頭には「商売繁盛」と書かれた鉢巻を巻き、腰のベル

トにも様々な色の鉢巻がたくさん、くくりつけられていた。

「そうか……なら、しょうがないな。オレがおごつてやろう」

彼は焼きたてのとうもろこしを、真行の目の前でぶらぶらさせた。
「……」

真行が眉根を寄せたと同時に、ソラが口を大きく開けて、まるで水面に浮かぶえさを食べる魚のようにとうもろこしに飛びついた。

「お前は……」

真行の呆れ果てるような声音もソラは訊いてはいない。

ところが局長はソラの顔からとうもろこしをあわてて離れた。宙でとうもろこしを振り子のように、ぶらぶらさせる。それをソラは目で追う。

局長はそんなソラの顔をとうもろこしを持っていないほうの手で押して、自分のほうに向けさせてから叱りつける。

「こら星野、まず、礼儀をきちんとしろ。てがみ屋の鉄則だろうが。オレは局長の園部淳だぞ」
そのへあつし

「そのべ……あつし？」

ソラはそれを上の空で聞いてその後もしばらくぼんやりとしていたが、やがて、苦い顔になった。

「す、すいません。局長」

ようやく気づいたらしく、自嘲の笑みを顔に貼り付けたまま腰を折って頭を下げる。

「うむ。まあ、別にいいんだがな……ところで、何でこんなところにいるんだ？ ここの辺りに届け先があつたのか？」

「それよりも局長は何でいるんすか」

答えず、真行が横目で淳を睨んだ。

「何でってお前……そんなに嫌そうな顔をするなよ……オレのピュアなハートが傷つくだろ？」

「どこの辺りがピュアなのか馬鹿な俺にも分かるように丁寧に分かりやすく説明していただきたい」

淳は言葉に詰まって、しばらく頭を巡らせてから返答した。

「方言の勉強のためにオレはここに来た」

「質問に答える糞局長」

「相変わらず口悪いなお前、クビにするぞ！ 糞とはなんだ糞とは」
「糞の意味も分からないんですか説明しましょうか？」

淳は「いい、いい」と手を振って、額を押さえた。

「ところで、また、っすか。方言の勉強」

「またとはなんだ。またとは。方言はだなあ、地域の方々と心を通わす、秘密の言葉なのだぞお。それを、侮辱するとは……」

方言の良さについて語りだしてしまいそうな勢いだったので、ソラが口を挟んだ。

「でも局長、鉢巻に『商売繁盛』って書いてありますよね。それって……」

ソラが指摘すると、淳は腕を組んでうなつた。

「うぬぬぬう。それは気のせい、けん」

「局長、今、『けん』を使うのはおかしいですよ。『ばい』を使わないと」

淳はさらに押し黙ってしまった。どんどん腕組みした腕に頭が近づいていく。

「そういえば、局長、『地獄からの手紙』が手紙の中に混ざってました」

「おう？」

淳は顔を上げて、意外そうに首をかしげた。

「最後の手紙が地獄からの手紙で、それが政府の奴らに奪われそうになっちまって……この際だからステッカーって何なのかを調べようと思ってここに来たんすけど……」

「結局分からなかったんですよ」

ソラが付け加えると、淳は急に気難しい顔になった。

「俺が知っていると思うのか？」

「あんた情報フェチだろ」

「敬語」

真行の言葉にすばやく切り返す。だが、情報フェチというのは反論しないのか。

淳はとうもろこしを焼くのを中断して、火にばさりと砂をかけた。その彼の表情に先ほどまでの明るさはない。

「知っているが、知らないことも多い」

彼は静かにそう言って、屋台の屋根をたたみ始めた。話を聞かせてくれるらしい。

第九話

「うーん、おいしーっ」

ソラは焼きとうもろこしをほおばりながら、どさりと階段に腰を下ろした。

そして、ちらりと上を見上げる。

三人がやってきたのは崩れかけたレンガに包まれた、おんぼろ屋敷だった。この前局長と会ったときに入った家のように中には何もなく、寂しい部屋だ。二階建てのようで、螺旋階段が二回へと続いていた。螺旋階段の上のほうから明るい光が差し込み、埃がオーロラのような模様を作っている。家の中に差し込む光は、素直にきれいだと思う。

その光から目を離して、ソラが階段に深く座りなおすと、階段の板が軋んだ。

「ステッカーの話だが」

「はい？」

幸せの最絶頂にいるソラにこの話をするのを、淳は少し、躊躇っているようだった。

「受け取った手紙は持ってるか？」

「あ、はい」

ソラは鞆の中から封筒を取り出し、局長の大きな手の上にそっと乗せる。

「それ、持っていると狙われるからこの村からすぐ出たほうがいいって、この村の警察官が教えてくれました」

「狙う奴がいるのか」

手紙の中身を取り出してから、中から淳はシールのようなものを取り出した。それをつまんで、ソラたちによく見えるように示す。

「これが礼のステッカーだ」

そういえば文面は見ていたけれど、その中に一緒に入っていたステッカーは見ていなかった。文を読み、嫌な気持ちになって封筒にしまったきりで、その中にさらに何かが入っていることに気が付かなかった。

ソラは目を凝らす。

一見、普通のシールにしか見えない。素材は布なのか紙なのかよく分からない素材でできていて、ぴかぴかしていた。表面にはオレンジ色と赤色で縁取られた、炎の絵——というよりも紋様が描かれている。淳はそれをゆっくりと振ってみせる。

「これで実際に使者が生まれたところをオレは見たことがない。本当に作動するのか怪しいもんだ。仏桑花、お前、何か知らないか？」唐突に話を振られた真行は訝しげに淳を見上げた。

「知りませんよ。たとえ知っていたとしても俺は話すつもりはないっすけど」

「諜報部員の規律は厳しいんだっただ」

「そういうの関係ないです。俺が話したくないから話さないだけ」

淳は大きく息を吐き出した。真行は元政府の諜報部員。政府の情報但至少も知っているのなら教えてくれればいいのだが、一筋縄ではないかない。

「だが、オレも馬鹿じゃない。もう大体分かってきてる」

真行は淳の顔をちらりと見た。淳はその視線を流し、壁を背にして床に座り込んだ。

「お前、少し背が伸びたんじゃないのか？」

真行は露骨に嫌そうな表情を作りながら床に腰を下ろす。

「伸びられても嬉しくないんすけど。別に」

「そんなことないだろ？」

淳は屈託なく笑いながら、とうもろこしを真行に差し出した。

真行は目を伏せて小さくかぶりを振った。

「だが高いにこしたことはないだろ？ 困ったこととかなかったのか？ 高いところのものが取れなかったりとか」

「そんなのは別にどうだっていい。少し工夫すれば補えるんですから。不便ではあるけど。でも身長が伸びたからって、俺の潜在的な能力が変わるわけじゃない。だから」

受け取った焼きとうもろこしをほおばろうとして、真行は「あちっ」と声を上げた。ふうふうと息を吹きかけ、とうもろこしを冷まそうとする。

「そっか……オレは恵まれてて良かったのかもな」

後ろ頭をかきながら、淳は呟くように言う。

ソラはとうもろこしの粒を味わう口を止めて、今の二人の言葉を反芻する。そして、淳に訊ねた。

「男の子でも、やっぱり戦うことってきついですか？」

そう訊ねた瞬間、淳は唇をひんまげて、困ったような顔になった。まさか勘付かれるとは思わなかったのだろう。

しかし、良い答えを見つけたのか、淳はにっこりと笑った。

「そうだな、人間だから当然のことだ」

淳が笑うときは嘘をついているときだ。彼は嘘をつくときこそ、へたくそな笑顔でごまかそうとする。

ソラはとうもろこしに口をつけて、一口、二口とかじる。

手紙を守る。それは決して簡単なことじゃない。

「あたしは、手紙を守りきれるでしょうか」

小さな呟きに、淳は額の鉢巻をいじりながら返答する。

「手紙をまもること」戦うことではないと思うぞ。相手が相手だから、オレたちは戦わなければいけないときもある。でも、戦わなくても解決できることってあるだろ。きつと」

でも、狙われるなら戦わないと、頭が悪くなく、足が速くないソラが逃げ切れるわけがない。ソラにとっては手紙を守ること「戦うこと」なのだ。

いつも自分が戦えなくて、悔しかった。何もできないから悔しかった。せめて手紙だけは守ってみせたいと思うから、強くなりたか

った。

いつまでも失くしてばかりは嫌だった。

「他のやつらの反感を買うから仏桑花には預けられないしな……オレが持っていると余計に危ない」

「どうして危ないんですか？」

淳は重々しく頷いて答える。

「オレがこういうものばかり持っていると、オレが政府に殺されたときに全部すぐ手に入ってしまうだろう？」

完全に話が読めていないが、政府の手に渡してはいけないものを淳は持っているらしい。そして、ステッカーもその部類に入るといふことが。

政府は何をしようとしているのだろう。

「瑠美^{るみ}さんは、まだサナのこと認めてないんですか？」

瑠美^{るみ}というのはてがみ屋の副局長の名だ。局長の相方で絶世の美女である——というふうに聞いている。

「あいつは慎重すぎていかん。でもそんなことあいつに言えば、オレに『あんたが大雑把すぎんよ』なんだがな」

「まあでも、当然の反応なんじゃないっすか？ 俺はあっさり入れてくれた局長が不思議なくらいっすよ」

「過去なんて関係ない」という言葉がある。だが、そんなきれいごとを言っている当人たちでも、過去を気にする。どうしても過去は消せない。それは当然の話だ。

だから、どんなに信用を手に入れたとしても、真行が手紙を持たされることはない。

「あたしは、どうしたら手紙を守れると思いますか？」

目の前でたくさんものをなくして、今度は手紙をなくそうとしている。

答えは返ってこなかった。

甘いともろこしの味はなくなってしまった。それでも食べてお

かなければいけない。食べられるときに食べておかなければ確実に餓死する。

「そういえば、局長、何でこんな人口の少ないところに来たんすか？ 方言の勉強なら、もつと人がいるところのほうで喋れていいんじゃないっすか？ 何か、他にも……」

「む……。鋭いな」

淳はとたんに苦い顔になる。

そして、何か言いかけて口を閉じてしまう。

「局長……？」

淳は軽く首を振って、また少し逡巡してから口を開いた。

「この村には、何かあるらしい」

何か。水運びのことだろうか。

「何かって？」

真行が訊いてくれた。ソラはもう頭の中がぐしゃぐしゃになっていて、できるだけおかしいことでないことを祈るしかできなかった。淳は少しソラのほうを見て、苦笑いを浮かべる。その表情を顔に貼り付けたまま、真行のほうに向き直った。

「今はまだ、言わない方がいいかもしれん。だがその何かをBOXのオレが調べんわけにはいかんだろう？」

BOX——information boxの略だ。すなわち情報の箱、それは、てがみ屋局長の異名である。「人が知らないからこそ知っておくべきだ」という考えの淳は情報を集めるのが大好きだ。それから余計な知識も。しかしそうしているうちにいろんな危険な情報まで手を伸ばしてしまった。今では政府に追われるような危険な情報を持っている。

「ソラ、まだ開けてないだろうな」

淳が鞆を指差して言うので、ソラはすっかり忘れていたことを思い出す。そうか、もしかして、あれは。

「局長、管理できなくなったって……どういことですか」

淳は困ったように唇を歪めた。自分のひざをトントン、と指で叩

く。

「うむ。ちょっと量が多すぎてな。オレが全て持っていることも無いだろう？ 一人で持つているよりみんなで分けて持っていたほうが安全だ。せつかくいろんなところに散らばっているんだからな」
そんなに守らないといけない情報だなんて、だれがそんなものを狙うのか。

政府。あの金持ちたちは何を考えているのか。奴らはてがみ屋の情報を狙っている。得て何がどうなるのか知らない。おそらく、政府の奴らに有益な情報なんだろう。

自分がもし、政府の奴とかち合ったとき逃げ切れる自信も、敵う自信も無い。

重い。たかが趣味で始まった情報集めなのに、どうして巻き込むのか。

なんでこんなものを押し付けるんだ、この人は。

深刻な表情でうつむいていたソラの肩を、真行が優しく叩いた。

「そういえば、もう一通、手紙が来てるんすよ」

淳に向き直って、ソラのほうを親指で示す。

ソラは慌てて鞆の中の手紙を取り出して、淳に見せた。

「狙われてるといっても、あと一通くらいの時間はあるだろう。いいんじゃないか。配って来い」

そうだ、まだ一通ある。

もしかしたらよい手紙かもしれないという希望が浮かんた。しかし、それと同時に、自分が外に出てきちんと手紙を守れるかという不安も心の中に現れる。

「お前は、今までと一緒にいいんだ。妙にプレッシャーを感じることはない」

淳はオレンジ色の瞳を細めて、につこり笑った。

今までと一緒にだなんて、それが一番苦しいのに。自分の無力さに絶望しているのは、今も昔も何も変わってはいない。

手紙を狙ってくる奴が現れたから、さらに危機感が増しているだけだ。

こういうときはいいことを思い浮かべるんだと教えられた。

ソラは依頼人の顔を思い浮かべてみる。怖かったけど、もしかしたらいい人かもしれない。そんな希望を、もう一度描いてみる。

「行ってきます」

鞆を肩にかけた。真行に目配せして立ち上がる。

「ごちそうさまでした」と、黄色の粒がなくなっただとうもろこしを掲げてみせると、

「おう」

淳は微笑んで、片手を挙げてくれた。

第十話

二人は造船ドッグへと向かうために外へ出た。ソラは何も話す気になれず、真行も何も話しかけてこなかった。

あたりは静かで、その分、男たちのうめき声がよく聞こえた。耳をふさぎたくなるような、その声が。

しばらく黙り込んだまま歩いていたが、真行が急に声を上げた。

「何か食わねえか？」

ソラが顔を上げると、う……と苦い顔になる。

「いや別にこれは親切心なんかじゃなくて……」

「さっき食べたばっか」

とうもろこしのかすを持ち上げてみせる。けちんぼな彼女らしく、粒はまったくなく、きれいに食べきられていた。

「いや……ほらまたいつ食べるか分かんないし、今食ったいた方がいいかなーなんて思ったりしたんだけど」

落ち込んだソラの気持ちを盛り上げようとしてくれているのがバレバレだ。こういうときの真行は面白いくらい自分の感情が隠せない。普段はむっつりを決め込んでいるくせに。意地悪ばかり、嫌味ばかり言うくせに。

ソラは不器用な彼の気持ちに答えようと笑顔を作って顔を上げた。

「うん、欲しい」

真行の表情がころりと変わってほっとしたような顔になる。

「でも交換するもの、どうすんの？」

そこでもっともなことを言うと、真行の表情はもとの苦々しい表情に戻った。

「ソッコーで作ってから持ってって交換してくる。な、なんとかするから……大丈夫だ。うん、大丈夫だからそこで待つとけ」

そっぴい残して市場がある路地のほうへと姿を消した。

どうやってなんとかするつもりだろう。

ソラは笑いをかみ殺しながら、ファミリアボードの上で、青い絵の具をべったり塗ったかのような空を見上げた。

悲しいときはこうしろと教えてくれた、元局長のことを思い出す。あの人は大きかった。誰よりも必死で、誰よりも強くて、優しかった。あの人にあこがれて、あんな人になりたいと思って、てがみ屋に入った。

尊敬していた。

でも彼は、自分の目の前で——息絶えた。

どうして自分が生き残ったんだろう。彼の代わりが自分だったら、てがみ屋はもつと幸せだったかもしれないのに。

ソラは運がよかった。奇跡的なほどに。

でも運がよかったから、目の前でたくさんの人をなくして、そして、たくさん悲しみに沈んでいた。

この運を呪いたい。

荷馬車の車輪の音が道の向こうから聞こえてくる。何を運んでいるのか知らないが、ソラは挨拶をしようと身を乗り出した。それは、自分の気持ちを盛り上げるためのものだった。

荷馬車はソラたちのものよりも少し大きめのファミリアボードにつながれていた。

「こんにちは！」

ソラは挨拶をした。ところが返事は返ってこない。

「あれ……」

荷馬車を覗き込む。誰もいないようだ。

「なにこれ、誰も居ないのかな……ちょっと見てくるね」

ソラはファミリアボードに軽く言っ、て、荷馬車に乗り込んだ。

やはり、誰もいない。荷馬車の幕の奥は真っ暗で、積荷だけが載っていた。

「一体誰がこんなもの……」

そのときだった。ソラの首に冷たい腕が絡まりついた。

「手紙を、よこせ」

熱い息がソラの頬にかかった。男だ。筋肉質な腕と、硬い胸板で体が挟まれている。

「早くよこせ」

ソラは腕を振り解こうと、首にまわりついた腕をつかみ、引き剥がそうとした。

男女の力の差に心の奥が急に冷えた。

まったく歯が立たない。

指先に必死に力をこめてぐいぐい引つ張っても、男の腕はびくともしない、むしろ更にきつくなっていくようだ。

「……っ」

叫ぼうとしても、喉が締め付けられているのでうまく声が出てこない。男の手がソラの肩にかかった鞆に触れる。

悪寒が走った。体は一気に冷えていくのに、のどの奥がしびれるほどに熱い。

手が届く直前の瞬間に鞆をさっと引き寄せた。これだけは、絶対に渡せない。

しかし、男はソラが固く抱きしめている鞆をなんの造作もなく取り上げ、目当てのものをさっと抜き取った。それを指で挟んでパタパタと振ってみせる。

馬鹿にしているのか。

カッときて、男の腕に飛び掛って手紙に手を伸ばした。

「弱え弱え……」

一瞬息がつまり、視界が回転した。

男の驚くほど強い力で振り落とされ、馬車の荷台の床に叩きつけられたのだ。

後から来る背中への痛みには耐えられない。

訊ねたことが馬鹿らしい。

『男の子でも、やっぱ戦うことってきついですか？』

きついに決まっている。だって怖い。痛い。人間だから。

『あたしは、どうしたら手紙を守れると思いますか？』

守れるわけがない。無力でこんなに弱いのに、守れるわけがない。男が、怖かった。そして、無力な自分が、情けなかった。何もできないといつも後悔しているくせに、恐怖から、苦しみから必死に逃れようと、諦めようとしている自分が許せなくて。

男はソラの首をぐるりと回して、自分の顔のほうに向けた。

「ようく、覚えておけ」

男は若かった。ソラたちと同じくらいの年か。

燃えるように真っ赤な瞳。だが見るものを凍りつかせるような冷たく、鋭い視線。額にかかった黒い前髪は、幕の隙間から差し込む光で少しだけ赤みがかって見えた。

「声を出さずに行け。お仲間さんに言うようなことがあれば、」

少年は声を低くして、うなるように言った。

「おれ、五十嵐隼が潰してやる」

『五十嵐隼』

麗花の顔が浮かぶ。

『あいにく、この村には力を欲しているものが居ましてね。彼は強いです。この村に彼に太刀打ちできる者なんて居ません』

力を欲している者。絶対に手紙を守らなくてはいけない。

そのとき、少年が持っている茶封筒に気づいた。彼はステッカーが入っている封が切られた封筒ではなく、先ほどソラたちが眼帯の男から受け取った茶封筒を指に挟んでいたのだ。

少しほっとした自分が居た。守れといわれた手紙じゃない。そう言い訳して、ソラは震えながら力が入らなくなった首を何度も上下に振った。

「行け」

少年は強く彼女を馬車から押し出した。

転ぶようにして何とか着地したソラは、去っていく荷馬車を見送りながら、呆然としていた。

動かなきゃ。

そう思っても体に力が入らなかった。ソラは道の真ん中にへたり込んだまま、動けずにいた。

道行く人々はまるで汚いものでも見るように、ちらりとソラを見ては早足で去っていく。

大きく息を吐いて、しっかりとしなきゃと自分を戒める。

座り込んだせいでズボンについてしまった砂を叩き落としてから、勢いをつけて立ち上がった。

首をぐるりと回してあたりを確認した。荷馬車はどこに行ってしまったのか分からず、追うあてもなかった。追ったところであつさりやられてしまうのがオチだ。何もできない。

今まで偉そうな言葉ばかり並べてきた。それが恥ずかしくて、情けない。

ソラの腰に、柔らかいものが当たった。ふわふわしたオレンジ色の羽毛を押し付けてから、ファミリアバードは様子を伺うようにソラを見上げた。

「ああ……ごめんね。大丈夫、心配ないよ」

ファミリアバードの頭の毛をかき混ぜてから笑顔を作ってみせる。そのとき、後ろから声がかかった。

「悪い、やっぱ無理だった」

真行だった。ソラは先ほどまでと同じように彼の顔を見られず、俯きたい衝動に駆られたが我慢した。

「うん、いいよ、心配させてごめん」

多分見破られた。たとえ上手く笑えたとしても真行なら見破るだらう。

でも彼は、何も言わなかった。

「そうか、じゃあ届けに……」

「あのさ」

ソラは鞆の中を開けて見せた。

「えと……どうか置いてきちゃったみたいなんだよね、あたし、探
してくるから」

そう言っソラは彼に背中を向けた。

第十一話

造船ドッグの隅には麗花の姿があった。

吐息を漏らす。スパナをくるくる回して船を解体しながら、空を見上げた。

「それにこの天気……最悪」

太陽がきらきらと照りつけていた。眩しくて、暑くて、正直麗花の体にはきつい。

突然、その熱がさえぎられ、体がひんやりとした。視線を少しだけ上げると、地面に大きな影が落ちているのが見えた。驚いて振り向くと、いかにも人のよさそうな笑顔。そしてゆらゆらとゆれる色とりどりの鉢巻。

「えと……何用ですか？」

彼は質問を思いつきり無視し、顎に手を当ててこちらに違う質問を投げた。

「ふむ。今日は仕事に精がそうですね。何をなさつとるんですか」

こいつは誰なのか。そして妙ななまり。方言を無理やり習得したかのような印象を受ける。少なくともこの地方の人間ではない。

制服を見て、気がついた。ついさっきここに來た少女が着ていたものと同じだ。

「てがみ屋さん……ですか？」

「おお、良くご存知で。てがみ屋も有名になったもんですなあ」

だんだんと声が大きくなっていく。耳をふさぎなくなる衝動を押さえて、再度訊ねる。

「で、何用で……」

「警察官の方ですよ？ 道案内を頼みたい。この地方には幻覚がかけられているようですね」

「幻覚……ですか」

そんなものはかけられていないはずだが。

「ふむ。出口に向かっていているはずなのに、なぜか同じところに戻ってくる幻覚。いやあ……よくあるパターンの幻覚ですが」

言葉を途中で遮る。

「幻覚などこの世に存在しません。そもそも幻覚をかけられる人間なんているわけないでしょう？」

麗花は男のほうを見るのをやめて、船の解体作業を再開する。

「ふむ、ならなぜ？」

「道に迷ったんでしょう？」

ああなるほど、と頷く男。誰だこいつは。そして馬鹿かこいつは。「まあ、とりあえず道案内頼みます。オレはてがみ屋局長の園部淳です」

男が差し出してきた手は何もかもを包み込んでしまうほどに大きかった。

羨ましいほどに。

それにしても図々しい奴だ。人の仕事を邪魔しておいて道案内を頼むなど、信じられない。それに、彼からは遠慮のかけらも感じられなかった。

「てがみ屋さん、三人終結ですね」

麗花は腰を上げながら錆びた缶に工具を放り込む。淳は驚いたように麗花の顔を見つめた。

「何でそんなことを知っておられるの？ やはり……てがみ屋は人気者ですか？」

阿呆だ、こいつは。

「そういうわけではなく、ステッカーのことを調べに来たんですよ。二人で」

淳はオレンジ色の明るい瞳を細めて屈託無く笑う。

「そうか、良かった……」

立ち上がって歩き出したとき、淳がふと見た方向には少女が居た。明るい茶毛の少女。麗花の元についさつき訪れた少女だった。なぜかさきほどまで一緒に居た少年の姿は無い。少女はひざに顔をうずめて眠っているように見えた。

「ああ、やっぱり案内はよかです。ちょっと彼女に用があるので」
淳は麗花の肩を叩いてその少女の下へ向かう。麗花はため息をついた。迷惑な奴だ。

でもいいかとポケットに手を突っ込んだ。ちょうど買出しに行く時間だ。いつ行くか悩まなくていい。ボロボロの布でつくられた財布とその中に入った硬貨の感触を確認する。

さあ勝負だ。

村人たちは食べ物を麗花に分けてはくれない。ツマハジキは本当に酷かった。でも、いつか誰かが認めてくれるんじゃないかと、そんなふうに信じている。だから何度追いつ返されてもあきらめなかった。

「よかです」と言われても、少女のことは気になった。少しでも様子を見ようと思って覗き込んで、少女——ソラの先ほどまでのようすとの違いに息を呑んだ。

彼女は俯いて小さく震えていた。

淳が少女の隣に座った。そのせいで縮こまった少女がさらに小さく見えた。

少女はなかなか顔を上げなかったが、ふと淳ではない男の影に気づいたのか顔を上げた。

「あ、奇遇ですね」

ソラは無理やり笑おうとしたらしく、笑顔が引きつっていた。麗花はどうしていいかわからず、「ですね」とだけ返した。

「で、仏桑花はどうした？」

淳が決して荒立てることのない、しかしそれでいてはつきりとした声で訝しげに訊ねた。

「んと……あの、サナは悪くないです、全然」

「誰が悪いとか、そういうことを訊いてるんじゃない」

でもですね、ソラは乾いた声で必死に言葉をつなぐ。何かから逃げてるように見えて、麗花は一瞬、自分と似ていると思った。

「見てください、これ……あの、守れて言われた地獄からの手紙じゃないです……あの、これでもあたし……あの」

「行くぞ」

「あの、手紙、盗られたんですか」

ソラの腕を引きかけていた淳が訝しげに麗花を見上げる。

「いや、あの……麗花さんに話した手紙じゃないんで、大丈夫です
そういう問題ではないんじゃないだろうか。

出かかった言葉を必死に押し込める。それを一番痛感しているのはきつとソラ自身だろうから。自分もこの状況でそんなこと言われたらきつと苦しいだろうから。

麗花は唇をかんでソラに背中を向けた。

何もできない。

今の彼女はそんなふうに感じているんじゃないだろうか。あの表情は良く知っている。それは、鏡に映った麗花の顔だ。

自分を見ているようで嫌だった。何でもかんでも言い訳しながらごまかしている自分と似ていて。

第十二話

「手紙のことなら気にしなくていい」

淳は人に見えないように家の陰に入ってから、ソラに向かってそう言った。

「誰に取られたんだ？ 名前とか、顔とか何か特徴覚えてたりしないか？」

ソラには次に来る言葉が安易に分かった。

手紙を奪った奴の特徴を訊いた彼は次にきつとこう続けるに違いない。

——オレが取ってきてやるから

「覚えてないです」

彼が取ってきてくれるのなら確実だ。手紙は戻ってくる。それでいいじゃないか。

でも自分の失態の責任は自分で取るのが普通。だから淳に任せたくなかった。

「そんなことないだろう？」

優しい声が痛い。ソラは首を振った。

「ちゃんと自分で取り返します。だから」

ようやく顔を上げ、そして泣きそうになった。そんなに心配そうな顔しないで。

「あたしを信用できないですか？」

淳は唇をひん曲げた。

「そんなことは」

「昔からずっとそうじゃないですか。何で」

——何でそんなに優しいの？

淳は居心地悪そうにソラから目をそらした。制服の襟を正してネクタイに手を掛ける。

「人にはできることとできないことがある。その……オレはお前にはできることだけしてもらいたいんだ。無茶しないで欲しい。信用はしてるさ。ただ……心配なんだよ」

「じゃあ、局長、教えてください。あたしにできることって何なんですか？ ないですよ。あたしはできないことが多すぎる。あたしは何もできない。だからできないことを全部人に任せてたら本当に何もできなくなっちゃう……嫌なんです。それは。窮地に陥れば人って死に物狂いになれると思うんです。あたしだってきつと強くなれるんです。これはチャンスなんです。あたしが強くなるためのだから」

ソラの肩に淳の大きな手がかかった。

「お前にできること、ちゃんとあるぞ」

淳は真剣なまなざしをソラに向けた。

「お前は、誰よりもきれいな笑顔で手紙を配れる」

ソラは唇を噛みしめた。それはすばらしい褒め言葉に違いないのに。

「そんなの誰でもできるじゃないですか！」

淳が明らかに怯んだ。ソラはその隙に彼の手を振り払い、睨み上げた。

二、三步進んでから振り返り、拳を握り締めた。

「絶対に手出ししないでください。これは、あたしのために与えられた、大事なチャンスなんですから」

ソラは裏道の角を曲がり、大通りに出た。小さなため息をひとつついてはいけないと思っていても漏れ出てしまう。

とりあえず、五十嵐隼の家を探さないとはいじまらない。誰かから情報を聞き出さなくてはいけない。

人と話すことは職業柄、ほとんど苦ではなかった。頬に手のひらを当てて、上下左右へ動かし、揉みほぐしてから笑顔を作る準備をする。

市場の前を通りかかったとき、敷物を広げている中年男性から声をかけられた。

「お、娘さん、見ない顔だな？ あんた、ここの人じゃなかる？」

ソラは「はい」と笑顔で頷く。

「旅の人？ お一人？」

ソラは自分の制服をつまんで見せる。

「てがみ屋です。一人じゃなくて、連れが一人います」

男性は少し訝しげに首を傾げた。

「もしかして、背の低い小柄な男の子じゃなか？ さっき探しよったよ？ もしかして……はぐれたとね」

真行もここを通ったのか。

「ええと……まあそんな感じです。彼、どっち行きました？」
こつち、と男は指で示してくれた。

「ありがとうございます」

ソラは丁寧な頭を下げ、歩き出す。

「あら、そつち逆ばい？」

背中にかかった声は無視した。今は真行と会いたくない。会ったらまた、助けてもらうことになってしまう。それでは意味がない。

そんなことを思いながら歩いていると、ふと聞き覚えのある声が聞こえた。驚いて声が聞こえたほうを見ると、藍色の制服に身を包んだ線の細い少年がいた。麗花だ。

「お願いします。ほんの少しでいいんです」

彼は縮こまって、額を地面に擦り付けて土下座していた。

「本当に少しでいいんです」

「あんたみたいな役立たずにやる食料なんてないよ。あたしたちだって結構きついんだ。ようやく手に入れた食料なんだ。それをお前なんか……！」

麗花の前には、少しやせ気味の中年女性が仁王立ちしていた。目を眇めて迷惑そうに麗花の頼みを断る。

「お金ならありますから、いくらでも渡しますから。お願いします」

麗花はめげずに頭を下げ続ける。女は敷物から降りてきて、何か渡すのかと思いきや、足で地面の砂をすくい上げ、麗花にかけた。

「ケホッ…… 願います」

麗花は口の中に入ってきた砂を吐き出そうとしてむせた。そう言っただけ、苦しうに地面に這いつくばって何度も咳き込んだ。なかなか終わらない。

「金で何でも買えると思ったら大間違いだよ。今はどんなにたくさん『金』よりも、確実にすぐに使える『物』のほうが大事なんだ。それにお前みたいなひ弱な人間に食料を渡したところで何の役にも立たない。お前は要らないんだ。帰りな！」

「願います…… 頼みますから」

麗花は女の足首をつかんだ。だが、その手はあっさりと振り払われてしまう。

「ふざけるな！」

女は麗花の背中を力いっぱい踏みつけた。麗花の口からうめき声が漏れる。

「商売の邪魔だから消えな！」

女からわき腹に蹴りを入れられ、麗花はごろごろと転がった。ソラは見えていられなくなって麗花に駆け寄った。

彼の顔を覗き込むと真っ青で、荒い息をしていた。

「大丈夫ですか？」

ソラは麗花を抱き起こし、物品交換所から見えない場所へ移動させようとした。

「やめてください。あなたまでハブかれます。僕のことは放置してください」

振り返ると、ソラは冷たい視線で見られていた。苦笑いしか出てこない。ここで隼の家を訊くことはできなくなってしまった。唇をなめて麗花に笑顔を向ける。

「問題ありません。あたしには何の問題もありません。この人でもないです」

ソラには彼を持ち上げるだけの腕力がないから、ずりずりと引きずりながら彼を移動させる。

裏道に入り、レンガの家の壁を背もたれに麗花を座らせ、自分もその隣に腰を下ろした。

麗花はなかなか荒い息が治まらなかった。だがこういう状態になるのは慣れていくらしく、大きく何度も深呼吸をして自分で息を整えた。

「毎日こんななんですか」

「そうですよ」

その後、ソラも麗花もお互いしばらく話そうとせず、村人たちの話し声と、波の音が静かに流れた。

「ありがとうございました。こんな風に接してくれたのはあなたが始めてだ。嬉しかったです。それじゃ」

ふと、麗花が地面に手をついて立ち上がった。

「あの、五十嵐隼の家って、分かります？」

「隼ですか」

麗花は少しだけ目を伏せた。

「手紙を奪ったのは隼なんですね」

ソラが逡巡しながら小さく頷くと、麗花は振り返って、視線を合わせようとしたのか、しゃがんだ。

「あなたは二つのものを天秤にかけられますか」

麗花は右手と左手を広げて天秤のように揺らした。

「あなたの命とお手紙」

そのときだった。麗花の真後ろに人影が現れたのは。

その人は「しー」の形にすばめた唇に人差し指を当てて、悪戯しようにする幼い子供みたいにソラに笑いかけた。

ソラは思わず苦笑をこぼしそうになりながらも、無表情を心がける。

「わっ！」

その人は麗花の背中を両の手のひらで押し、驚かした。麗花はソ
ラが始めて会ったときに背後から声をかけられたときのような「わ
ーっ!」というものの凄いい驚きようだったが、振り返ったとたん、た
め息を漏らした。

「姉ちゃん……」

「どう? びつくりした?」

彼女は麗花とよく似たつり目がちの黒色の瞳を細めた。彼女は両
脇に布の袋を抱えていた。袋はパンパンに膨らんでいる。

「あれ、そちらどちらさん?」

彼女はソラの方を覗き込んできた。大きな瞳に見つめられて気恥
ずかしくなり、目を逸らしたくなる。

「星野ソラです。てがみ屋やってます」

ソラは軽く頭を下げた。

「もしかしてお取り込み中やった? やあ……まさか麗花がこんな
可愛い女の子連れてくるとは思わなかったね」

「「違います!」」

というか、ソラの話はどう間違っただけで解釈したらそうなるのか説明
して欲しい。

二人の抗議を受けて、彼女は冗談冗談、と肩を上げた。

「うち、^{ひいちぎょうか}柊叶花、よろしくね。ソラちゃん」

彼女はソラに手を差し伸べてきた。ソラはその手を両手で包み込
むようにして握る。温かく少しだけ汗をかいていた。

「よろしくお願いします」

彼女は両脇に抱えた布袋を地面に置いた。

「ソラちゃんも一緒にどう? うち、水運びやっとなるけん、無条件
で食べ物譲ってもらえるっさねー」

あの水運びを女の人か? よくよく見れば叶花はあの男たちが着
ていたつなぎと同じものを白いＴシャツの上から着ている。

しかし、ソラは海の中に落ちていく男を見たことを鮮明に覚えて
いる。女の人ができる仕事にはとても見えない。叶花はそんなに力

が強そうにも見えないし、仕事は相当きついのではないだろうか。

「きつく……ないんですか？」

上目遣いに彼女に訊いてみる。

「きつかさあー……でもねーうちにはそれしかこの村で生きていく方法が無かけんね……」

叶花は布袋から食べ物を取り出して、ソラに差し出した。ソラは笑いながら首を振る。

「いいですよ。さっき局長からおごってもらったばかりだし」

叶花はソラに差し出した食べ物を自分の口の中に突っ込んだ。それはソラが今日、全て食べきってしまったクッキーのようだった。もぐもぐと噛みながら質問してきた。

「局長さんここに来とらすとね。なんでこんなところに？」

「方言の勉強、とか言っていました」

「ふうん」

叶花は麗花に布袋の中身を見せて、食べ物をとらせた。麗花は「ごめんなさい」ともごも言ってからそれを口に入れる。

「あの、訊いてもいいですか？」

「なんなりと」

やはり姉弟だ。優しい笑顔は本当に良く似ていた。そして柔らかい仕草も。

「五十嵐隼の家とか、分かります……？」

麗花は顔をしかめてこちらを見上げた。

叶花は、んー、と呻って首をかしげた。二つに結ばれた黒髪が尻尾のように揺れる。

「隼に何の用ね？」

「特に何も」

「手紙を奪われたそうです。取り返したいんだと」

随分と冷たい口調で麗花が口を挟んだ。叶花は困ったような顔でこちらを見る。

「諦めんね」

叶花はクツキーを咀嚼して、続ける。

「五十嵐隼の父親は、モンスターよけのためにここにおった人間かい？　てがみ屋さんならよう分かるとじゃなか？　モンスターは普通の人間が何人でかかっていても敵わない相手。そいつを倒すためにこの村におった。それだけあいつの父親は強かったってことやろ？　そんなに強い人間から手紙を奪い返すなんて……とてもじゃないけど無謀だと思うよ？」

モンスターよけ。数々のモンスターの中には、村を襲って食料を奪うモンスターもいる。

それらを寄せ付けないなんてどれだけ人間離れした奴なんだ。

「そこまでしてその手紙を守りますか？」

聞かなければよかった。聞かなければきつと突っ込んでいけたのに。

そんなこと言われたら——怖い。

足がすくんでしまう。場所を訊いたらすぐに家まで行って取り返すつもりだったのに、もう、その勇気が出ない。

「でも……その息子ってだけでしょう？　彼が強いわけじゃない……ですよね」

ソラは唇をかみ締めた。

「あいつは、多分この村で一番強いと思う」

どうして、どうしてそんな奴が自分から手紙を奪ったんだろう。そんな奴に敵うわけない。

局長に言わなくてよかった。彼なら確実だと思ったけれど、彼でもコテンパンにされてしまったかもしれない。そんなこと考えたくないけれど、モンスターを倒すということはそれだけ凄いことなのだ。

怖い——もう無理だ。怖い。

ふと、叶花と麗花が目線を上げたのに気がついてソラもそちらを見上げた。

「何やってんだお前、探したんだぞ」

呆れ返るような声だった。

「いつから……いたの」

ソラは奥歯をかみ締めた。聞かれてしまったかもしれない。

「ついさっき？」

真行は髪をほどいて結びなおした。そのとき、叶花が目を輝かせて真行に歩み寄った。

「髪長い男の子、始めて見た！ いるもんなんだねー。ちょっと、おろしておろして」

「おろしませんよ。それに俺だって昔はわりと短かったんすよ。これでも」

真行は嘆息を漏らして後ろを向いた。

叶花に流されてしまった。でも改めて訊く気はない。逆に怪しまれるだろう。

「ソラ、もう遅いから今日はこの村のどっかで寝るぞ」

ソラは鞆を抱きかかえて立ち上がった。

空を見上げると、それはきれいなオレンジ色に染まりかけていた。今日つろつろすることはできないだろう。

「ちよっと待った。寝るならあたしたちのどこに来ん？ 狭いとけど」

「大丈夫です。ご迷惑をおかけすることはできませんので」

ソラは軽くお辞儀して、叶花と麗花と別れた。

そう、今日はもう日が暮れるからいい。それを手紙を取り返さずに休む口実にして、ソラは少し安心していった。

「もう場所は決めてある。ちょうど空き家があったからそこでいいよな」

真行は横目でソラをちらりと見た。ソラは小さく頷いた。手紙のことに触れない彼の優しさに甘えて、奪われた手紙のことは忘れてしまいたかった。

そついうわけにはいかないことは分かっているけれど。

第十三話

砂漠の冷たい夜が明け、暖かい日差しが差し込む。ソラは目をこすり、大きなあくびをした。まだ少し空気に寒さが残っているのに、毛布を体に巻きつけたまま立ち上がる。

結局昨日はよく眠れなかった。もう諦めてしまえという自分と責任を取るんだという自分がずっと心の中で戦っていたのだ。

階段を、まだ毛布に包まって寝ている真行を起こさないように降りる。

しばらく、一階をうろろしていた。いろんな部屋に入る。キッチンのような場所や、リビングのような場所。そして、ソラはある部屋に入って声を上げた。

「あつた」

目当てのものをようやく見つけた。

そこには、鏡と、洗面台用のたらいが置いてあった。ソラは鏡を覗き込み、その中の自分と、にらめっこする。

「うっ……直んないなあ」

ソラは、頭のとっぺんの、立った髪の毛を指で挟んで押さえつける。首の辺りで踊っている髪の毛も何度も触って直そうとするが、うまくいかない。

「気になるなあ」

唇を突き出して文句を言った瞬間、

「ソラ」

呼ばれて振り返ると、真行が立っていた。

「相変わらずだな」

これは、ソラの毎日の習慣らしい。彼は大きくあくびをして、立ち去ろうとした。

「あんたも、はねてるじゃない」

確かに、真行の前髪も、少し上にはね上がっているようだ。

「お前よりましだ。それに、俺は諦めたんだ」

「いっつも気にしてるくせに」

真行の肩がぴくつとゆれる。

「してねえの」

逃げるように去っていく。ソラは笑いながらその後姿を追った。

真行は外の天気を確かめるためか、窓を開いた。手に持っていたネクタイを締めながら呟く。

「一雨来そうだな」

ソラも窓から身を乗り出して外を見る。湿った風だった。肌にべたりとまとわりついてくる。

空には小さな灰色の雲がいくつかできつつあって、真行の言うことは本当になりそうだった。

彼の天気予報はよく当たる。

「どうする？」

「あのさ……昨日の手紙、結局見つけられなかったんだ。探すの手伝ってくれる？」

真行は特にソラを責めることなく頷いた。

ソラは鞆を抱えてドアを開けた。

ファミリアバードが玄関で待っていた。手綱がきちんとつながぎ留められていたから、きつと真行が連れて来てくれたのだろう。

「行くぞ」

二人はレンガの家を出た。ソラはファミリアバードに飛び乗り、その柔らかさと温かさを感じて、ずっと平穏が続けばいいのにと本気で思った。

「とは言っても、どこを探すか？」

「そだね……昨日通った道を一周とか」

真行は肩をぐるっと回した。そして、顔をしかめる。

「また凝ったの？」

「ああ。しかも今回ちょつと寝違えたみたいだ」

そして今度は首を右に左に曲げて舌打ちした。

「お疲れさん」

ソラはファミリアバードの上で頬杖をつきながらそれを見て微笑む。

「見てろよ、お前も老ければいつか分かる」

「あんたほど酷くはないと思うな」

真行の挑戦的な顔を笑顔で流す。その後真行は表情を緩め、大きくあくびをしてゆっくりかみ殺し、突然声を上げた。

「あ」

怪訝そうにソラは真行のしているほうを見る。

そして、小さく息をのんだ。

「あの人……かしわばうれん 柏原蓮」

仕事を始めたばかりなのか、つなぎを着た男たちが海から水をくみ上げている。石の容器にくみ上げるので、とても重そうである。汗が地面に水溜りを作っている。

その真ん中に、何もせずに腕を組んで立っている奴がいた。そいつはときどき怒鳴り散らしながら、彼らをまとめているようだ。そこに、見覚えのある少女が走ってきた。

叶花だ。

あわてて結んできたのだろう、黒髪はぼさぼさだ。

彼女は威張りくさっている蓮の前に走っていった、何度も頭を下げた。

「ごめんなさい、うち、寝坊しちゃってっ」

「そうですか。気が緩んでいる証拠ですね」

蓮は白銀の髪をゆらして、憫笑する。その左目には眼帯が付けられていた。

「ねえ、サナ、あの人もしかして……」

真行は無言でうなずく。

昨日会った、手紙の依頼主だ。

「ならば、それなりの……」

手で示して叶花を座らせる。叶花の瞳に不安がよぎる。

「ちよつと……まさか」

嫌な予感がした。ソラは隣の真行を見上げた。

「どっちが俺たちの味方だ？」

答えようとしたが、その前に真行は飛び出していた。

「制裁を加えないといけませんねっ」

叶花の頭の上に、足が振り下ろされる。皮肉にも、すばらしい勢いだ。

しかし、その足が叶花を踏み潰すことはなかった。

真行が駆けていって思いつきり蓮を地面に押し倒したのだ。

「叶花さん！」

ソラは、そこへ駆け寄り、呆然としている叶花を引っ張り、二人から離れた。

「何のまねですか」

「わりい、足が滑った」

「足が滑ってこんなに移動できるなんて前代未聞ですね」

蓮は唇を吊り上げて不敵に笑った。

「見たところこの人間ではないようだ。というか昨日お会いしましたね？」

真行は蓮の肩を地面に押し付ける。

「手紙はきちんと届けてくださいました？」

ソラはその場にへたりこんでしまった。真行の腕からも明らかに力が抜けたのが分かる。

「何やってるんですかっ」

息を弾ませ、新たな男が間に割り込んできた。

「おや、ヘタレ警察官さん」

麗花は肩をいからせる。

「揉め事なら外でやってください。それに、ここのことに割り込まないでください、てがみ屋さん」

真行は無言だった。

蓮から手を引き、立ち上がると麗花のほうをちらりと一瞥した。

「そういえば、あなた方の局長と会いましたね？ 私の手紙が何者かに盗まれたという情報を聞きました」

その言葉に、ソラは固まってしまった。返す言葉もない。

それは、紛れもない事実なのだから。

「盗まれたんじゃないねえ、失くしたんだ」

真行の答えを聞いて、男は唇の端を吊り上げた。

「鈍感ですねえ。私はすでに気づいていましたが」

「気づいてないわけないだろ……」

意識しなければ波の音にかき消されてしまうほど小さな声だった。かみ殺したような声に、ソラは胸が硬く太いロープで縛られて、ぎりぎりと締め付けられるような思いだった。

「てがみ屋か、聞いて呆れますね。手紙のひとつも守れないくせに手紙を配らせる？ ふざけるな」

「黙れ」

「手紙を持ってたのはどちらです？ 持ってたほうは……」

「黙れつつてんだろ」

蓮は唇をひん曲げて笑い出した。

響き渡る嘲笑に、真行の目に危なすぎる光が宿った。こういつときすべきことは、局長に叩き込まれている。

ソラは、力なくひざを地面に付けて、体を折り曲げた。

「ごめんなさい。あたしのせいです」

額に砂がつくのもかまわず、深く頭を下げた。

「ソラ、謝らなくていい。こんな奴に」

「サナ……これは仕事なんだよ！ どんな相手であろうと、みんな同じお客様。そうでしょ？」

珍しく、ソラが怒鳴った。

生ぬるい風が彼女の頬を打つ。

真行は、答えずにその場にすくと膝をつき、手のひらを地面につけて額を地面につけて――土下座した。

「大変な失礼を、申し訳ありませんでした。必ず手紙は取り返し、届けます」

蓮は口の端をさらに吊り上げる。

「よろしく願いますよお」

「はい」

二人の声が重なる。

そのとき、鈍い音が響いた。

硬い靴底が、真行の肩にめり込む。真行は、奥歯がぎりぎりとなるのを抑えられなかったようだ。

靴はゴリゴリと肩をえぐる。

「この位しておかないと。反省しないでしょ。あなたみたいな人は」

ソラは腕の隙間から、真行をちらりと見る。

彼は、はむかわなかった。

「申し訳ありません」

「口先だけの詫びはいりませんよ」

靴は振り上げられ、今度は頭を打った。

「っ」

ソラは、がりがりど地面をかいた。砂がつめに入り込む。

真行は抵抗しない。彼のあんな姿を見るのは、ソラとしても悔しかった。

怒りと悔しさが喉までせりあがってくる。

「あたしのせいです。彼はぜんぜん悪くありません」

自然と口から、そんな叫び声が飛び出した。

「ほっ」

蓮はにたりとほくそえみ、こちらに歩いてくる。

「違います。手紙は僕が持っていました。彼女のせいではありません
ん」

息が苦しくなる。どうして嘘をつくの。痛い思いをするのは自分
なのに。

蓮は真行のわき腹に強く蹴りこんだ。真行はそのままごろごろと
地面を転がる。

「女に嘘をつかせるとは、なんとも情けない男だな」

「まったくです」

真行は薄く笑う。その胸倉を蓮がつかみあげる。

「手紙が取り返せないようであれば、いつでも私が制裁を加えます」
脅し文句を吐き、真行を投げ捨てる。

それから蓮はつなぎを着た男たちに指示をしだした。

ソラは、真行のもとへ駆け寄る。

「サナ、ごめん、大丈夫？」

泣きそうな顔で祈るように、彼の体を起こす。

「さわんな」

つつけんどんにそう返すと、真行はソラの手を振り払い、自分で
起き上がった。そして、何回か咳き込んだ。鮮血が地面に散る。

「本当に大丈夫？」

驚いてソラが真行の顔を見ると、真行は自嘲するように笑った。

「こんくらい、なんでもねえ。前いた場所は、もつと凄かったぞ」

そう言つて、手の甲で手をぬぐい、何事もなかったかのように立
ち上がる。ソラは、真行が前いた場所についてはあまり知らない。

いい思い出はあまりなかったようで、あまり聞いてほしくなさそう
に見える。

「ごめん。あたしのせいで……」

ソラは上目遣いに彼を見上げた。一見、なんともなさそうな顔を
しているが、本人のはらわたは煮えくり返っていると、ソラは思う。
今まで彼が反抗しなかったことなどなかったのだから。

あたしのせいで——あたしがなくさなかったら。

こんなことにはならなかったのに。

相手が強いから何……自分と比べれば誰だって強いに決まってる。それが大きいかわさいかの違いなんだから。

いつまで言い訳してんの、情けない。

「手紙、取り返しに行くから、絶対に来ないで」

真行にそう言ってソラは立ち上がった。

「おいちよつと待て、一人で行くな」

服のすそをつかまれた。ソラはそれを平手で叩き落とした。

「これは全部あたしの責任なの、あんたは関係ない」

「連帯責任だろ！ 二人で行けばいい！」

「二人で行ったら意味がないの！」

真行が、え、という顔でこちらを見上げた。ソラは続ける。

「だって二人で行ったらあんたに任せつきりになっちゃう。それじゃダメなの。あたし、強くなりたいの。そしたらこんなみじめ思いもしなくて済むでしょ」

「強くなりたいって……そんなのやめろよ」

「あんたには一生分からないかもしれないけど、弱いつて苦しいんだよ。恥ずかしいし、怖いし、人に迷惑かけちゃうし、あんただってあたしといるときついでしょ。見てればわかるもん。あたしがいると正直邪魔でしょ……そうだね」

「……は？」

「はつきり言えはいいいじゃん、嘘なんてつかないでよ」

「そんな訳ないだろ誰がいつどこでそんなこと言った」

「あんたはいつも言わないでしょ！ 言わなくても顔見りや分かるの。優しい嘘は嫌いな。生ぬるくて自分がどんどん弱くなっちゃう。てがみ屋はそんな奴が多すぎて」

視界が一瞬真っ白になって肩が地面に擦れて熱くなった。痛い。

多分、殴られた。

「いい加減にしろ……俺のことはいくらでも悪く言えればいい。だけ

ど陰口は嫌いなんだ」

奥歯をかみ締めた。言っではいけない言葉が次から次へと頭の中に浮かんでくる。もう口がゆるくなってしまうた。あふれ出る言葉を食い止めるものがない。

「あたしも……子供狩りで狩られちゃえば良かったのにね。そしてあたしは死ぬか強くなるかして、いくらかましだった」

「ふざけるな！ 散っていった奴らに謝れ！」

「あたしもサナみたいになれたら良かったのに」

真行の瞳が、少しだけ見開かれた。

「そうだ……強くなる方法見つけた」

ソラの手が鞆に突っ込まれる。真行はピンと来たらしい。すぐに止めようとした。取り出した手紙をソラから奪い取るうとした。しかしソラはしっかり握って離さない。

「ステッカーを貼れば、あたしだってきつと……」

「やめろ……そんなの弱え奴のやることだ。お前はするな。してもいいことなんて何も無い。お前、政府から狩られるんだぞ……手紙なんて配れなくなる」

「何それ？ 初耳。やっぱ何か知ってたんだ。どうして教えてくれなかったの？ あんたはやっぱり、完全にてがみ屋じゃないってこと？」

自分でも寒気がするような口調になってしまった。

「裏切り者」

ソラは真行の力が緩んだ隙に、ステッカーの剥離紙をはがして左手の甲に貼り付けた。

酷い吐き気がした。

身体の内部から焼きごてで焼かれるような熱と、冷えていく心の芯を同時に感じた。立っていられなくなって、ソラは膝を突いて、そのまま前に倒れた。

誰かの胸に支えられたような気がしたけれど、意識はどんどん遠のいていき、ソラは瞼を閉じた。

第十四話

真行はレンガの家の壁に背中を押し付けて、先ほどのソラの様子を思い返していた。自分は酷いことをしたと思う。ソラの気持ちは痛いほどに分かっていた。かつての自分がそうで、そして今の自分も大して変わってはいない。

気が強くて、男共よりもはるかに強かった少女がいた。

黒々とした瞳と髪を持ち主で、髪はちょうど今の真行のように束ねていた。

その少女に、ある任務が課せられた。

そんなに難しくないはずの、任務。

彼女は今まで任せられた仕事は全て完璧にこなしていたし、諜報部の中でも成績はトップクラスだったので、誰もが大丈夫だろうと信じて疑わなかった。その任務は、彼女一人ではなく、諜報部の面々から他にも四人ほど引き抜かれて、五人で遂行することになっていたのだが、その他の四人は、彼女がいるから大丈夫だ、と、安心するほどだった。

少女の名は茅菜^{かやな}という。

茅菜は四人のために少し無茶をして、女の子には超えられない壁に気づいて、そして戻れなくなつて苦しんで——死んだ。

人間の機能的に女より男のほうが強い。それが事実で、絶対に変わるなどない。

どんなにあがいても、才能があつても、上のほうに行けば行くほど、超えられない壁に気づいて、挫折する。茅菜の周りには大して強くない奴らばかりいて、彼女はの中で自信を持ちすぎた。

どんなに頑張っても、頑張っても潜在的な力というものは変わら

ないことに、真行も同じように気づいた。ただ、それが仕事でなかったから茅菜のようにはならなかったただけだ。

何も努力しなくても、強い奴は強い。どんなに死に物狂いでしても、自分はこの程度。そういう見切りをつけずにはいられない。自分に見切りをつけることは、辛く、悲しいことだ。そして、そんな嫌な気持ちを心の奥に押し込むために、自分のいいところだけを見ようという心が生まれる。

だから、人は、自分の個性を求める。

そして、いいところを見つけられなくなった人は、自分は何のために生まれたんだろうとか、何ができるんだろうとか、とかいう、存在意義の無限ループに陥る。

それが、たまらなく辛く、自分を追い詰める。どうしても悪いところを見なければいけなくなってしまうからだ。

真行は、ゆつくりとソラに視線を落とした。ステッカーの炎を止めるために試行錯誤した末、巻いたバンデージを見やる。そのバンデージは真行が戦うときに使うものだ。

戦い方を教えてとせがまれた。

教えて、その後に苦しむ姿を見たくなかったから断った。でも、それでソラが満足するならそれでもいいんじゃないかと思う心もどこにある。俺は、今お前が苦しむ顔を見たくない。たとえ、お前が未来で苦しんだとしても、俺はお前のそばにいないかも知れないのだし、できれば、教えてしまいたい。

自分が気持ち悪くて吐きそうだ。なんて自己中心的な奴だと。ため息が出る。

その瞬間、見覚えのある顔が目の前に現れた。

「局長……」

淳は苦笑しながら真行の頭に手を置いた。そのままくしゃくしゃと掻き混ぜる。

「おいおい……情けない顔すんなよ」

そんなに気の抜けた顔をしていただろうか。真行は反射的に首を引つ込めて淳を上目遣いに見上げてしまった。上目遣いになると、あまり目つきの良くない真行は三白眼になるのでやめると言われていた。慌てて視線を落とす。

「ソラどうしたんだ？」

地面に寝かせられているソラを、そして腕に何かを隠すように巻かれているバンデージを見て、淳はきつと勘付いたのだろう――「ああ」と声を漏らして、答えかけた真行を制した。

「貼っちまったか」

淳は驚いたような顔をしなかった。むしろ、当然とでもいうような表情で、顎に手を当てて頷いた。真行は唇を噛んだ。

「感想は？」

淳は眉をひそめて、不思議そうに真行のほうを見る。

「何だ感想って？」

「この状況を見てどう思うのか訊いてるんですが」

「別に……？　してしまったことに対して怒ったりなどしない」

そういうことを訊きたいんじゃないんだよ、という怒りは心の中に押し込めたが、自分の気持ちを完全には押さえきれず、言葉を選ばずに淳に押しつけることになる。

「あなたに訊いても意味がないでしょうね」

「ソラの自信につながっていいんじゃないか。丁度いいとオレは思う」

「最初からとぼけずにそう答えるよ……」言いかけて真行は更に壁に背を押し付ける。訊いたからって何になるんだ。

「すいません今の忘れてください」

「ん？　ああ……」

淳は二人を順繰りに見て、苦笑した。

「お前たち二人とも大分疲れてるな。中に入って休もう？　丁度雨も降ってきそうだしな……」

今日は天気が悪い。真行は空を見上げて、ため息混じりに「はい」と返した。

「ソラのことなんだが……前からオレもどうしようかと思ってはいんだ」

真行は黙って話を聞きながら地面に膝をついて、できるだけ揺らさないようにソラを自分の背に乗せる。

「あいつは、昔っから悩んでたからな。親御さんも自分の目の前で死んで、それにオレの親父も、ソラを庇って死んで。誰かに守られながら、誰かを犠牲にしながらかしか生きていけない。自分は弱い存在だって。自信がないと辛いだろ。オレもどうかしてあいつには自信をつけさせてあげたいとは思っていた」

「じゃあ局長が」

真行はゆっくりと立ち上がる。普段からあまり調子の良くない腰が痛む。

「仕組んでたんすか？」

淳は真行を先導するように歩き出した。

「違う違う。たまたまだ。でも、ステッカーが来たときには貼るだろうなって思ったぞ？」

「ステッカーを手に入れた奴がどうなるか知ってますか？」

「勿論。ステッカーを貼った奴らは政府に追われる身になる。中には政府の手を逃れている奴らもいるらしいがな……」

「どこまで知ってるのか知らないけど……知っててそんなこと言うんですか？」

真行は淳の顔を見上げる。淳は笑いながら「だってよく考えてみるよ」と続ける。

「オレはへまをやらかした。政府内の秘密事項に手を出したんだ。それをてがみ屋に配り分けてる。てがみ屋はもうすでに政府に追われる存在なんだ。ステッカーなんて貼らなくてもな。」

だが、ステッカーを貼っていれば、ある程度は応戦できるし、捕まったとしても、あくまでも政府の武器としてだが……生きてはい

られるだろ？ 殺されることはない。生きてさえいれば何とかなることだってある。だから、オレは貼ってくれたほうが安全なんじゃないかと思う」

真行は納得しかけて、しかし、あっさりと首を縦には振らなかった。

「どうして、政府の秘密事項に手を伸ばしたんですか」

「ただ知りたかったからだ」

真行はうなだれて、「馬っ鹿じゃねえの？」という感想を息とともに吐き出した。

「どうやって？」

「頑張った」

問い詰めてものりくらりとかわすただけだろうから、それ以上は訊かなかった。それに、へらへらしていても、元政府の役人に簡単に事情を話すほど無防備な男だとは思えない。

「そうだ、お前に頼みがある」

この人の笑顔は、誰かさんと同じように凄くきれいだと思う。白い歯を見せて笑うその顔は、全く邪気のない美しい笑顔。俺には一生そんな顔はできない、と真行は思う。

「お前に、ソラに戦い方を教えて欲しい」

「あなたが教えればいい」

「別にオレでもいいんだが、ソラにはお前のほうが近い存在だろ？ お前のほうがずっと教えていられる可能性が高い」

「俺が教え続けること前提ですか」

「ああ、一日二日で身に付くものでもなかろう？」

それはその通りなのだが……。

しばらくお互いに黙っていた。淳がきよろきよろと辺りを見渡し始めたので、真行は目的地に近づいたのだと勘付いた。淳は「ここだ」と、言つて裏道に入っていく。真行はその後姿をぼうつと眺めながら追った。

「入れ」

建物の玄関らしきところにたどり着くと、淳はせかせかと中に入ってしまった。一度足を止めて見上げた建物は、この辺りにたくさんあるレンガ造りの家だった。

真行はソラを背負ったままなので、後ろ向きになって、後ろ手でドアノブを回し、自分の足で押してドアをあけた。空き家なのだろう。中には家具と見受けられるものが殆どない。人が減っているから空き家が増えているのだろう。昨日真行たちが寝泊りした家も空き家だった。

真行は扉をまた後ろ手で閉め、ソラを部屋の隅にあった螺旋階段に座らせてから、自分もその隣に座った。

「とにかく、ソラが起きたら、早速教えてやってくれ。この村はきな臭くなってきてる。ソラが自分で身を守るためにも大事なことだ頼む」

ソラが目を覚ますと、なぜかそこは家の中で、隣に真行が座っていた。ソラと目が合うと、真行は居心地悪そうに目を背けた。ソラはそれに少し腹が立って自分も目を逸らした。

「ソラ、ステッカーを貼ったってことは、戦う覚悟があるってことなんだよな？」

「へ……？」

突然の質問に驚き、自分の腕を思わず見る。ステッカーを貼ったときのことがまるで夢だったかのような感覚だったので、ようやく現実だと認めるような感じた。

淳から見えないようにもともと巻かれていたバンデージをさらにきつく腕に巻きつけた。

「別に怒ったりしない。そういう覚悟があって貼ったのかと訊いてるんだ」

考えていることをずばりと当てられてしまったので思わずびっくりとしてしまった。正直勢いで貼ってしまったようなもので、戦えるようになりたいとは思っていても、そこまでの覚悟はない。だが、貼ってしまったのだから腹を括らないといけないと思う。そうしないと痛い思いをして貼った意味がない。だから、こう答えた。

「覚悟は、決めました」

淳はソラの言葉に満足するかのようにつくりと、そして力強く頷いた。

「ステッカーにはいろんな使い方がある。お前には今すぐ、それを習得してもらう」

淳は自分の袋から紙束を、取り出してばんばん、と床に並べて置いた。

「見る。お前に渡した紙袋の中身は、全てステッカーについての情報になつて。ステッカーの使い方には本当にいろいろある。一日で全て習得させようとは思わない。少しずつだ。だから、今日はこれだけ」

淳は二枚ほどの紙をソラに差し出した。

「お前が早速使えそうなのをさつき探していた」

「ありがとうございます」

「それじゃ練習だ」

淳はソラに差し出した紙を引っ込め、文字を目で追いながらソラに指示をだす。

「立て」

ソラは小さく頷いて立ち上がった。周りに障害物がないところまで歩いていき、そこで止まる。

「よし、とりあえず確認だ。しっかり覚えるんだぞ」

局長が紙を指でなぞりながら読み上げる。

「よし、じゃあ『コネク接続』だ。ソラ、バンデージを外せ。痛みは我慢しろ」

「はい」

ソラはバンデージの結び目をほどいた。するとすると白い布が地面に落ちていき、全身が内側から焼けるような痛みが襲ってくる。一度目の接続のときより痛みはひどくないが、それでも辛い。

「うっ」

声ができるだけ漏らさぬように口を結び、痛みが治まるのを待つ。五秒ほどで激しい痛みがずっとひいていく。恐る恐る目を開けると、オレンジ色の柔らかい炎がステッカーからあふれ出していた。

「よし、じゃあエネルギー量の調節だ。時計回りが『上げる（ターンアップ）』反時計回りが『下げる（ターンドアウン）』だな。ソラこうして」

局長は左手の甲に右手の親指を立てて、くるりと回した。ソラがそれを真似すると、炎の量が一気に上がった。そして、今度は反対回りに回すと、量が急激に少なくなる。

「最大出力は……」

局長は文字を目で追いながら、続ける。

「その人の精神状態、精神力によって変わるらしい。あと、身体の状態も関係している……と。ああ、でも身体は健康であれば問題なく、一番影響するのは精神力らしい」

精神力。自分は果たして強いのだろうか、と自問自答してソラは少し俯いた。強いと願いたい。でなければ、ステッカーを貼った意味がない。

「大丈夫だよ」

局長は顔を上げて笑いかけてくれた。「はい」と気の入らない返事を返す。

「それで次は？」

「よし、次くらいで今日は終わりだ。今日は三つ覚えろ。次は武器への変換だ。ソラ、お前、何の武器なら使えそうか？」

「そうですね……剣とか」

「よし、じゃあ剣でいこう。剣をイメージして……『武器番号一』」

ウエボンナンバーワン
と言って炎で形を作るんだ……一度作ったものは、イメージなしで

口だけで作れるみたいだな」

ソラは意識を集中させ、剣をイメージした。柄はいつも真行が使っている短剣のそれだ。長剣には向かないかもしれないが、他にはイメージが浮かばない。

炎で剣を形作るように想像を続けると、炎が剣を形作った。ようやく、戦うという感じがしてきたときに、局長が「以上だ、後は実戦」と言って立ち上がった。ソラの身体は一気に硬くなる。

「誰と……？」

「オレはずっと付きっ切りにはなれないからな。仏桑花に任せた。何か問題でもあるのか？」

そんなに訝しげな顔をしていたのだろうか。淳から不思議そうな顔で訊かれた。

「いえ……」

正直、真行とは向かい合いたくない。話したくもない。ソラは言うてはいけないことを多く口にした。きっと怒っているだろうし、とても気まずい。

それに、いきなり戦えるわけがない。

「やるなら早いほうがいい。この村もだんだんきな臭くなってきているんだ。そのときお前、また傍観者になっちまうんだぞ？」

立ち上がった真行がソラをちらりと見て言った。心なしかもとものと冷たい声が、いつもより冷たく感じる。

「仏桑花、後は頼んだぞ」

局長が床にどっかり腰を下ろして、足を伸ばして、完全に傍観する姿勢になった。

「了解」

真行は軽く頷いてソラのほうに向き直った。目を逸らしたい。合わせたくない。合わせれば何もかも読まれてしまう気がする。

「俺が教えるのは、政府式だからな。政府の奴らには通用しないかもしれないんで……」

「それでもいい。全然問題ないよ」

室内に物が無いからだろうか。そう答えた声はいつもより大きく響いた。でも気になったのはそこではない。少し声が冷たくはなかっただろうか。

真行はズボンのポケットからタイピンを出して、シャツとネクタイを挟んだ。

「口で言うからちゃんとやれ。それから、俺を殺すつもりで来い」
ソラは大きく頷いて、地面を蹴った。避けようもしない真行に、炎の拳を一発お見舞いしようとした。そのとき、足同士が当たったかと思うと、世界が一回転して、気づいたら地面だった。

足払いだ。真行がソラの身体をきちんと支えたまま上手に投げたくれたので痛みは全くない。

「まっすぐ来んな。少しは考えろよ」

了解、の代わりにソラは真行の足をブーツのかかとで叩いて、真行がひるんだ隙に立ち上がった。硬いブーツのかかとは痛かっただろう。してやったりと頬が緩んだ瞬間横から拳が飛んできた。

「わっ」

慌てて後ろに身体を退いたが逆に追い詰められてしまった。

「退くな、相手が攻めてきたら押せっ！」

ソラは握っていた両手の拳を開いて、左右から跳んでくる真行の拳を受けようとした。避けようとすればなかなか当たらないことを理由に。おそらく、真行は当てないようにはしてくれているのだろう。「だから退くなつて馬鹿ッ！ 同じとこばっか見てんじゃねえよ、

足！」

真行が何をさせたいのかわかった気がした。ソラはさっきから殆ど動いていない真行の足元に自分の足を絡めて、真行の身体を引き倒した。

「おーっ」

淳から拍手があがる。一人だけの寂しい拍手。

なんだか少しだけ楽しかった。おそらく上手にかけられてはいなかったと思う。相手のことを気遣わず、思いつき押し倒した。だ

が真行は上手に受身を取っていて、全くと言っていいほどダメージは与えられていないようだった。

「ソラ、ステッカー使えよ」

ソラは「あ」とステッカーを見る。ステッカーからは炎が垂れ流されていた。

「あ、もったいないね」

真行が少しだけため息をついたのが分かった。

しばらく練習して身体が動くようになった頃、一人の少年が家に駆け込んできた。彼はドアを勢いよく開けるなり、地面に突っ伏して、ぜえぜえと息をしながらソラをにらみ上げた。

「僕の……僕の姉の死刑が決まりました。どうしてくれるんですか」
藍色の制服を身に纏った麗花だった。麗花は続ける。

「見せしめだそうですね。逆らったらどうなるかってことを、見せしめるために僕の姉は殺されるんです……あなたたちがもし姉を助けようとしなかったなら、こんな大事にならなくて済んだのに……」

「それは……もしかして俺たちに対する仕返しか？ 手紙をなくしたことに對する……」

ソラはぞくりとした。手紙をなくしたことを恨んで、てがみ屋が守ろうとしたものを壊そうとしているのか。全部自分のせいだ。

「手紙を返してもらえばいいんだろ。ソラ、確か奪われたって言うてたな。誰に？」

「五十嵐隼ですよ、五十嵐隼」

「そいつん家どこだ？」

「この村で一番高いところにある一番大きな家です。方向はこっち」
「そっか分かった。ありがと」

ソラの頭が真っ白になっている間に、麗花と真行の会話は進んでいく。真行が家を出ようとした瞬間、ソラははっとして、彼を呼び止めた。

「あたしが行く！　だつてなくしたのあたしだし、隼は強いんだつて、村一番！　だからやめたほうが」

「暴力は争いを解決する手段じゃない。

争いを解決するのはやっぱり言葉であるべきだと俺は思う。だから、できるだけ戦わなくていいようにことを運ぶ。相手がどんなに強くても問題ない。それにな」

真行は少しだけ表情を緩めて続ける。

「もう一つなんとかしないといけないことがこの村にはあるだろ？　それを解決するときに、もし言葉で解決しなかった場合、戦うことになる相手が女になるのが俺は無理だ。以上」

真行はさつと外に出て行ってしまった。立て続けに言葉を並べられた結果、ソラがその内容を理解するのに、多少の時間を要した。

戦うことになりそうなもう一人の相手が女……？

「蓮が女……？」

ソラは、ずっと男だと思っていた。

第十五話

隼の家の中は真つ暗だった。しんとした中からおどけたような声が聞こえてきた。

「いらつしやいませ、ご注文は？」

上のほうから降ってきた声に、真行はそちらを向かずに返答した。衣擦れの音がした後カーテンが勢いよく開けられ、大きな窓から光が差し込む。その光が隼の身体を照らし出す。燃えるような赤い髪と瞳をしっかりと自分の目に焼きつけてから、真行は口を開く。

「先ほど奪い取った手紙を返していただきたいのですが」

「手紙……？ ああコレね」

隼はポケットから乱暴に封筒をつかみ出し、床に叩きつける。ソラなら激昂して隼に飛び掛っていくのだろうが、真行はそんなことはせず手紙に目を落として、冷静に訊ねた。

「中身は勿論入っていますね？」

「開けてみれば？」

にやつきながら、隼は座っていた階段の手すりから腰を下ろし、こちらへと歩み寄ってくる。心のうちでは警戒を解かずに真行は手紙に歩みより、身をかがめて手紙を床から取り上げた。

立ち上がった瞬間だった。背中の中で殺気が膨れ上がったかと思つと首に手を回されていた。

「そうだと思いましたよ」

締め上げられる寸前で止まっている腕を一瞥し、真行は息を吐いた。

「おい状況分かつてんのか？」

気色悪い。耳元で囁かれ、身をよじりそうになりながらも自分の意思でそれは押さえる。

隼が真行の鞆に手をつ突っ込んだのが分かった。そしてその後何

をするのか簡単に予想がついた。

「僕のナイフはそんなことをするためにあるものではないのですが」
真行がそう言った直後、腕が外され、ナイフが喉もとに突きたてられた。喋れはナイフに皮膚が刺さる。喋れない。

「おれの条件を飲め。そしたら開放してやる」

隼はナイフをそのまま動かさずに真行の背後から正面に回りこむ。
「おれと戦え、それだけだ」

ついさっきソラに戦わないと宣言したのに、結局こうなるのか……
漏れそうな苦笑を抑える。

でも他に方法がない。隼のせいだと言い訳して、首の皮膚がちくちくするのも構わず、

「いいですよ」

と返答した。ナイフが外され、隼の腰が少し低くなった。

「少しいいですか？ 言葉で戦うとかはありますか？」

「言葉で戦う？ 口喧嘩のことか………そういえばお前ら、さっきそこで揉めてたな。仲直りはしたのか？」

「ありますか？」

「なしに決まっただろ糞野郎ッ！」

頭にきたのか、隼が地面を蹴って駆け出した。

二、三メートルの間合いが一気に詰められる。

隼が右足を軸にして大きなけりを繰り出した。真行は身体を伏せて避ける。

その体勢のまま、がら空きになった隼の腹に思いっきり頭突きを見舞う。しかし手ごたえがない。隼が地面を蹴って跳び、衝撃を減らしたのだ。そして、着地とほぼ同時ナイフを地面において、両の拳を握った。

真行は両手を柔らかく開いて受け止める体勢に入る。が、

「接続」

真行はその掛け声を聞いて初めて隼の腕に巻いてある包帯に気づいた。

「使者か……ッ」

真行は自分の背中に背負っていた鞆を投げ捨て、ポケットに手を突っ込んでバンデージを出そうとしたが遅かった。

閃光が走ったかと思うと、目の前に隼の拳があった。頭を傾けて一発目は避けたが、二発目は完全には避けきれず、左肩に捻じ込まれた。

「ッ……！」

壁に叩きつけられ、息が一瞬詰まる。しかしそれよりもきつかったのは肩だ。火傷したかのように熱い。しかし痛みが退く前に次の攻撃が来る。

隼は親指を左手の甲に当て、くるりと回した。

「ターンアップ」

甲から出ている光っている何かの量が増える。これはまずい。だが、身体が重い。

「見てたぜ。ずっと。お前、肩と腰が弱いんだろ？ 何でか知らないけどさ」

「すーカー」

嘲るように笑う隼の気持ちの悪さに寒気がして、それだけ吐き捨てた。

そして、痛いとか言ってるんねえだろ、と自分に気合を入れる。

おれが何のメッセンジャーか知りたいだろ？ へらへら笑う隼を無視して、ポケットに手を突っ込んだ。真行が戦うときに使うバンデージは全部で二つあった。一つはソラに渡してしまったから残りは一つしかない。右のポケットから出したバンデージを右手に固く巻きつける。

「おれ、偉くね？ だってさ、相手を待ってやってるんだぜ。普通ならそんな優しいやついないよなア？ 感謝してる、なあしてる？」

「うるせえ」

歯で噛んで、がっちりバンデージを締める。

「なあんだつまんないの……でもこれから楽しい時間になるよ？」

おれにとつちやあね」

耳元を蚊が飛んでいるかのような煩わしさに呆れる。だが呆れられるほどの余裕なんか本当はない。どうすれば、こいつを何とかできるのか考えなくてはならない。

「もういいよな？ 武器番号一、拳」

その掛け声と同時に左手だけでなく、右手からも光る何かが溢れ出した。

「電気だよ電気。おれは電気の使者だ。最強じゃ？」

電気に見とれていたせいですぐ近くまで隼が来たことに気づかなかった。顎に強い衝撃と、焼けるような痛みが走る。

「ビリビリに感電死させちまおうと思ってるの。お前その大事な一人目なんだから」

「その一人目とやらにはなりたくないけどなッ！」

真行は隼の足の甲を踏み潰し、ひるんだ瞬間に隼から離れる。

だが、頭を巡らせ、どうするべきか考える前に隼は次の攻撃を打ち込んできた。受けられないから、避けるしかない。

「おれさあ、武器好きだったんだぜ？ それなのに全部取り上げられちまってさア」

何のつもりか、隼は突拍子もないことを言い出す。そして、急に目が据わった。今までとは違った雰囲気^{マシンガン}に包まれる。

「機関銃！」

見えなかった。物凄い勢いで叩き込まれた弾丸をまともに食らった真行は、一瞬意識がとびそうになって必死にこらえた。

隼から手紙を取り返すことに名乗りを上げなければ良かったと後悔しそうになったが、それは、ソラが行かなくて良かったという思いに変わる。

ようやくエンジンがかかった。死に物狂いでやらないと、いや、死に物狂いでやったとしても、死ぬ。

「どう、痛かった？ まだあるんだなあ」

受けてばかりはいられない。だが、相手に触れることもできない。

考える。何か手があるはずだ。

「ソラ、お前、熱くねえの？」

ついさっきソラに投げかけた疑問が不意に頭の中に浮かんできた。
「あ、使者になったら、自分が出してるものと同じものは痛くないし、熱くないんだって。局長が言ってた」

ですよね、とソラが淳に同意を求めると、淳は鷹揚に頷き、そして、「あ、そうそう」と真行のほうに向き直った。

「仏桑花、お前も使者になれるんだぞ」

ステッカーがまだあるんすか？ 違う違う、二人までなら連鎖^{リンク}っていつてな、一人が使者じゃない場合、少しの時間だけだが、もう一人のステッカーと一緒に使うことができるんだ。

「一人ずつで敵わないなら、おててつないで戦闘ってこともあるかもしれないな。」

ま、今日はいいだろ、今度な」

手をつないで……？

真行は隼の手を引っつかんだ。だがすぐに物凄い力で振りほどかれた。

「そう簡単にはいかないか」

奥歯をかみ締めて、隼から繰り出された拳を後ろにとび退って避ける。

相手が技出すんなら俺も技出さねえとカッコつかねえだろ、と一人ごちて久しぶりに構える。全身の力を全て抜き、息を全て吐き出した。向かってくる隼をしっかりと目で捉えて、向かってきた拳を跳んでかわしながら後ろへ誘導。空中で回転し、振り下ろした脚で力いっぱい隼の身体を叩く。

「風葉流……攻一型『木鋏』」

地面に叩きつけられた隼は拳を突き立てて立ち上がるうとしている。だがさすがに素早くは立ち上がれない。そこにすかさずもう一

発。後ろに誘導したのはこのためだ。

「風葉流攻二型『草刈』！」

駆け出す。丁度隼の後ろにある柱に腕をかけ、それを軸にしながら回転。丁度立ち上がった隼の脚を真行の脚が刈った。

隼は床の埃を散らし、壁に激突した。

「いつてエんだよッ！」

拳を地面に思いっきり叩きつけ、今度は素早く立ち上がった。

「ふざけんな、ふざけんなふざけんなふざけんなッ」

隼はステッカーに親指を突きたて、回し、更にエネルギー量を増やした。

「武器番号二、剣」

剣の形状になった電気を見て、真行はまたまずいと直感した。隼の手を握って、自分も使者になれば、攻撃を受けられるようになるから勝機はまだある。だが、相手のリーチが長くなってしまった今、それは更に難しいことになってしまった。

「嵐荒を使うか……」

真行は風葉流と嵐荒流という二つの流派の武術を習得している。

というよりも政府から習得させられた。

風葉流は「風に流れる木の葉のように攻撃を流し、受け止める」型を多く持つ流派で、ついさっき使った技はどちらもこちらにあたる。反対に嵐荒流は「吹きすさぶ嵐のように激しい」型が多く、守備のためにある守型であっても、かなり激しい攻撃的な技になる。その分相手に与えるダメージは大きいのだが、自分もかなり疲弊する。そうして身体を傷めることになる。

「この剣を受け止められんのか？ ザッパリいつてやる！ 一瞬だぞ一瞬！ 可愛そうだからこのナイフあげる。フェアな立場で戦いたいんだよ？ おれだって。だって一方的じゃつまないもんなッ」

放り投げられたナイフは真行の黒髪の一部を切り裂いて後ろの壁に突き刺さった。それで、真行の理性は一瞬で吹き飛んだ。

「今何したよ？ さっきからそういうことに使うもんじゃないって

言っただろ」

なにやら逆鱗に触れたらしいことに気づいた隼は反省するのではなく逆に真行を煽った。

「なにそれ、大事なもの？ ああ、最近流行の形見とか？ うんわ、そういう人には見えないけどな」

「うるさい」

真行は唇を噛んだ。

「ひやは、凶星か、お兄ちゃんやるねー、だれの？」

隼の剣が、すぐ近くまで迫った真行に振られた。左腕に当たった気がしたがそんなことを気にすればやられる。隼を地面に押し倒した。手紙をポケットから無理やり引き抜き、あて先を確認する。

「この手紙、」

「それがさつき盗んだ手紙だよ？」

その声がしたと同時に、全身が焼けるような痛みに襲われた。

「しまッ……」

ぼたぼたと地面に水溜りを作っていく血が、自分のものでないと信じたかった。

電気で作られた剣が腹部に突き刺さっている。

「あーあ、油断しちゃうからそんなことになる、全く、大体おれがそんなに簡単にやられるとお思い？」

その後の嘲笑が痛かった。剣が引き抜かれて、真行は膝をつき、そのまま地面に崩れ落ちた。全身の感覚が殆どない。全身に突き刺さっていたらしい棘が消えた後も意識が朦朧として、動けなかった。隼は攻撃してこなかった。

「久々に楽しめた。せっかく戦ってくれたんだから、その手紙は返してやるよ。それじゃあ、おれは呼ばれてるから」

「誰に」という声は出てこなかった。隼が立ち上がって外に出て行くと同時に、真行は「畜生」と床に額を押し付けて呻った。

第十八話

ソラは麗花とともに柊姉弟の家へと向かっていた。淳はなぜか知らないがここに残る、の一点張りについて来てくれなかった。淳のことだから何か理由があつてのことだろう。

柊姉弟の家はこの村ではありきたりのレンガ造りの家だった。二人には少し広すぎるのではないかと思うほどがらんとしていた。

結局、叶花に死刑を受けさせないためには叶花自身を逃がすのが妥当ではないかということに至り、叶花を連れ出すことにした。蓮は叶花を束縛するようなことはせず、「死ぬ前にこの村を存分に見てくればいい」と残して、違う仕事場を見に行ったそうだ。この村の周りには村が少なく、一番近い村も蓮の管理下なので逃げられないらしい。叶花は村を見ることがもせず部屋でぼうつとしていると、麗花が言っていた。

叶花の部屋の前でドアをノックすると、「どうぞ」と返ってきたので、ゆつくりとドアを開ける。

「おじやます」

「どうぞ」

こんなときでも明るい声で叶花は応対してくれたが、表情の端々には疲れが見てとれた。

「ソラちゃんか……いらつしゃい。ご用向きは何？」

ソラは叶花が座っている椅子の前の椅子に許しもなく座ってしまい、すいません、と慌てて立ち上がった。

「いいいいいよ、座って」

叶花に椅子を勧められて再度椅子に座る。

「叶花さん、逃げませんか？」

突然の発言に叶花はえ、と眉根を寄せて、怪訝そうな顔になる。

「ここから逃げても、隣村も蓮の管理下だから、逃げられんによ？」

「その話は先ほど麗花さんから聞きました。でも、あたしたちなら逃げられる手段を持つてる。ファミリアがいるんです」

「ファミリアってファミリアバードのことやる？ あなたたちが乗ってきた鳥。でも一羽に二人も乗れんんじゃないか？」

「それは問題ありません。ファミリアは二人までなら耐えられます」
「そんな無理させちゃ……もし逃げられたとして、あたしはどこにおればいいと？ てがみ屋にでも入れてこと？ 何それ麗花と離れ離れになるとよね、そんなの嫌です」

「ファミリアは局長のも合わせて三羽いるんです。麗花さんも連れて行けます。逃げられたらどこかの村にでも」

「どこの村も貧乏だってこと、知ってるよね、受け入れてくれると思うと？」

叶花が疲れ果てたように大きなため息を吐いた。

「うちはここで刑を受ける。それで満足なの」

「叶花さんは逃げたいとは思わないんですか？」

「満足なの！」

叶花は泣きそうな顔になっていた。自分に言い聞かせるような叫びに、ソラは続く言葉を発することができなかった。麗花が叶花の隣に座る。

「もうそんなに意固地にならなくてもいいじゃないですか。この機会だ。この村とも縁を切って、そしたらきっと彼女のことも忘れられますよ」

叶花はその優しい言葉にいきりたって反駁しようと口を開きかけたが、ソラのほうをちらりと見、居心地悪そうにその口を閉じた。

「あんたは友達のことをそんな風に切り捨てられっつ？ あたしだって好きでこうしてるわけじゃなか。本当は……」

「僕には友達なんていませんでした。だから姉ちゃんの気持ちなんて分かりません」

「そっか、そうよね……」

肩を落として完全に下を向いてしまった叶花に、ソラはかけづら

かったが声をかけた。

「あの、何かあるんですか……もし教えてくだされば、手立てを考
えることもできますし」

「全部丸く治められるって？ そんなことできるわけないやん」

ソラは「それはできません」ときっぱり言ってから、膝の上で自
分の両の拳を握った。

「友人関係で何かトラブルがあつたのでしょうか？ 心のすれ違いが
あるから、仲たがいをしてしまうんです。てがみ屋は心を伝えるの
が仕事です。だからそういうことならあたしたちに任せてくだされ
ば……お互いの心を伝え合つて仲直りでも……」

「もう無理だと思う」

「できますよ。きつと大丈夫です。やってみせます。何もしないよ
りは、きつといい結末になる」

「もし、それよりも悪い結末になったら、許さんけんね」

「分かつてます」

叶花は品定めをするようにソラを見て、ゆっくりと話し出した。

叶花はこの村の独裁者、柏原蓮と大親友だった。いろいろと大変
なご時勢だったが、二人はとても仲がよく、度々会つて遊ぶことが
あつた。まだ小さい頃の話だが、叶花の記憶の中にはきちんと刻ま
れているというところが、ソラに二人の仲のよさを感じさせた。

ある日、政府の役人が子供狩りにやってきた。ソラもこの子供狩り
にあつており、実情は良く知っている。だが、蓮や叶花の年——ソ
ラよりも五つ上らしいがその年だと自我もしっかり芽生えているし、
政府の役人にとっては扱いにくいのではないだろうか。

「それがさ、蓮は筋がいいって褒められて、年は上だけど、連行さ
れてしもつて。そして政府の役人に」

あ、とソラは一つ胸の痞えがとれた気がした。そういえば真行が、
蓮を最初に見たときに

『俺と同じ二オイがする』

と言っていた。あれはそういう意味だったのか。一回会っただけでそこまで見抜くのか。それとも政府の役人と分かるような印があったのか。それは分からないが、すぐに教えて欲しかった。教えてもらったところでどうせ、何も変わらないだろうが。

「それで、そのあと暗殺部、つてとこに」

その単語には聞き覚えがある。同時に真行が「あそこは異常だ」と言っていたのを思い出す。何が異常かというと、訓練の量、そしてそれに比例する強さ。ここまではいい。それに加え、名前の通り、殺した人間の数がおぞましいらしい。

何のために作られたかという点、政府に都合の悪いことをもみ消すため。諜報部が漏れている情報を調べ、それを取り返した後に暗殺部が人間を殺しに行く、というつながりがあったためか、諜報部と暗殺部はつながりが深い。真行から教えられたことを今この場で使うとは全く思っていなかった。

「で、蓮が帰ってくるってしばらくたってから教えられた。暗殺部の悪評は凄かったけん、帰ってくるって知って、怖くて、夜うなされて。ひどいやろ、友達なのに信じられんなんで」

叶花が自嘲するように笑った。

「勿論、村の人たちも怖がって、いざ帰ってきたときに、誰も声かけてやらなかった。うちんちに蓮が来て、でも蓮はうちんちの扉をノックしきらんでドアの前でずっと立っとな。それなのにうちはまだ怖くて、ずっと無視して——そのあとに蓮が水運びをさせ始めた」

「叶花さんは、今、怖くないってことですか？」

「怖いさ。いつ殺されてもおかしくないとやけん……でも」

「友達思いな人ですね、あなたは……だって、自分が殺されそうになっても、絶対に相手のせいにはしない。大丈夫ですよ、きっと元通りです。政府の役人だって人間ですから。あんなに冷たいように教育されちゃっても、心は人間です。寂しいと思ったり、嬉しいと思ったり、楽しかったり、多分するんだと思います。きっと仲直りし

たいという気持ちもどこかに。あたしの相棒は無表情すぎてよく分らないですけど」

叶花と麗花が急に戸惑った顔になる。ソラは満面の笑みで返した。
「あたしの相棒も、政府の役人ですよ？」

ソラは叶花に手を差し出した。

「手紙を書いてください」

「でも、こちらには手紙を書くお金なんて……」

「手紙は字が書かれている紙のことを言うんじゃないやありません。書かれている内容のことを言うんです。今一番、伝えて欲しい言葉を考えてください。手紙のいいところは、自分が普段言えないことを伝えられるところです。叶花さんが言いにくい言葉でも構いません」

叶花は顎に指を当ててしばらく考え込んで言いかけ、を繰り返していたが、ようやく心が決まったらしい。顔を上げて、ソラが差し出した手に手紙を乗せる素振りをしながら、口を開いた。

「『ありがとう、ごめんね、それから、大好き』と伝えてください」

ソラは手紙を両手で受け取る素振りをしてから、大きく頷いた。

「受け取りました。」

必ず、届けます」

「はい」と答えた叶花の声は心なしか涙声だった。

よく考えると、蓮は身体をマントで覆い隠していた。特に前のほうはしっかり閉めていた。おそらく体の凹凸を見せないように、そして、女だと分らないようにするためだったのだろう。

ソラは叶花が処刑される時刻よりも前に蓮の元を訪れた。

「柏原蓮様、お手紙が届いています」

「私に？」

水運び集団に指示を出していた蓮は怪訝そうに振り返り、ソラの手元に何もなかったことを確認して、眉をひそめた。

「からかうのはよしてください。何もないくせに」

「叶花さんからの手紙です」

蓮の瞳が明らかに揺れ、複雑な表情になった。訝しげな、でもどこか悲しそうな表情。それをごまかすように早口で怒鳴りつける。
「そんなことよりも、手紙は取り返したのですか？　というか誰に盗まれたのか分かったのですか？」

「五十嵐隼です」

蓮は「お疲れ様です」とソラの肩を叩いた。ソラは肩に乗せられた手を払って訝しげに蓮を睨みつける。

「取り返すも何も、隼は私が手紙を送りたかった相手ですよ？」

意地の悪い笑みと一緒に聞こえたその台詞にソラは開いた口がふさがらなかつた。同時に蓮に対する怒りが湧き上がる。

「どういふことですか？」

「たまたまでしょう……私は知りませんでしたからね。まあ、あなたの相棒さんは無駄足だったわけだ。可愛そうに。隼は先天的なものに恵まれている。戦って勝てるわけがない」

蓮はマントを翻して踵を返した。

「でも……話し合いで解決する方向に持っていくって……」

「隼は何かと喧嘩をふっかけてくるような奴です。どんなにあなたの相棒さんが口が達者でも戦わずにあいつと交渉することはできないでしょう」

サナなら大丈夫、そう自分に言い聞かせて首を振った。どうせ今更自分が行ったところでどうにもならない相手だ。自分にできると、今すべきことをしなくてはいけない。

「叶花さんの手紙の内容、

『ありがとう、ごめんね、大好き』です」

「それだけですか」

蓮の表情は見えなかつた。淡々とした声をソラに放って、彼女は水運び集団の輪の中に戻っていった。

この言葉を伝えられた蓮は何を思ったのだろう。実は何も変わらなかつたかもしれない。

蓮の寂しげな後姿をみて、ソラは思った。

蓮はきつと深い傷を負っている。一人でいることは辛く、寂しいことだから。

たとえどんなに強がってみても、その思いは決してぬぐいきれない。

「蓮さん、お返事、ありませんか？」

蓮は「ありませんね」と冷たく返事する。

「処刑を止めたいのなら、実力行使できてください。私は言葉なんか信用しない人間ですからね。言葉なんていくらでも作れる。そんなうわべだけの言葉なんてきいたって無駄です」

言葉の無力なところを思い知った。言葉は最も簡単に気持ちを伝えられる手段だが、その真偽は言った人にしか分からない。人が信用できない人に言っても意味がないのだ。

「叶花さんは、蓮さんに本当に悪いって。叶花さんはあなたのことが嫌で避けてたわけじゃないです。怖かっただけらしいんです。政府の役人だけ」

「私に恐怖を覚えたってことですか？ それで十分です。それに私は政府の役人なんて言われたくない。そう言われた私たちがどんな気持ちになるか考えたことはありますか？ その言葉は十分差別用語ですよ」

私たちはなりたくて役人になったわけじゃない。被害者なんだ。

蓮がそう付け加えた声は小さくなった。

「それに、それはあなたが代弁するべきじゃない。あなたなんかに伝えられても本当の叶花の気持ちが分かるわけがない」

その言葉を聞いた時、てがみ屋は何のためにあるのだろうと思った。

今までずっと気持ちを伝えるためにこの仕事をしてきたのに、伝えられることを拒否されてしまったのだから。

第十九話

真行の腹の傷は急所を外されていたので、助かった。

手紙のあて先にはこの場所の住所と、五十嵐隼の文字。ソラは気づいていなかったのだろうか。住所を確認していたのに。届け先の人間が奪いにくるはずがないという思い込みの力のせいだったのかもしれない。壁まで這っていつて壁に身体をもたれかけ、文面を見る。ソラは見えてはいけないというが、そうも言っていられない状況だ。

「何だよこれ……」

乱暴に破かれた封筒の中を出してみると、ソラが持っていたステッカーと同じ文面が現れた。中にはステッカーが剥ぎ取られた後の剥離紙——おそらく先ほど隼がつけていたステッカーのものだろう——そして几帳面な美しい字で書かれた手紙がもう一通入っていた。見ることに多少の罪を覚えた。少しは自分もてがみ屋になれたということだろうか。

『前略

はじめまして。香焼村で水運びの指導をしております柏原蓮です。

早速ですが実は私、五十嵐様と折り入ってお話したいことがございます。

この香焼村の村人たちのことについてなのです。

同じような肩身の狭い思いをしておられるお立場でとても親近感が沸きました。もしよろしければ村の中心部辺りに水運びの指導で来ておりますので今日中にお会いできませんか。

取り急ぎ、用件のみにて失礼いたします。

草々

二〇三八年 三月五日

柏原蓮

五十嵐隼様』

同じような肩身の狭い思い、のところに何か引っかかりを感じた。蓮はそういえば政府の役人だったな……と思い返す。蓮が必死に隠していた身体に身につけていたのは政府の役人の制服だったからすぐに分かった。それに感情が表に表れない雰囲気も政府の人間らしさを醸し出していた。

ただ、隼に関しては役人だとは思えなかった。おそらく、戦い方も政府に叩き込まれたものではない。かなり強力な技ではあったが二人が同じように肩身の狭い思いをしている。この村に入って感じたいくつかのことを頭の中で整理する。過労働とは思えない水運び。辺りに漂う潮の香りとごみのおい。そして……村人の非協力的さ。それによってハブかれた、警察官。

いや、ハブかれたのは蓮と隼もだ。麗花とは違う意味だが。明らかに村人から避けられている。

「ハブキ村か……」

真行は宙を睨んで考えを巡らせる。

だが、ハブかれたメンバーなら麗花にも手紙が行くはずだ。

「この村を嫌っている……？」

二人と麗花の違いといえばそのくらいしか思い浮かばない。

だが、隼がなぜハブかれているのかが分からない。明らかに彼は村の中で浮いているが、異常なくらい好戦的だということを除けば、他の村人と何ら変わらない。好戦的なことだけで、そんなに差別されるとは思えない。最近是好戦的で強い人間を村の守護者として、モンスターから村を守ってもらうことが多い。隼ならその役目が適正だと思っし、その役目を負わされている可能性も十分にあり得る。

だが、守護者としておかれた人間はどここの村でも尊敬されているし、村人たちから愛されているはずだ。それなのに……。

そのとき、一つの写真が真行の目に留まった。

埃を被っている家の中で、きれいに埃が払われているその写真はよっぽど大切に保管されていると見えた。真行はその写真に写っている子供と男を見た。子供は隼だ。そのまま今の顔を幼くして、目つきを緩めたような顔立ちをしていた。もう一人はおそらく、父親。雰囲気はどこことなく似ていた。隼とは違い、がっしりとした体格のいい男だった。だが、表情が純粋な美しい笑みではなく、少し卑屈な笑顔だった。そのあたりが隼と重なる。

そういえば

「五十嵐隼の父親は、モンスターよけのためにここにおった人間ばい？」

ソラに叶花がそう言っていた。それなら、余計ハブかれるはずがない。

「何かあったな……」

真行は腹を押さえたまま立ち上がった。少しよろけたが、自分の仕事を終わらせるには何ら問題はないはずだ。

とりあえず手紙を返そうと思った。

外に出て振り返ると、他の家に比べ、隼の家は豪勢で大きかった。おそらく少し前までは上手く行っていたのだ。この村は。

淳は村の端の砂漠が見えるところまで来ていた。

「なんだかなあ」

砂漠化はただでさえ進行している深刻な環境問題なのに、どうしてこんなところに潮水をまくのか。

水運び集団が運んでいる海の水は浄水されて隣村に運ばれること

はなく、ばしゃばしゃと少しだけ残っている木にかけられている。何のためにこんなことをしているのか全く分からない。

塩生植物ではない普通の木に潮水をかけてしまえば塩害で枯れてしまう。そんなことくらい、少し前の環境問題が大きな問題として報道機関に取り扱われてきた時代の人々は知っているはずだろうに。「柏原蓮の圧力か」

と独りごちて、ため息を吐きそうになって慌てて抑える。

ため息を吐きなくなるようなひどい時代だが、淳は絶対にため息を吐かないと心に決めていた。

「親父ならどうする？」

淳の父親は郵便局長だった。ソラをはじめとする今のてがみ屋メジャーは父が拾ってきた者たちばかりだ。淳が十二くらいの頃、子供狩りがあった。淳は狩られる年代から遠く離れていたため、被害にはあわなかったものの、自分たちの村やその隣村ではかなりの者が被害にあつたらしい。その被害を減らすために父は色んなところへ出て行って助けてはつれて帰ってきていた。父は子供が大好きで、勿論手紙も大好きだった。

そして、その両者を守るために死んだ。

父は話し方が多少変だったし、おかしなところで盛り上がったりする不思議な人だったが、淳の憧れだった。だから自分の話し方ではない重く堅苦しい話し方で話す。そして情報収集に長けていた父を見習って自分もたくさんを知ろうと思っている。額の鉢巻にしたってそう。

「局長！」

ソラが駆けてきた。上手くいったかと思えばどうやらそうでもなかったらしい。淳に報告を始めた声にいつもの元気がない。

「それで……蓮は結局……止められませんでした」

「まあ大丈夫だ。実力行使で行けば止まるんだろ」

淳は一通り説明を聞いてからソラの頭をぼんぼんと叩いた。

「その……実力行使があたしにはできそうにないんですが……」

「できるできる、少し教えてもらったんだ、お前さっきちゃんとできてたじゃないか。仏桑花と戦えてた……お、丁度来た」

真行が来た瞬間、ソラは目を反らした。真行の手に血がべっとりついていたからだ。

「大丈夫かお前……」

真行は二人の目の前まで来てから地面にそのままへたり込んだ。

柄にもなくへらへらしながら話す様子はソラへの気遣いか。

「いや……傷は大したことなくて、いったん塞がったんですけど歩いてたら開いちゃって……でも手紙は取り返せました。でも内容が……」

手が汚れてるから出してください、と真行はポケットを指し示す。手紙はよれてはいたが汚れが全くついていなかった。大切に運んできたのだろう。

「それは受け取り主からもらいました。驚くことにあて先は五十嵐隼だったんすよ」

それを聞いて淳が手紙を開け、眉根を寄せた。

「何を企んでるんだ、まったく……」

ソラも手紙を覗き込む。あて先が隼になっていたことは、蓮からきいて知っていたが、蓮が何をしようとしているのかは気になる。

「この水運びも……何のためにしようとしているのか分からんしな」
淳は手紙をたたんで、親指で水運び集団を示して見せる。

「あれ、隣村に運んでるんじゃないんですか？」

淳は首を振った。

「まるで、わざと塩害を起こしてるみたいだ」

「ちよつと待った、塩害ってなんすか？」

諜報部員、っていうのはなかなか常識を知らないもんだな、と淳が鼻で笑った。とたんに真行はふてくされたような顔になる。

「塩害って言うのは塩分によって植物が被害を受けること。つまり、海水には塩分がたくさん含まれてるでしょ。それを村の周りにまい

たから、村の周りの草が枯れちゃったってこと」

それを聞いて真行は、新たな疑問を口にする。

「でも、何で植物が枯れちゃうんだ？」

「植物がもとも塩分に強くないから。一部の例外、マングローブとか、塩生植物とかって知ってる？ 海の周りに生えてる植物なんだけど、そういう一部の例外を除いては、すぐに塩分にやられる」

「でも、ここにあるのは普通の植物だと」

「だが、それを知っていながら、どうして柏原蓮がこの村の周りに水をまくことを指示したのか分からんな」

淳は腕を組んだ。

すると真行が当然のようにさらりと答えた。

「恨み、じゃないっすかね」

さすが、このあたりのことは聡い。だが淳は納得できないらしく、首をかしげた。

「とにかく、この天気は問題だ。雨が降れば土砂が全て流されてしまっ」

空を見上げた淳に導かれるようにソラも顔を上げた。

空には灰色の重い雲が垂れ込めていた。

「あの、局長」

その悪い天気には半ば誘導されるかのようにソラは口を開いた。

「手紙を配る意味って、何ですか」

「そこを訊くのか、お前が」

淳は心底嫌そうな顔になった。ソラは俯きがちに頷く。

「分からなくなっただんです、蓮から突き返されて………手紙じゃ、言葉じゃ、本当の気持ちなんて伝わらないって言われて、それもそうだとか思っちゃって……今まで何してたんだろって」

「じゃあ、どうしててがみ屋に入ったんだ」

「それは……ツ元局長に憧れて、勿論手紙も好きでしたけど……一番はそれでした。あんな人になれたらいいなあって」

子供狩りで政府に連行されそうになったソラを助けてくれたのは

淳の父親だった。彼は命を助けてくれただけでなく、手紙を配るということも教えてくれた。しかし、彼はソラがまだ幼い頃に亡くなった。

「親父は俺にとっても誇りだよ。今でもまだ目標だし……一生かかっても追いつけないかもしれないけどな」

淳ははにかんで答えた。

「そしたら……今までどうして手紙を配ってたんだ？」

「ただ単に……笑顔が見たかっただけです、でも最近は」

そんな美しい手紙を配ることができない。手紙のいいところを見つけて出して配る意味を探すけれども、そのいいところも一つ一つ潰されていく。

「局長は」

「理由なんてない。ただ好きだからだ」

え、という声を飲み込む。

「好きなもの、好きなことにいちいち理由が要るのか？ オレはただ好きだから手紙を配るんだ」

肩の力が抜けた。ああ、こういうところが似てるんだ。

だからどんなへまをやらかしても許してやれるし、付いていける。

「局長」

「ん」

「局長は、きつと追いつけますよ。元局長に」

「そうか、それは良かった」

屈託のない笑みがとても素敵だった。元局長と同じように。

そうこうしているうちに叶花と麗花が現れた。よく見るとここは柊姉弟の家のすぐそばだったのだ。どちらかが気づいて出てきたのだろう。

叶花に蓮が手紙を受け取ってくれなかったことを伝えると「道理よね」と彼女は頷いた。

「ただでさえ、うちのこと信用できたらんに、信用しろって言う

ほうが無理な話。うちもできるだけ蓮と直接話しようなかったけど……ソラちゃんに甘えすぎとったかな、大丈夫、自分で伝えるよ、ちゃんと」

「もし、上手くいかないようだったら、あたしたちが止めに入ります。だから安心して自分の心の全てを伝えてください」

「分かった、ありがとう、ソラちゃん」

真行は麗花に連れて行かれた。傷の手当を受けるらしい。本当に大したことがないのならいいのだけど。淳はというと、ずっと水運び集団の様子を眺めていた。

「気になりますか？」

叶花が訊ねると「興味があります。もしよければ少しお話を聞かせていただけますか？」と完全によそ行きの返事だ。

叶花が淳に話し出したのでソラもその話の輪に加わる。

「この村では十五歳以上の男子に水運びの仕事が与えられます。別に義務ではないので、しなくてもいいのですが、一人一日石の器一杯分の潮水を汲んできて運べば仕事は終わりで給料は食糧です。この村に物品交換所がありはするのですが、そこで買うよりも水運びをしたほうがたくさんの食糧を手に入れることができます」

「それで、たくさんの人が水運びをしていると……なるほど。ところで、あなたは女性の方ですが、どうしてそのお仕事になさっているのですか」

叶花は淳がそのことを知っていたことに驚いたようで、一瞬肩が揺れた。

「いえ、先ほど事情を聞きましたので」

言い訳を付け加えて、微笑む。さすがBOXといわれるだけある。相手に話させるのが大変上手い。

「恥ずかしながら、私の弟の麗花が虚弱体質で、ハードな仕事をできませんでしたので……私が代わりにしております」

「ここに、水を運んでくることについて疑問を持たれたことはありますか？」

おそらくこれより前の質問は淳も知っていたことだろう。話しやすいようにわざと訊いたに違いない。ここから核心に迫っていくつもりだろう。

「塩害、ですか」

叶花は分かっていた。

「誰もが疑問に思っています。でも……蓮には逆らえないです。食糧のこともあります。村の食糧は全て蓮によって管理されているんです。物品交換所のものもそう。でも何よりも懸念されているのは、蓮が政府と繋がっているのではないかということ」

「もし何かあればこの村が潰されるかもと？」

「はい。時々彼女はいなくなります。だからそのときに連絡を取り合っているんじゃないかって……私はそうは思わないんですが……」

「分かりました。ありがとうございます」

淳は礼儀正しく頭を下げてから、また考えにふけりだした。

第二十話

処刑は夕方の予定だった。叶花を見守るべく、家の影にソラと真行は身を潜めていた。

きれいな夕焼けは見られず、遠くから雷の音が聞こえ出していて、ソラは鳴る度にびくりと身体を震わせた。真行がそれをからかい、ソラはむっとして、そしてあることを思い出した。

「あのさ、今までいろいろゴメンね」

突然の発言に真行は驚いたように身を引いた。

「何を言い出すんだお前は」

「いや、さっき、蓮と話して、それで政府の役人って単語がどれだけ政府の人間を傷つけるか、って言われちゃってね、サナも嫌だったかな……って」

「もう慣れちまったから全然問題ねえよ。逆にお前から気を遣われるほうが辛いかもな。それより、さっきは怒鳴ったりして俺のほうこそ悪かった」

「それは……ッ！ あたしのほうがゴメンだよ。あんなことされて怒らない人なんて人間じゃないでしょ！」

ソラは真行の格好を見て「そんな格好して嫌じゃないの？」と訊ねる。

真行は真っ黒のシャツに真っ黒のスラックス、そして真っ白のネクタイを締めている——政府の役人の制服だ。真行が着るとビシッと決まってしまうって困る。白と黒が似合う人なのだ。本当に。最初はスーツも着ると言っており、さすがにもつたいたいと言っただけだったが、スーツもすっかり決まっていた。

「制服を処分するにはいい機会だろ」

「捨てないでよ、もつたいたい……」

どうせ汚れるからと真行は政府の制服を着たのだ。てがみ屋の制

服でも別に良かったのだが、これを着ると、傷の場所が破れて、汚れているのでそこを集中攻撃されるとまずい、ということだった。洗う時間も繕う時間もなかったし。

「局長はまた別行動かあ……」

ソラが半ばため息のように呟いたとき、蓮の姿が現れた。

「さて」

蓮は抱えていた台を地面に置き、手についていた砂を叩いて払った。

「覚悟は勿論決まっていますよね？」

「あのさ、最後に、ちよつとよか？」

座り込んでいた叶花は蓮を見上げた。蓮は人を馬鹿にするような表情を変えない。

「ごめん……蓮、ごめんね。村の人たちと一緒になって、あたしまであんたを避けるような事をしてしもうて。仲直り、できんかな……」

「仲直りも何も、一体いつ喧嘩したんですか？」

蓮はマントを放り投げた、黒いシャツがあらわになる。明らかに周りとは違う服。黒シャツと白ネクタイは政府の服装だと分かりきっている、誰も着る者はいない。

蓮はシャツの生地を引つ張って、叶花に示した。

「あなたたちは、私のこの格好を見て、避けた。政府の役人と仲良くすれば、何に利用されるか分からないからでしょう？ 恐怖のためでしょう？ でも私は辞めて来てるんだ……政府のやり方が気に食わなかったから辞めたんです。政府を辞めることがいかに大変かあなたたちは知らないから……そんなふうにまだ政府とつながってるんじゃないかと思うんでしょう……？」

ソラは隣の真行をちらりと見たが、彼は無表情だった。ソラもそれを疑ったことが幾度となくある。だって、どうしても疑わずにはられない。政府の役人は、自分の意志や気持ちを表に出さない。

何を考えているか分からないから疑いたくもなるのだ。

「確かに、私にはつながりがありました。でも、この村が暖かく迎えてくれたのなら、そんなことを無視して、政府の要求なんか跳ね除けるつもりだったんです。でも、この村は冷たかった。だから要求を飲もうと思った。私は私のことを認めてくれない村のために命を捨てるほどお人好しじゃありませんからね」

「要求って何……？」

あなたに教える義理はありませんよ、と吐き捨てて、蓮は叶花をにらみつけた。

「さて、あなたには死んでもらいましょう」

蓮が抑揚のない声で言った。冷たい瞳は揺れない。

「絞首刑です。用意もしています。さあ、台に乗って」

蓮は太いロープを結んで、首が入るような穴を作ってから、また台を持ち上げて運び、ロープを枯れかけている木に結びつけた。

「最後にもう一度……うちは蓮とまた、この村で暮らしたい。傷ついた心は完全には癒えんかもしれんけど、うちは頑張るけん、またうちの事信じて」

「戻るわけがない、どうせ命乞いでしよう。命が惜しいからそんなことを言うだけだ」

「ずっと思おうと思っと思ったけど、言えんかったと！」

叶花は膝の上で拳を握り、叫ぶように言った。

「命乞いは聞きません、さあ台に乗って」

ソラはもう我慢できなくなつて飛び出した。

「聞いてなかったの？」

ソラの声に蓮は殴りつけるように反駁した。

「聞いてましたとも、聞いていましたよしっかりと。でも、どうせ本心じゃない。この村の人間はみんな……」

帰ってきたら酷い目で見られるんだろうな、そう思いながら村に帰ったよ。

そしたらさ、案の定追い返されたんだ。

いるところがなくてさ。

それで居場所を探したんだけど、どこもみんな追い返すんだぜ？
政府の役人だから、それだけの理由で。

悲しげに話してくれた真行の声と、蓮の表情が重なった。

どんなに強がっても、寂しかった。やっぱり。

悪い、長いこと人と話してなくて……接し方が分からなくなっち
まってるんだ。口がゆるすぎる。

苦笑しながらのその言葉をソラは思い返す。

「ねえ、蓮……信じてよ。ホントに悪かったと思つとると……ホ
ント」

蓮は唇を震わせて拳を握り締め、うるさい、と呻るように言った。
「今更気持ち悪いんですよ……人間なんてろくな奴はいないんです。
自分の身を守るためになら平気で裏切る。あなたは自分がはじかれ
ないために私を独りぼっちにした。」

謝つたところで私のこの二年間は戻ってこない。帰ってこない
ですよ」

叶花は、唇を噛んだ。

「違う、うちが勇気がなかったけど、戻ってくる蓮に前と同じよ
うに接することができる勇気がなかったと。でも、最後くらい、ど
うせ死ぬならって」

「死ぬまで追い詰められないと、あなたは言えない。それほどの関
係なのでしょう。どうせ幼い頃少し遊んだだけだ」

「違う」

「違うない！」

叶花が搾り出すように出した声は、蓮の声で遮られた。

「あなたは私と友達だった事を引き合いに出して、自分を助けても
らいたいだけだ。言葉なんて嘘だらけだ。どんなに頑張ったところ
で、相手の本当の気持ちなんて分かりはしません。言葉なんて、そ
んなもの、要らなかった」

言葉がなければ、嘘を吐く事ができないから。

蓮の言葉はすとん、とソラの心の奥に落ちていった。確かにそうだ。身振り手振りでは、お互いの伝えたいことを伝えたり、分かたりするので精一杯で、嘘を吐こうなんて考えないだろう。でも。「言葉がなかったら、もつとお互いの気持ちは分からなくなりますよ。だって、身振り手振りで、気持ちはどうやって伝えるんですか」「あなたの意見なんて訊いてない！」

蓮が怒りに任せて襲い掛かってきた。気づいたら目の前に身体があつて、拳があつて、叩きつけられたと思った瞬間、地面に擦れた背中が焼けるように熱くなった。

蓮は肩で息をしていた。おそらく、ソラを殴ったからではない。

蓮の眼帯で覆われていないほうの目には美しい透明の液体が浮かんでいた。喉が締め付けられて苦しい——きつと、悲しみや悔しさが喉の奥に詰まっているのだろう。詰まるものが多いだけに息が苦しくなる。

蓮はソラの前まで歩み寄ってきて、ソラの制服の襟をつかんだ。拳が振り上げられる。

何のために殴られるのか分からない。でも、抵抗してはいけな気がした。

蓮の口から嗚咽が漏れた。拳が振り下ろされる。

ああ、殴られる。

「やめろよ」

ぱん、という軽快な音がして、拳は止まった。黒い制服が目の前に並んでいる。

真行は蓮の肩を地面に押し倒した。蓮は無抵抗で、ただただ涙が血のように地面に垂れていった。

「きついのは分かるけどさ……信用できないのも分かるけどさ、もういい加減、心開いたらどうだよ？ お前が避けてるからあいつらの声が聞こえないんだ。」

それにも気づかず、自分は一人だとか、不幸ぶってんじゃねえよ、お前の居場所を作ってくれてんだ。それも無視して、お前はそいつ

まで失うのか？ 大事にしろよ」

「あなたに説教される筋合いはない」

蓮は肩の手を振りほどこうと、真行の腹に蹴りを見舞った。真行は歯を食いしばって耐え、続ける。

「お前は政府のやり方をおかしいと思ったんだろ……？　そして生きて逃げ帰れたんだ。村もちゃんと残ってた。それって凄えことだろ？　なのに、どうして幸せになろうと思わないんだよ……　人が信じられないのは分かるけど、痛いほど分かるけどさ、お前が逃げたばかりじゃ、何も変わんねえだろ。」

幸せは望まねえと手に入らねえんだよ。

たとえ、信じて裏切られたとしても、あそこにいるより、辛くはならないから、」

「どうやらてがみ屋はきれいごとを並べ立てるのが好きなようだ。そうそう、私はいい相棒を見つけましてね、あなたの相手は私でなく、彼になるべきだ」

そのとき、誰かが歩み寄ってきた。ソラの視界に入ってきたのは、おそらく五十嵐隼だ。赤っぽく見える黒髪でそう判断した。だが、真行は驚く素振りを見せず、分かっていたかのように頷いた。

「何のために呼んだ？」

蓮から手を離し、訊ねる。

「保険です。私の気が変わったときのための。でもやはり変わりそうにないので」

「何をする気ですか！」

ソラは叫び声を上げた。

「知りたいなら、力づくで吐かせてみなさい」

戦えと言っている。足がすくんだ。大丈夫だと言い聞かせても固まったままだ。

そのとき、蓮が傍観体勢になった。隼の動きを見るためだろう。ソラも自然とそちらを向く。

真行は構えているが、隼は余裕の表情だ。

「そんなに傷負ってんのに戦えるわけ？ 頑張るねえ」

真行が砂を巻き上げて、地面を蹴る。ほんの一瞬で、隼の隣に。だが、隼はそれを見越していたかのように、とび退って真行から離れる。真行は隼の足もとに踏み込んで、左足を軸に回し蹴り。隼はそこまでは読めなかったらしく、当たった。だがその場でこらえて動かない。自分より頭が下にある真行に両の手を組み合わせて作った斧を振り下ろす。背中にと落とされた。真行は地面に叩き落され、手について腕の力で持ちこたえる。その不安定な体勢のまま、身体を逆立ちする要領でひっくり返して、足を隼の肩にかけた。足を地面にひきつけて、隼を引き倒す。

その後、すぐに跳んで隼から離れる。隼は頭を少し切ったようで、顔に血がつつと流れ落ちた。

「楽しくなってきたやつだ」

隼は嬉々とした表情で好戦的に笑い、左手に巻きつけられたバンテージに指をかけ、外した。

「コネクト」

真行が一瞬及び腰になったが、すぐにまた構える。

「武器番号一、拳」

両の拳から光があふれ出した。

「隼は電気のメッセンジャーなんです。どうです？」

「嘘……」

絶望的な状況だが、真行は退かない。そうだ、彼はいつも退かない。押して押して押しまくって勝つ。ソラは、いつも退くからだめなのだ。もう、退かない。

今度は隼から仕掛けてきた。間合いを一気につめ、右の拳を硬く握って叩きつけようとする。一発目は受けたが、それ以降は当てさせなかった。足に力が入ったのが分かった。真行は避けることもせず、拳で受けた。

「嵐荒流、守一型『向かい風』……ッ」

「嵐荒流……」と隣で蓮が感嘆の声を漏らした。

「きれいに当たるもんですね。全弾命中なんて見たことがない……」
真行は隼が打ってくる拳に全て自分の拳をぶつけて、身体に当てさせない。むしろ、押している。隼は一旦後ろに跳び退って、武器を変えた。

「武器番号二、剣」

隼の左腕に光る剣が現れた。

「来たな」

真行の眼光が鋭くなる。ソラは、もしかしたら腹の傷はこれでつけられたのかもしれないと思った。

隼が剣を構えて襲ってきた。横なぎに振るわれた剣を真行は跳躍して避ける。空中で回転し、頭を地面に向ける。

「嵐荒流、攻二型」

そして、がら空きになった隼の頭上から隼の肩に左手を置き、手を極端に後ろに引いて、

「『雷』」

弾丸のように打ち付けた。凄い音がして、隼の膝がぐんと折れ、身体がぱたりと倒れる。真行も着地こそしたものの、そのまま地面に突っ伏した。

「今のは……」

ソラは声が出なかった。初めてあんな技を見た。たった一発だ。たった一発で相手を倒す技。

「嵐荒流は相手に大きなダメージを与えられる強力な技です。ただ、自分の身体にも大きなダメージが残ります。政府の役人に与えられる武術ですよ。勿論、私も持っていますがね。女ですからあそこまですぐで強力ではありませんが、あなたを倒すくらいなら、できますよ？」

ソラの恐怖心はますます膨らんだ。でも退くな、退くんじゃない。ソラは、左腕のバンデージを外し、数秒の痛みをこらえて蓮を睨みつける。

「何をしようとしているか、教えてください」

ソラが振り上げた炎の拳は、蓮にあっさりと受け止められてしま

う。引き抜こうとしてもできなかった。

蓮は熱そうな表情をしない。どうして。ステッカーが作動していないのか。

「不完全燃焼ですよ。ステッカーの炎は本人の意志が強くないときちんとした炎にはならない。見た目だけの炎ですよ」

意志が、足りない。

「ソラ、お前と練習したときの炎は熱かったぞ」

真行の声が後ろから聞こえた。

「俺は目だけはいいんだ。口で言うからちゃんとやれ」

どういう意味が分からず、戸惑っていると、蓮が、手を離して、拳を振り上げているところだった。ソラは身体を後ろに退いた。

「右」

右にずれた瞬間、左に蓮の拳が飛んできた。蓮が心底苦々しげな顔になる。

ソラは拳を迷わず突き出した。そのとき、炎に触れた蓮が、一瞬だが、顔をしかめた。熱くなっている。

自分に足りないものが何か分かった気がした。おそらく、ソラに足りていないのは「自信」だ。

心が退くから勝てない。それなら、押せ。

ソラは、蓮の足に自分の足を絡めた。蓮は舐めてかかっていたのだろう、避けきれず、見事に足払いが決まった。が、すぐに立ち上がられた。

「風葉流、攻一型『木鋏』」

「ソラ、伏せろ」

だが、さすがに二回目は、蓮が反応してきた。伏せたが、蓮は足の軌道を変えてきた。ソラは跳び退って何とか避ける。蓮は追尾してこない。押せば反撃はされるが、逃げれば何もされないというところか。

しかしそういうわけには行かない。何を企んでいるのかが分からなければそれを止める手立てさえ考えられない。

もう真行には頼れない。というか、頼ろうとしている自分が情けなくなった。

ソラは、手に力を入れた。

「武器番号一、剣！」

炎でかたどられたオレンジ色の剣が現れる。

「ターンアップ！」

左手の甲に親指をつきたてて、回す。ソラは奥歯を強く噛んで、蓮のほうに駆ける。

剣を振りかざす。蓮はひらりと避け、ソラのから空きの腹部に拳を叩きつけようとした。ソラは反射的に手を戻し、蓮の腕を叩ききろうとした。だがそれは敵わず、突き飛ばされたソラは砂埃を巻き上げて、レンガの壁に激突して止まった。

「まだまだッ」

気合を入れて立ち上がった、頭の中で拳銃をイメージする。数年前にはあったはずの拳銃だ。今もあるのかもしれないが、高価なので、ソラの身近にはない。弾はもちろん、炎の弾。

「武器番号二、拳銃ッ！」

二挺拳銃をイメージしたので、右手にも左手にも拳銃が握られた。燃え盛る拳銃の銃口を蓮に向ける。もうここまでくると恐怖心は消えてくる。自信を持て。それがあたしの力になるんだから。そう言い聞かせて蓮に向けてぶっ放す。

蓮は一発目は避けたが、ソラががむしゃらに撃ったほかの弾を全ては避けきれなかった。ぜえぜえと息を荒くするソラに火の中から飛びかかってきた蓮は、無傷ではなかった。

「武器番号二、剣！」

番号を切り替え、凧のように蓮を切りつけた。だが、当たらない。後ろに回りこまれた。速い。振り返る間もなく、蓮の蹴りがソラの手を落とした。

「あたしだってやれるんだからッ！ あんたなんかには負けない、もう弱いとか言い訳にできる状況じゃないんだから！」

自分に言い聞かせるようにして気持ちを奮い立たせて立ち上がる。そうしないと立てない。退くな、退くんじゃない。脚を踏ん張って、立ち上がり、そして心臓がドクンと跳ね上がった。蓮がすぐ目の前にいて、丁度構えた拳銃が、蓮の胸に当たっている。

「そうやって、油断させて、何をするつもりですか」

蓮は表情を浮かべず、小さく笑った。

訊ねた。

「何を、しようとしてるんですか」

何かヒントになるような言葉が漏れたりもしないか、そんな思いで続ける。

「何のために水運びをさせてたんですか」

蓮は頑なに首を振った。だが、その反応の後、急にソラの思考回路が繋がった。

「水運びをさせたのは、この雨が降るまでに、塩害で周りの木を枯らしておきたかったから……ですよね。今日雨が降れば、この村は流れていく。この村を流すために、あなたは前々から準備をしていた」

ここまではある程度、先ほどの水を運ぶ場所を見て、感じ取っていた。だが、動機は分からない。ただ、一つだけ分かったことがある。

「あなたは隼を保険だと言った。村を流すことに失敗したときのための保険なんでしょう？」

ソラが訊ねると、蓮はふっと表情を緩めて、自嘲するように笑った。

「残念ながら、私はそこまで汚い人間ではありません」

ほら、零した。人は自分を汚されると否定したくなるものだ。ソラは少し口角を上げて、少し笑い、また口を開く。

「ということは、やはり、あなたは村を捨てきれなかったということですね。否定したということは、隼は村を流さないときのための保険だということ。そして、隼はモンスター避けのために置かれて

いた男の子供。モンスター避けの子供をわざわざ呼んだということは、この村を流さなければモンスターがこの村に上がってくるということではありませんか？ 流せば、ひどい赤潮になる。赤潮になればいくらモンスターたちでも呼吸困難に陥って死ぬから」

そのとき、近くの海の水面に輪が広がった。一つ、二つ。そして、ソラの頭にも雨が降る。

蓮は、雨粒が落ちてきたのを確認して、ソラに向き直り、笑った。「もう遅い、間に合いませんよ。私は政府に命令された。やめるための引き換え条件がこれだったんですよ。でも、村が歓迎してくれるつもりなんてなかった。でも、上手くいかなかったんです。だから、流そうと思った。でもやはり、私は流せなかった。政府は、豪雨が降ったときに、水中のモンスターが陸に上がってくることを防ごうと思った。水中のモンスターは陸上でも生活できるように進化を遂げ始めている。肺呼吸は完全ではまだありませんが、海の近く、ちょうど小さいこの村くらいまでは出てこれるんです。そして、その後にまた進化を遂げて内陸部へあがっていく。今まではそこまですぐに潮が満ちていなかったし、村の周りに、モンスターの行く手を阻むような島がありました、渡ってくることはできなかった。でも、今日は豪雨で、その島の陸地は減る。そのくらいならモンスターも渡って来れる。政府の調べによると、モンスターは人間を食うことで進化するらしいんですがね……………それなら人間を逃がせばいいじゃないかという話ですが、私を試したかったようですね。村を流せと」

蓮は小さく息を吐いた。

「そして、あなたの推理は一部間違っている。雨が降れば、せき止めるものがないのだから、私にも止められやしません。隼を呼んだのは、ただ、一人が寂しかったからです」

一人と言われ、思い浮かべた相手がもう一人いた。

「それじゃあ、麗花さんは？」

「彼は、本当に一人な訳じゃない……………彼には姉がいますから」

蓮はソラをまっすぐに見つめて、微笑んだ。悲しい笑みだった。

「撃ちなさい。もう戦いたくない。生きたくない。向こうの世界に行けば、私にも友達はあるんです。今はこんな一人ぼっちですけど」
ソラは拳銃を戻したくなかった。人殺しなんてできるような人間じゃない。そこまで据わってはいないのだ。

「ここにも居場所があるのに、どうしてそちらには行かないんですか」

蓮は目を伏せて、俯いて、そして涙を見せぬように顔を上げて。

「蓮、また、元にもどるから」

地面にへたり込んでいる叶花の声が響いた。蓮は、肩を揺らして笑った。

「生きていてというのがあたしの願いだったら聞いてくれますか？」

ソラは銃口を蓮の胸から外した。

「敵だからあなたを襲うかも知れないのに、助けるなんて、なんて無用心な人でしょう？ でも、あなたのお願いであれば、生きていてもいいかもしれません。お願いされるのは別に嫌なことじゃない」
何でもいい。自分の言葉が命を繋ぎ止める枷になってくれるのなら、それだけでソラは嬉しい。

ステッカーにバンデージを巻いて炎を止める。そして、黒く、重い空を見上げた。雨はひどくなっている。

さつとあたりを見渡すと、麗花の姿がなかった。

「麗花なら、村人を呼んでくるとか何とか、堤防を作れば、村は流れないで済むんだとよ」

「そんなもん作れるの？」

「材料があるらしい、あとは協力してくれるかどうかだな」

真行が腹をおさえて立ち上がった。黒のシャツ、しかも雨で濡れているので目立たなかったが、少しだけしみになっている。あれだけ動き回って傷が開かないほうがおかしい。

「お疲れ！」

真行は「ああ」と曖昧な返事を返してきた。

「まだ終わってないけどな」

その次の瞬間に、麗花が村の路地から飛び出してきた。そしていきなり、泣きそうな顔で叫んだ。

「大変です、村人が一人もいないんです！」

蓮は苦笑した。

「さっきの言葉を聞いて逃げ出したのですかね、そうは見えなかったが」

「とにかく、僕たちだけでも！」

麗花の後に皆が続く。麗花は途中で息切れが激しくなつて走れなくなったが、真行が肩を貸して一緒に走った。雨はどんどん強くなつていく。流れていく砂が見えた。このままだと、まずい。

鉄板をおいていた筈の場所に行くと、人がいた。つなぎ姿の男だった。それも、一人じゃない、かなりの数。香焼村の村人全部だ。どうして、というその理由は、こちらに大股で歩いてきた。

「遅かったな！」

鉄材を抱えたまま、こちらに笑顔を向けたのは、淳だった。この人は、もしかして、ソラたちより早くに全ての謎が解けていて、村人を集めてくれたのか……。

「敵わないや」

ソラはため息を漏らした。麗花なんてぼけーっとしている。

「どうしてこの場所が分かったんですか」

「む？ お前が船を解体してるところに行き会ったからだ。ソラたちからお前の話を聞いていてな、節約家だというんで、まず解体したものは捨てんだろう？ そしてお前は身体が弱いと聞いた。それなら、こんな重いものをそんなに遠くに運べるはずがない。運んでくれるような味方もいなかったんだ。それなら、造船所のすぐ近くにおいてあるはずだろう？」

淳は、得意げに論じてから、「さ、急いで運ばないと間に合わないぞ」とソラたちを急かした。鉄材を持って外に出ると、堤防はほぼできつつあった。ドッグがあったおかげでしっかりとした土台もある

るし、皮肉なことに蓮が水運びをさせていたおかげで、水運び集団の怪力が発揮され、あつという間に作業が進んでいたのである。モンスターが来るまでにできれば、こっちのものだ。水中のモンスタ―たちは陸へ上がるために高い壁を越えることができない。それに、身体を外に出したままだと、いくら進化したといっても、体当たりの威力が弱まる。水中はしっかりしたドッグの土台だからそうそう倒れはしない。そして、リアス式海岸の土地なので一気に入られることもない。数匹のモンスターたちが体当たりするのがせいぜいだろう。それまでに、村の周りからの砂が流れ出て、赤潮になる。雨の中を運んで。組み立ててを幾度もなく繰り返し返したところで、村をぐるりと囲む堤防が完成した。

エピソード

潮が引いて晴れ渡った一日後。村は流されずに済んだ。麗花と蓮は村人たちから感謝され、蓮の紹介で、隼もはじかれることはなくなった。だが、まだそれは表向きの話で、完全になくなったかどうかは分からないが。きっとこの村ならやるだろう。きっと元に戻してくれる。本当はいい村のはずなのだ。このご時勢、不満の捌け口が村八分にむくのは不思議なことではない。

決して幸せな世の中ではない。誰もが何かを抱え込んで生きている。

ソラは、堤防を外し終えたあとの村人たちの中で、真行の隣に座っていた。相変わらず意地悪で性格が悪い男だが、別に嫌ではないむしろ、気を遣わなくて良い相手であると思って感謝している。だから、きちんとした紙に、きちんとした言葉を書いて、真行の手に押し付けたのだが。

内容はごめんとありがとうだ。真行が政府の役人なのは過去だから、もう関係なく接する、もう二度と言わない、と宣言した。真行はもう慣れっこだから良いといったが、ソラには納得できない。

「局長に言ったら、勝手に紙使ったって怒られるから言わないでね」
真行は紙を見るなり、嫌そうな顔になり、

「お前が俺に対して殊勝になるときは、決まってよくないことが起きる」

とか何とか言って、海の中に早速投げ捨てた。

「もったいない！」

と言ってぶん殴ったら「ほらよくないことが起き……」

「あんたが捨てなきゃ起こらないわよッ！」

そして一つ蹴りを。

「あいつた……」

今日の真行は膝が痛むらしく、筋肉痛もあるということ、かなり情けない人になっている。

「誰に？」

お決まりのツツコミを入れて、ソラは鼻息荒く、真行の説教にかかった。タイトルをつけるとしたら

「手紙のよさと、紙の大切さ」だろう。

空は澄んでいて、大きく、どんなに時がたっても変わらないと信じたい。

そして、そんな偉大な空と同じように、手紙もずっと残っていてほしい。そのためにソラはずっと手紙を配り続けたいと願い続ける。

エピローグ（後書き）

てがみ屋、ついに完結しました。この作品はまだまだ書き直すべきところがありますが、しばらくは保留にして、次の作品を書きたいと思います。しばらくたってから読み返したほうが未熟な点がより多く分かると思いますので……。

反省すべき点もたくさん見つかった、初のPCでの作品でした。それでも書き続けていけたのは読んでくださる、皆さんのおかげです。

そして、長編を完結できた喜びは、なにものにも代えられません。だから、書き続けていきます。

おかしな点、誤字脱字などあるかと思っています。もしよろしければ、教えてください。

<http://622.namidaame.com/anketegamiya.html>

こちらでキャラの人気投票を引き続き受け付けております。

投票よろしく願います。

私の拙文を読んでくださり、本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4649o/>

てがみ屋と水を運ぶ村

2011年4月17日15時40分発行